911.6-U32
1200500756983

彝孝本

911.6-U32ｳ
1200500756983

工ト013

911.68
U 32

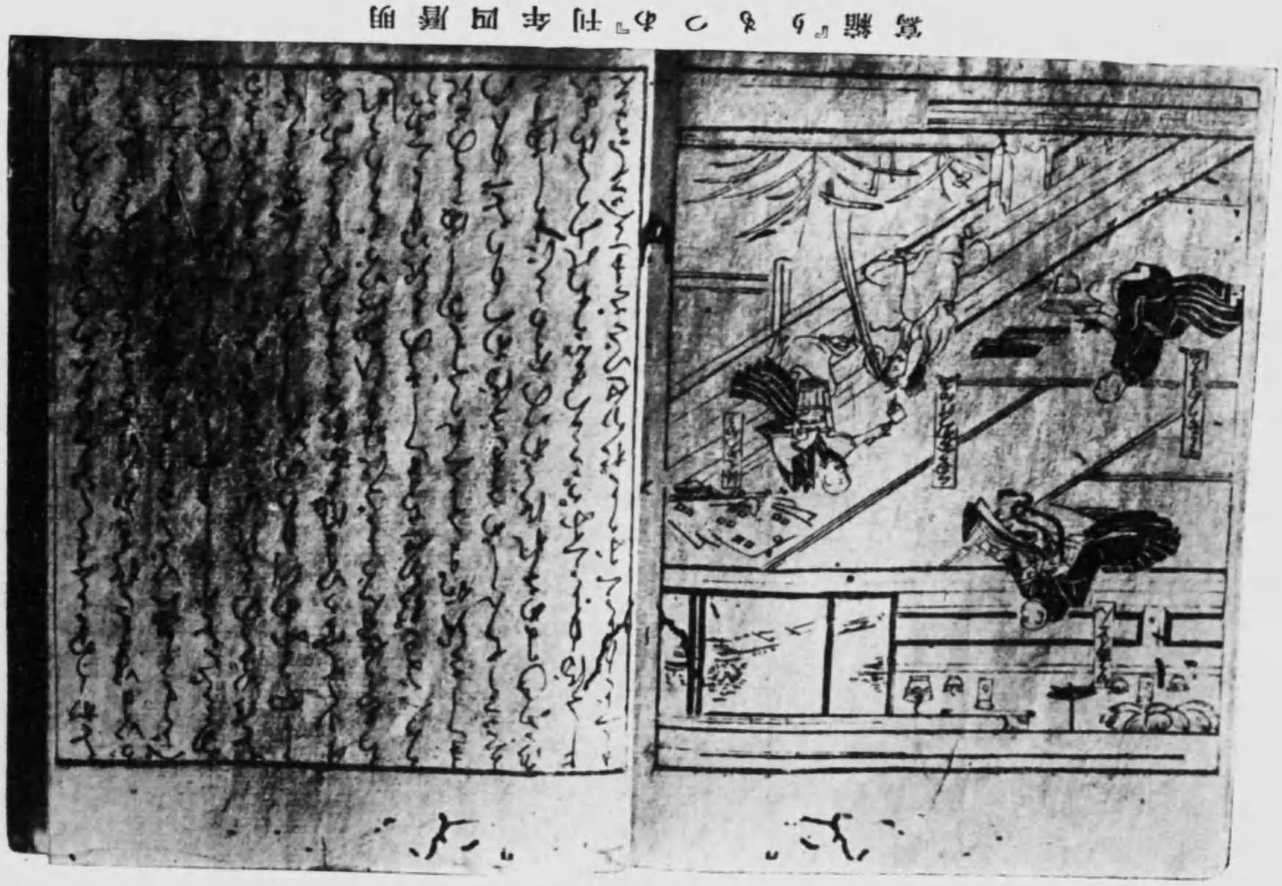
文學博士上田萬年校訂

葬式本

全

東京　金港堂書籍株式會社

國立國會圖書館
昭 24. 3. 15
寄贈



舞及間狂言十六種　寫本　一六冊

おひさかし　奈須與一　勅進帳
常盤御前　くさつりひき　高館
伊藤入道　頼朝記　清盛
大織冠　義經　梶原景時
堀河夜討　夜討曾我

國文—一四〇三八五

緒言

室町時代の文學には謠曲、狂言を始として、御伽草子あり、俳諧連歌あり、義經記、曾我物語などもあり。ことに謠曲は當代文學の花と稱せらる。今、この花とともに、世に紹介すべきものあり。幸若舞の詞、所謂舞の本これなり。

幸若舞一に舞舞ともいふ。源義家より八代の後胤、桃井播磨守直常の孫、宮内少輔直詮の始むるところなり。直詮童名を幸若丸といふ。幸若舞は幸若丸が幼時比叡山にありて、寺僧を慰めんがためにしいでたるものなりと傳ふ。その時代未だ明かならず。

石見太郎左衛門尉ハ三條殿ニ幸若舞ノアリシ終テ群集

人々カヘリニ辻切ノ樣ニ山名殿ヨリゾ討セケル

と見えたれば、すでに足利義政の頃より行はれたるを知るべし。應仁別記以後德川以前の書には、幸若舞につきて記したるものあまり見當らざれど、幸若八郎九郎義重が織田信長より太刀を賜はり、幸若八郎九郎義門が德川家康より槍、脇差、黑印などを賜はりたること幸若略系に見ゆ。思ふに、應仁以後、能とともに行はれたるものなるべし。

幸若丸の末は、幸若八郎九郎、幸若小八郎、幸若彌次郎の三家に分れたり。德川幕府時代となりては、三家ともに越前に居住して、近く維新前迄、世々幕府の祿を食み、文政の末年頃迄は、定時參府して舞曲を將軍の上覽に供したり。

幸若舞の最も廣く世に行はれたるは、元和、寛永の頃より寛

文延寶頃迄の如し。元和年間に成れる安樂庵策傳が醒睡笑には、特に舞の部を設けて、種々の失錯談を掲げたり。新見正朝の昔々物語にも「昔は幸若舞はやり、振舞の節呼ぶ。幸若八郎九郎、その外、傳右衞門、市右衞門など數十人有之云云」と見え、春臺の獨語にも、「寛文、延寶の頃迄、諸侯、貴人の宴饗にもこれを用ひて、心を慰め、酒をもすすめけるに、元祿の比より、猿樂盛んになりて、幸若の舞世にすたれたり。」と見ゆ。幸若舞につきては、天和年間に成れる雍州府志の傳ふるところ、最もその要を摘めり。曰く、

又一種有舞舞。凡舞有兩流、越前幸若流并大柏流是也。幸若自稱桃井直常之裔。代代領公方家之祿。其舞詞或戰場之事、盛衰之變、戀慕之情、種種有三十番。其後所作是號新曲。其所

唱曲節音聲與猿樂之所唱大同小異。是亦有太夫。其左右二人連舞、是稱連又謂脇大小鼓助之。

と。

舞の詞は、貞享の書籍目錄に

大織冠　滿仲　志田　百合若大臣
夜討曾我　十番切　富樫　笈さがし
高館　敦盛　景清　烏帽子折
八島　伏見常盤　文覺　鎌田
築島　新曲　和田酒盛　いづみが城
元服曾我　小袖曾我　四國落　常盤問答
堀川夜討　笛の卷　いぶき　硫黃が島
馬揃　未來記　木曾願書　那須の與一

濱出　入鹿　清しげ　腰越

の三十六番を掲げ、後の群書一覽には、鎌田、いづみが城を除き、夢合、劔讃談を加へて、同じく三十六番とせり。されど以上三十八番の外に、張良、靜、切兼曾我、鞍馬出などなほ數番あり。

舞の詞の何時何人の手に成りしか明かならざるは、なほ謠曲、狂言などの明かならざるが如し。嬉遊笑覽その他には、單に義經記、曾我物語などと同時代の作なるべしといへり。されど、この二書はともにその時代明かならざる書なり。加ふるに、曾我物語の如きは異本數種ありて、流布本の如きは、後世潤色を加へたるものの如く、その流布本にのみ見ゆることの舞の詞にもあるが如きことありて、容易にその時

代を明め難し。 要するに舞の詞も、謠曲が足利義滿の頃より豐臣秀吉の頃迄に次第に成りしが如く、逐次に成りしものと見るが穩當なるべし。

舞の詞には、平家物語より出でたるものと、義經記、曾我物語と材を同じうするものとあり。 また、その出處明かならざるもの數番あり。 この出處明かならざるもの、最も古きが如し。 大織冠、入鹿、百合若大臣などこれなり。

謠曲と舞の詞とは、ともに平家物語の一變したるものにして、その性質を同じうするところ少なからず。 ただ舞の詞の謠曲よりも、所謂語句多くして引句少なきの差あるのみ。ともにその材を多く源平時代に取りて、同種の佛教思想に富めり。 謠曲に關原與市、烏帽子折あれば、舞の詞にも、鞍馬

出、烏帽子折あり。 またかれに安宅、八島あれば、これにも富樫、八島あり。 その他、鎌田、景清、敦盛、元服曾我、切兼曾我など皆その材を同じうし名を同じうせり。 甚だ密接の關係を有するものといふべきなり。 文體よりいへば、前人の佳句、麗詞を補綴して律語の體をなせること、遙に謠曲に及ばずして、まま御伽草子に似たり。 舞の詞の文體は謠曲と御伽草子との中間にあるものといふべきなり。

謠曲、舞の詞、御伽草子は、ともに德川時代の淨瑠璃、小說のよつて起りたるものなれども、そのうち最も淨瑠璃に關係あるものは舞の詞なり。 所謂古淨瑠璃と稱せらるるものは、文體最も舞の詞に近し。 かつ早く六字南無右衞門が、舞の高館、八島などを語りたることもあり。 その他、築島、志田、和

田酒盛、大織冠、百合若大臣など、何れも淨瑠璃の六段物となりて現れたり。

本書はさきの四十餘番のうちより、義經記と材を同じうせるもの六番、平家物語より出でたるもの四番、曾我物語と材を同じうせるもの二番、出處不明のもの三番、合せて十五番を選べり。

このうち、百合若大臣は、近松巢林子の手に百合若大臣野守鏡となりて現れ、烏帽子折に見えたる山路が草苅笛もまた用明天皇職人鑑となりて現れたり。その他入鹿のうちに見ゆる鎌足が盲目をまねびて、幼時狐より與へられたる鎌もて、入鹿を誅することも、同人の作大織冠のうちに見ゆ。ひとり巢林子のみならず、紀海音の作、玄宗皇帝蓬萊鶴に見

ゆる、楊貴妃と虞子君とが骰子を爭ふ一段の如きも、和田酒盛の引事を移したるに似たり。

舞の本は、早く明暦の頃刊行したれども、世に遺れるもの極めて尠し。本書は一に寛永頃の古寫本により、曲節、句切、みなこれに從へり。唯、百合草若大臣一番のみ曲節、句切なければ、普通の句讀を施して、見易からしめたり。また、當時普通に誤用せられたる、おとを、をとほ、うとふなどの假名遣を正し、見易からしめんが爲めに、假名に漢字を宛てたる所多し。漢字を宛つるにいかがと思はるるものはこれを括弧のうちに置きて傍書とせり。また括弧のうちに入れずして傍書とせるものは、義經記、曾我物語等に見えたる文字をあてたるものなり。

刊本には、稀に句切を施したるものあれど、曲節を示したるものなし。本書の曲節のあるところ、珍とするに足るべく、また、平家、謠曲などとの關係を研究するに、缺くべからざるものなるべし。

明治三十七年五月

校訂者しるす

舞の本

目次

未來記……一
鞍馬出……一二
烏帽子折……二四
富樫……七三
笈さがし……九五
高館……一二四
硫黄が島……一七〇
文覺……一八一

敦盛……二〇九
奈須の與一……二四四
元服曾我……二五三
和田酒盛……二六九
入鹿……三〇三
信田……三二二
百合草若大臣……三八〇

舞の本

未來記

上田萬年校訂

鞍馬の奥僧正が崖と云ふ所へ。夜な夜な大る問ひ来て、鞍馬の奥僧正が崖と云ふ所へ。夜な夜な遊び給ひけり。天下を治めんその爲に。兵法稽古の嗜なり。抑兵法と申すは。三略の御書たり。昔大唐ゑやう山のそうけいが傳へし秘書なり。吉備の大臣入唐。し八拾四卷の中より。も四十二帖に抜き書きて。我が朝へ渡されしを。坂上の利仁九年三月に習ひ。敵を鎭め給ひけり。さてその後に田村丸十二年三月に習ひ。奈良坂山のかなつむで。鈴鹿山の盜人斯かる逆徒を平げ。天下を守

り給ひけり。さてその後に廢り叡山に籠められしを白河院ちのこのかうべ。習ふとは申せども。さした る勇はなかりけり。去る間牛若殿、只山壑を走り廻り。枯木の枝を傳ひ。御身を輕め給ひけり。爰に天狗どもさし集り。内議評定する樣は。そも〳〵當山は。慈覺大師の秘所として。行人ならではこの山へ通ふものもなかりしに。鞍馬寺の牛若が。我等が接家を嘲る事。その謂れなき物を。いざや天狗の法罰を。當てんなんどと申しけり。愛宕の山の大天狗。太郎坊申す樣。そも〳〵この兒不用にて。親にも師にも不孝ならば天狗の法罰當つべけれども。父母孝養のその爲に。兵法稽古の嗜なり。父母に孝養有る者は。必ず天道の加護を蒙るに。罰し給はん

詮議こそ。然るべくもなしといふ。比良の山の次郎坊。進み出でて申す樣。そも〳〵我等が異名を天狗といふは謂れ有り。昔は人にて候ひしが。佛法を能く習ひ我れより外に智者なしと。大慢心を起す故。佛には成らずして。天狗道へ落つるなり。たとへ慢心多くして。この道へ落つるとも。情を如何で知らざるべき。いざや牛若合力し。天狗の法を免し。親の敵を討たせん。尤然るべしとて。宗徒の天狗七八人。若山伏にいで立ち。牛若殿の前に行き。如何に少人聞召せ。抑この邊に人住む所候へば。御出で有つて暫く御遊び候へや少人とこそ申しけれ。牛若殿は聞召し。これ唯者と思さねど。何の仔細の有るべきと思召されける程に。山伏の肩に。乘り其處とも知

らぬ山を行き。深き谷に分け入り。何處迄牛若を。具足するぞ怪しやと。思召されける程に。山の氣色と木の木立。かんれい峨々と聳えて。萬木枝を並べては花しやうゑんに。盛なりりたる香は香うばしく。松柏綠色深し。瀧の音玲々と。響き岩間を潛る音。是れや寔にしやうりやう山のききとく苑かと疑はる。爰は本堂併びに拜殿玉を磨き神殿に珠玉を聯ね。九重の塔は。雲に聳え。坊中棟を并べつつ。門々甍を續けたり。斯程目出度き御寺の。此の仙谷に有りけりと。思召され。ける程に暫く立ちて。おはします。

コトバ かかりける所に。ある大坊の客殿に。宗徒の大衆百人許り連座して。管絃講の玩び。笙ちやく琴箜篌絃管を

調べ。面白かりける座敷なるか。牛若殿を見付け參らせ。管絃を止めてていしやう申し。遙の座上に据ゑ參らせ。山河の美食を調べ。珍饗を盡して遇し申す。亂舞になれば天狗共。我れ劣らじの遊び事。てんこつの物の上手が。無盡の曲を盡して。我れ劣らじとぞ狂ひける。老僧達申されけるは。遊び許りにて事ゆくべきか。源平の合戰の。この末に有るべきを。豫ねて知つて侍るなり。少人の御遇しに。まなびて御目に懸けよといふ。承ると申して。ゆゆしげなる天狗が。これは平家の大將。安藝守清盛と名乘つて進み出で。安藝の國嚴島の明神の。御計らひによりつつ。この世を今より治むべし。平家に野心の有る者をば。都の内に置くべからず。薩摩潟硫黄が島へ流す

べし。法皇をば鳥羽の古宮に籠め奉り。清盛が子供いよいよ繁昌し。一門六十三人は。何れも官祿重かるべし嫡子次男は左右の大臣。孫は國王。或は百官卿相なり。

あぶれ源氏の末々を亂を斷つて亡すべし。南都に敵が籠ると聞く逆徒強くて。手に餘らば大佛殿に火を懸けよ。うけたまはると申して。ゆゆしげなる天狗が。本三位の中將重衡と名乘つて。三千餘騎を率して。南都へ押し寄せて。大佛殿を燒き拂ふ。春日の御咎め強くして。既に早清盛は。火の病を請け取つて。焦熱地獄のかなやの焰。爭でこれには勝るべき。あら暑や悲しやと。こがれ死にこそ死んだりけると。斯樣に清盛の。早一期を語つて。颯と入る。斯かりける所に。ゆゆしげなる天

狗が。これは平家の世嗣。右大將宗盛と名乘つて。冠束帶の裝束にて。ゆゆしげにて坐せられたり。不思議や平治の亂の時。伊豆の田中へ流されし。賴朝世を亂り。伊豆の目代山木を擊つて。相模の國石橋山に幡を靡かせ楯をつく。大庭の三郎押し寄せて。石橋山を射落す。賴朝主從七騎にて。武藏の國へ落ち給ひ。こゝの六所ぶんばいに幡を靡かし。續く味方を待ち給ふに。われも〳〵と參ぜられけるを。着到付けて見給ふに。夜日三日がその內に。賴朝の御勢二十八萬七千餘騎。旗の下に相靡き。先陣は相模の國。小林の鄕に京を立て。新鎌倉とざざめく。爰に信濃の住人に。木曾の冠者義仲は。平家を攻めんその爲に。五萬餘騎を率し。信濃の國を打つ立つて。

越後の府に着きしかば。越路に懸かり攻め上り。ツメ都間近き越前の燧が城に陣を取る。平家の人々肝を消し驚き騒ぎ給ひて。十萬餘騎にて都を立つて。近江の國とかや。荒乳を越えて。ちのめ山打ち越え。かへるの山に陣を取る。源氏は屈竟の城廓に籠つて。左右なく落つまじかりしを。或人のたばかりにようこくの關を破られ。怺へ兼ねて落ち給ふ。平家後より攻め續く。加賀の國篠原安宅の戰は。天地も響く許りなり。其處をも義仲打ち負けて。加賀越中の國境倶利迦羅山に陣を取る。平家の人々勝に乘り。彼の山へ攻め上る。その時源氏の氏神。八幡大菩薩の。御計らひによりつつ。平家三萬六千餘騎は一夜が内に倶利迦羅の。谷の朽木と滅び果つ。平家逃げて上り

しを。源氏後より責め懸かる。平家都を落され神器を取つて遙なる。福原の京に落ち給ふ。コトバ去る間義仲は。天下を守護し奉り。ゆゆしく見えて今は早。木曾の政道たるべきが。賴朝の果報に蓋はれ。代を背くべき瑞相有り。

サシクドキ

平治の逆臣は流石情の有りつるに。ああら憂かりけるかな源氏の逆風。四海に吹き荒れて。雲の上迄浪高し。賴朝聞召されて。君を守らん爲にこそ。義仲都の守護ともあれ。却つて天下を惱ますは。重ねて凶夷なるべし。その儀ならば討手を上せんとて。大將には蒲の冠者範賴。この牛若殿元服して。九郎義經と名乘るべし。牛若をば鞍馬の多聞。伊勢の兩社。守り守護し給ひ。きん

ようを顯し。　箕裘の家を繼ぐべきなり。　これによつて範頼義經を。　兩大將と定め。　都へ攻めて上るべし。　無慙やな義仲は天下の嫉まれ朝威の罰弓箭の末も。　頽れ果て粟津が原で討たるべし。　義經都の警固として。　三種の神器事故なく。　都へ返し申さんと。　三草の峠鵯越搦手を廻し攻め入るべし。　平家怺へで城を落つ。　汀の水屑となり果つる。　終には西海の赤間門司壇の浦。　早軻が沖にて。　二位殿先帝。　宗盛を始め奉り。　平家三萬六千餘騎は水の泡と消え果つべし。

さてその後に牛若殿。　兄に嫉まれ給ふなよ梶原に心許すべからず。　兄弟の中。　不和ならば。　その身の運は盡くべきなり　六親不和にして三寶の加護は。　よもあらじ。

カタツメ　ここまで末をば敎へぬ。　さてその後を知らぬなり。　これ迄請じ參らせて。　對面申すしるしには。　天狗の法を許すなり。　これを守りに懸けよとて鐵の玉を取り出だし。　牛若殿に參らせて。　搔き消す樣に失せければ。　ありし所は打ち失せて。　僧正が崖なる。　松の枝にぞおはしける。　さては天狗が牛若を。　かどへけるよと思召し。　東光坊に歸らるる。

鞍馬出

扨ても六波羅の御所には。牛若殿の悪行の身に餘ると聞召し。御一門さし集つて。御評諚はとりどりなり。彼の者生立つものならば。當家のゆゆしき大事たるべし。打つて捨つるか。忍びて流すかなんどと。評諚ある。母の常盤は聞召し。あるにあられぬ御身にて。忍びて文を遊ばし。牛若殿につけ給ふ。牛若文を御覽じて。かやうに母の御手より。文を賜り。何處の國。誰やの人を。頼みて。下るべしとも覺えずや。所詮牛若。御本尊より外頼み申す方もなしと。講堂に御參りあり。夜とても祈請を申されたり。抑毘沙門と申すは。四天の中の第一

に。八天童の尊者たり。佛法護持のために。弓箭を守り給ふなり。牛若が一期の本望は。身のため起す謀叛ならず。父母孝養のそのために。平家を討たんと思ひ立ち。兵法稽古の嗜なり。多聞の十種の福をば。父母孝養せんものに。與へんといへる誓なり。本誓今に違はずば。牛若にこそたぶべけれと。深く祈誓を申し。うちまどろみたる御夢に。白き兎と。鼠とが。袂に入ると御覽じて。うち驚き思召す。兎は東の物。鼠は北の生物なり。東北の隅をば。丑寅とこそ名づけたれ。伊舍那天と申すは。此方におはしますと。故に名づけつつ。多聞天と申すなり。毘沙門の住家をば。へいしらまなやしやうと。米の降る都なり。如何様も牛若は。丑寅の方に立ち

越えて。世に出でよとの示現かや。あら不思議やな。北と東の間には。誰やの人を頼みて。下るべしとも覺えずと。まだ幼き御心に。つくづくと案じ給ひけり。

コトバ既に天晴れまだ早朝の事なるに。道者四五人入堂す。尊者と覺しき男の。有德の人と覺しくて。御鉢に黃金を蒔き入れ。珠數さらさらと押し揉んで。千五百里の道の間を。安穩に守り給へと。深く祈誓を申さるる。その後格子の内よりも。五十許りなる僧出で。御道者は何處の人ぞ。態の參りか。便宜ざうか。いや便宜ながら態と參りて候ぞ。側なる法師がこれを聞き。御邊は未だ知らぬか。あれこそ都に隱れもなき。三條の金商の吉次殿よといひければ。あう去る事あり珍しや。奥よりも何時の比

の。御上りぞ。去年の冬罷り上りて候が。餘寒やう〳〵打解けば。この間に罷り下り候べし。さもあれ音に承る。秀衡殿と申すは。如何程の分限の人ぞ。秀衡殿と申すは五十四郡の總追。捕使。白川の關よりも。東は殘る所ましまさず。在廳國民相從ひ。勢を持つ事は。その數を知らず。日本半國よりなほ大き分限とこそ承れ。扨て其の人は奥州の住人か。いや都の人と承るが。一年源氏の御大將。八幡殿と申せしが。奥へ下らせ給ひ。貞任宗任安任を平げ御上洛の御時。奥州の守護代を。彼の基衡に下したぶ。五十四郡の國人は。みな基衡に思ひつく。剛きを和げ。弱きを撫で。民を憐び政事御法に任せて執行ふ。國の靡き從ふ事は。草木の風に靡くが如くなり。かくて

奥を治めつつ。秀衡殿の代には。吹く風も聲を止め。立つ浪も岸を洗はず。よき大將と承る秀衡殿と申すは。そくしやうよき人にて。國をもよく治め給ふ。七珍萬寶飽き滿ちて。ただ長者の位と申すなり。

牛若殿は聞召しこれは多聞の詫宣や。秀衡は先祖の下人。賴み下るものならば。情無くはよもあらじ。吉次を賴み道伴して。下らばやと思召し。吉次と深く約束をめされ。東光坊に御歸りあり。常の所に御入あつて。旅の出立をしたまふに。涙も更にせきあへず。何時も御身をはなされぬ。金作りの御帶刀。こんねんとうの腰の物。これぞ忍びて持たれたる。召仕はれし童の。藍摺の直衣に。御身の召されたる。精好の大口を。召し替へさ

せ給ひ。御髮唐輪に高くあげ。七歳の御年より。住み慣れさせ給ひたる。東光坊をただ一人。小夜に紛れて出で給ふ。流石に御寺の御名殘かたへの兒達こじ同宿の名殘ども。愛念深き人多し。未來をかけて契りしもの。今も知らせてあるならば。前後を守護し行くべけれども。人目を忍ぶ旅なれば。ただ一人ぞ御出ある。志こそ哀なれ。師匠に名殘の惜しければ。紀念のためと思召し。一首の歌をぞ殘されたる。思ひきや身を奥山に住居して。このみ一つになりゆかんとは。かやうに詠じ給ひ。庭の名木名石どもを。何時の世にかは立ち歸り。又見んずらん味氣なや。桃李物いはねば。我が出でぬるをよも告げじ。梅鷄舌を含めども。なと曉を知らせぬぞ。扨て本坊

を立ち出で。地主權現伏し拜み。あか井の水もさへ曇り。影さへ宿す。月もなし。七つに曲る鞍馬坂。夜更けて物うき道の邊を。貴船の神の社こそ。かつ賴母敷く聞えけれ。名殘ぞ惜しき市原の。立ち止まりて。御菩薩池。千早振るらん上賀茂の。道を糺の森過ぎて。夜はほのぼのと白河や。吉次に今も粟田口。早や松坂に牛若殿。程なく着かせ給ひけり。

コトバ　待つ吉次は見えずして。美濃の國の住人。關原の與市。わうばんを請取つて。夜を日についで上りしが。その夜は大津に宿り松坂のあたりにて。牛若殿に參り合ふ。牛若殿は御覽じて。源氏の物への門出に。平家の郎等に逢ふところは。無念なり。如何樣彼奴に見合ひ。都に披

露させては。惡しかりなんと思召し。扇をかざし。編笠を傾け。去らぬ體にて御通ある。與市が馬と申すは。あけ六歳の野取の駒。物を見てはきれやすし。宵に降つたる雨水の。道に溜りて有りけるを。そぞろに蹴上げける程に。牛若殿の直垂は。ただ絞る許りに濡れにけり。牛若殿は御覽じて。駒の足立しどろなり。惡しくも行き逢ひけるやとて。其方も見ず逃げ給ふ。與市らくに誇つて。逃ぐる心のいたいけさに。手綱も執らで蹴かけたり。牛若殿は御覽じて然るべくば御馬を靜に打たせ給へよ。我等が樣なる童こそ。蹴上の水をば厭はずとも。都方の弓取の。咎むる方も候べし。手綱に餘らばその馬を。捨てて御通り候へ。あつたら馬を捨てうより。やあ下りて引

けとの御諚なり。與市無念の詞を聞き。子程の者にあてられて。返事をせぬものならば。京田舍の物笑となるべし。又知らぬ體にて通りたらば。さして難にもなるまじきを。運の極めの悲しさは。あれ程の童。あつれば路次の狼藉。あてねば時の恥辱。太刀の峰にて打ちふせて。追ひ失へと下知をする。承り候とて。若黨三人中間六人。以上九人の者ども。太刀長刀の鞘をはづし。聲許りにて威さんと。おれは〳〵とぞ威しける。牛若殿は御覽じて。己等が有樣は。稲荷祭か祇園會か。賀茂の祭の物眞似か。具足に風をひかせんとや。恐ろしうもないぞとて。から〳〵とぞ笑ひける。與市この由聞くよりも憎い奴が詞かな。具足よこしに切りばしすな。太刀の峰にて打ち

ふせて。追ひ失へと下知をする。承り候とて。眞中にとりこむる。牛若殿は御覽じて。僧正がかけにて。習はせ給ひし天狗の法。出逢ふ所と思召し。大勢の中へ割つて入り。向ふ者を拜切。馬手へ廻るは車切。弓手へ受けて左太刀。寄せてはかへすさざ波切。梢をもむは嵐切。天狗倒しの笑切。爰はと思ふ秘事の手をば。殘さずこそは使はれけれ。牛若殿の御帶刀。ひらめくと見えしかば。手の裏未だ反へさぬ間に。六人死んで三人は。痛手負うてぞ平伏しける。與市この由見るよりも。あれ程の童。たとへば十四か十五かに。如何程も餘らじ。手並見せんといふままに。駒かけ寄せてちやうと打つ。牛若殿は御覽じて。彼奴は日本一番の。をこの者にてありけるや。

直に切て捨てては。思出のあらばこそ。なぶり切に彼奴をして。遊ばばやと思召し。請太刀になつてぞ廻りける。與市この由見るよりも。さればこそこの童。逃げて行くか何處まで。逃がさんとやあ投げかけ〳〵切つたりけり。牛若殿は御覽じて。何時まで彼奴をなぶるべきと。思召し。弓手にきれてかひちかひ。與市が馬の三頭を。ひらき打にちやうと打つ。馬は打たれて跳ねければ。鞍だまに取られて。眞逆樣にどうと落つる。起きん〳〵とする所を。走りかかつて峰打に。ちやう〳〵とぞ打つたりける。少しもくぼき所にて。雨水に濡れにけり。牛若殿は御覽じて。あう勿體も候はず。兒と女には御免さうかや。馬より下るる慇懃さよ。御供の者は何處にあるぞや。あ

の馬ひいて與市殿を乘せ申せ。それ〳〵とありしかど。返辭する者なかりけり。牛若殿馬を引き寄せ。これに召されて。御歸り候へや。與市殿とありしかば。與市餘りの恥かしさに。馬も下人もふり捨て山科寺の傍に。深く忍うで居たりけり。それよりも牛若殿。奥へ下らせ給ひて。天下を治め給ひけり。

海軍わた 20-1

金麦吉次
吉金麦買し、麦
金高ニアラズ
中古、金麦々鑑
此ノ間仲澤伯爵子
ゆりし、迫り吉次
イヒシ。

十五ハ二ヘ脇つ(ぎつる)
一度、
さきみ(?)ハ十三ヘス

烏帽子折

抑頃は安元元年三月中旬に。源の牛若殿鞍馬の寺を御出あり。今日喜は近江なる野路の宿にて吉次信高に行き逢はせ給ふ。その日のとまりは鏡の宿。吉次が宿は菊屋と聞うる。鏡の宿の遊君。雑餉構へ吉次殿をもてなす。去る間吉次順の盃くだし逆の盃とばせければその後は酒盛になる。

あら痛はしや牛若殿は。人目をつつませ給ふ間。切戸のわきにすご〳〵と。ただ一人たたずみ給ふ。ここに平家の侍大將監物太郎よりかた悪七兵衛景清。早馬に乗つて馬場の宿よりも觸れて通りけるは。この路次を十六

七の少人の。通らせ給ふことのあらば。都へ御供申し上りたらんずる輩に。上下をえらまず勳功あるべしと觸れてその日に都へ通る。

牛若殿聞召し。この儀にてあるべくば。なにしに鞍馬をば出でけるぞや。夫れ八正のおほち廣しと申せども。年にも足らぬ牛若が。身の置所のなきこそ何よりもつて口惜しけれ。あう思ひ出したり。只今は兒とこそ觸て候へ。男と觸てあらばこそ。所詮男に成りて下らばやと思召し。下女を近づけ。なうこの邊に烏帽子折ばしさうか。下女承はりて。今日都より下らせ給ふ人の。これにて烏帽子を御尋候や。さりながら御望にて御座候はば。あの向ひなる高雲雁のうちこそ烏帽子の上手にて候へ。牛若斜に

思召し雲雁のうちへ尋ね入つて。案内申さう。うちよりも誰そとこたふる。苦しうも候はず吉次信高の供して下る冠者にて候が。烏帽子の所望に參りて候。その時烏帽子折牛若殿を請じ申し。烏帽子箱取り出し。冠者殿の召されうずる烏帽子は。大さびさうか。しんせいやう當世様。如何様なるを召されうぞ。御好み候へ。やがて折つて參らせう。牛若殿聞召し。烏帽子はただ黒ければ黒しとばかり心得つるに數多の名のありけることよ。何とがな折らせうな。思ひ出したり我等が先祖は左折を召さると承り及びてあれば。人數ならぬ牛若も。左へ折らせて着ばやと思召し。なう大夫殿。この冠者が着うずる烏帽子は。それなる大さびのつぶのちと荒らかなるを。一

くせくせませ。雛形にあひをあらせ。櫛形をいか〳〵と。一ためためて左へ折りてたび候へ。そのとき烏帽子折がもつての外に腹を立てされればあのやうなる下郎に物を好ますれば。我が身の果々の程をも知らず。事も忝なや。左折を召されうずる人は。一とせ尾張の國野間の内海にて失せ給ひし。左馬頭義朝。その御子にて御座ありし嫡子惡源太義平。次男朝長。三男頼朝。四郎はあのの御曹司。五郎は遠江の蒲の御曹司範頼。六は醍醐の京の君。七は園城寺の惡禪師の君。八男にあたらせ給ふ。當時鞍馬の寺に御座ある。牛若殿様こそ召されうずるにやう和殿原がやうなる三界流浪の。吉次が供をする冠者が。左折を。着うずる事思ひも寄らぬ所望かな。牛若可笑し

く思召し。仰は左にてさふらへど。奥へ罷り下らうず。關々泊々にて。左折を着たるよと。人の咎めのあらん時。都の宿に。古き烏帽子のありつるを所望してきてさうが。左折も右折も。この冠者は。知らぬなりかかるむつかしき烏帽子を。關屋に預け申すというて。打棄てて通るならば御身の難も。あるまじきわつばが科も。のがるべし

コトバワキ 烏帽子折承はり。如何様これはやうある人の言葉遣ひぞと思ひ。あう一旦は申すまでというて。左へ折りすまして參らする。牛若殿は烏帽子とりまはし御覽じて。よい烏帽子にて候が一つの難が候。太夫聞いて。地に難が候か。さびにくせが候か。雛形櫛形小結所。いづくに難が候ぞ。牛若殿聞召し。いづくに難も候はぬが。

我が所望の如く烏帽子をば折らせ參らせて。代を持ち合はせざるが一つの難で候太夫聞いてから〳〵と打笑ひ。あらことごとしの冠者殿の申ごとやあの吉次殿は。一年に一度。二年に二度の下り上りする。その供して下る冠者なれば心。安く思はれよ。冠者殿が奥餞に取らせうぞやう。牛若聞召し。世にあり顔なる取らせ詞かな。牛若が世に出るならば家の疵ともなるべき詞なり。太刀を取らせて行かうずが。それは千五百里の道の用心ことかくる。刀をとらせて行かばやと思召し。源氏重代のこんねんどうの御腰物を。取り出させ給ひて。なう太夫殿。この刀をば烏帽子の替とばし思召すな。烏帽子の替には明年の夏の頃。奥よりもよき馬を用意申さうず。暇申して

太夫とて。宿に歸らせ給ふ。

その後烏帽子折女房を近づけ。この年月かかる下さいを仕り。身命を助かるを。されば佛神三寶も不憫に思召さるるによつて。この刀たまはる。見給へこれは皆黃金ぞ。都の町にて沽却して。一期のうちをらくゝと。過ぎうずる事の嬉しさは如何に女房聞いて何と物をばいはずして。太夫が持ちたる刀を唯一目見てやがてさめざめと泣く。

太夫大いに腹を立て不思議の女房の風情やな。をのこの寶まうけて喜ばずして。和御前は何を歎くぞ。

女房聞いて今は何をか包み候べき。扨ては只今烏帽子折らせ給ひたる冠者殿は。自かためには三代相恩の主君にて御座候ひけるぞや。それを如何にと申

すに。御身の持たせ給ひたる刀は。源氏御重代のこんねんどうと申す刀。自をば如何なる者と思召す。ぞこれは一年尾張の國野間の内海にて失せ給ひし義朝の御内。鎌田のためには妹なり。君は離れ參らせ身の置所のなきまに。御身に契をこめ。此年は九年になり候。九年の情にこの刀を自にたべかしなう。我が君の奥州へと。はるばるお下り。ましますに奥餞に。參らせん。太夫聞いて共に涙を流し。中々のことかな。夫婦偕老同穴のわりなき妹脊の中なれば。何をか和御前に惜むべきと。やがて女房に取らする。女房斜に喜び。瓶子一具口つつませ。小結取り添へ吉次が宿へ尋ね行き。牛若子に逢ひ奉り。なう若君。自をば如何なる者と思召すぞ。これは

一年故君の御供申し野間の内海にて失せたりし鎌田がためにに妹なり。男子の身にても候はば御最期の御供申すべきに。たとへ女にて候とも。如何ならん淵瀬にも。身を沈め果つべきこそ殉死にては候へども。棄てがたきは命つれなくながらへ。面目なくは候へども烏帽子折に契をこめ。今年は九年になり候。九年の情にこの刀太夫に所望し。我が君の奥州へはるばる御下りましますを。一目拜み。申さんためにこれまで參りて候ぞや。夫れ烏帽子を着るには。小結を結うて着ること候。御烏帽子をたまはれ小結を結うて參らせんと。はしげたやうに雲井にさつと結ひ上げ。あら目出度やこの烏帽子を召され。奥へ御下りまし〳〵て秀衡佐藤を賴ませ給ひ。數萬

餘騎を引率し。平家の人々を。御心のままに亡させ給ひ今一度日本を御代になさせ給へ。暇申して若君として。女房宿に歸る。牛若心に思召すものへの門出に。先祖の郎等に行逢ふことよ。夫れ烏帽子を着るには。二人の親をとる習のありと申すが。牛若は誰を烏帽子親にとらうず。あら思ひ出したり。我等が先祖は七歳の御年八幡へ御參ありて。八幡太郎義家と名乘らせ給ふ。その如く牛若も。片親には氏神八幡をとり申さうず。片親にはこの年月住み慣れし。鞍馬の大悲多聞をとり申さうず。太刀は多聞の劍。刀を八幡と心掛け。ないの柱に立て寄せ。九つの元結を自召され。御ぐしを御生やしあり。烏帽子ためつけて召され。瓶子の酒を自らうつし。太刀の前にも三々

九度。刀の前にも三々九度手向け。その後御身も御めしありて。（クドキ）さもあれ今夜の客人が。名をば何と申すぞ。假名は源九郎實名は。義經と申すなりと獨語をしたまひて。式の祝を遂げさせ給ふ。あら痛はしやこの君の。御代が御代にて御元服ましまさば。天下の諸侍。參り奉公申すべきに。浮世に住む習とて。呼ぶも。應ふるも。唯一人の御元服。目出度が。なかにも先立つものは涙なり。（コトバ）天明ければ鏡の宿の遊君どもが申しけるは。さもあれ今度吉次殿が始めて伴れたるしよくわんの見目のいつくしさよ。但ぶつきやうにさうぞ。夜とても太郎の八郎の。多聞の八幡の。あれ御召し候へ。これ御召あれと。獨語をしつる。可笑しさよと申してとりどりにこそ

笑ひけれ。牛若殿は烏帽子ためつけ召され。吉次が前に畏つておはします。吉次これを見て。冠者殿は烏帽子を召して候や。夫れ烏帽子を着るには。二人の親をとる習の候が御身は誰を烏帽子親にめされて候ぞ。さん候餘りに人々の。烏帽子召されつれたるが羨しく候ひて。心ならずに烏帽子をば着て候へども。仰の如く未だ名をばつかず候。とてもはや天とも地とも父母とも。萬事賴み申す上は。如何樣にも名をつけて召し仕はれ候へ。吉次聞いて。この上は力及ばず。今日よりして御身が名をば京藤太とつけうぞや。畏つて候。但御身がやうになまめいたる若い人を。徒にて路次を伴れんずることが大事なれば。吉次が太刀を擔いて奥へ下り候へ。それいなと思は

れば。これよりも都へ上られ候へ。（サジ）太夫牛若殿聞召し
これを譬に申すかや。世は末世に及ぶといへど。日月は
未だ地に落ちず。天上のか（唐）らにしきは下つて。でんじや
に交ることなし。（コトバ）何として源氏の嫡々が。浮世を渡
る吉次が太刀をば持たうぞ。（クドキ）あら果敢なの心やな吉
次が太刀を持たばこそ。冥土にまします父義朝の御佩刀
を持つにこそと思召し。鬚切の御佩刀をわつそくにかけ。
吉次が太刀を擔いて奥へ（フシ）下らせ給ひけり。涙の雨は玉
葛昔はかけて見ぬものを。
去る間吉次やう〳〵下りける程に。美濃の國青墓の長者
の館に着く。彼の長者が中の（出居）でゐには。大名高家の人だ
にもとどまり給はぬに。吉次がとまるいはれは義朝の御

爲めに。一間四面に光堂を建てられし時。金五十兩馬十
疋。勸進に參り入りたる情の深き者なればとて。下り上
りのたびは止り候。青墓の遊君。（雑）さつしやう（餉）構へ吉次殿
をもてなす。去る間吉次世にあり顔なる風情にて。京藤
太はなきか。こなたへ參り。上臈達の御前にて御酌申せ。
あら痛はしや牛若殿。何時酌とり習ひたること御座なけ
れども。時世に從ふ習とて。をつと應へてめされけるに。
まことととり習はざる御事なれば。銚子の酒を弓手馬手へ
さつ〳〵と覆し給ふ。吉次これを見て。大の眼にかどを
立て。不覺の者かな。人の御前の御酌をば。左樣にたま
はるが奇怪なり罷り立てと吐る。あら痛はしや牛若殿。
時ならぬ顔に紅葉をさつと散らし。さん候我れ西國方に

て諸山寺にて。 衆徒の御出仕の御供申し。 樒躑躅閼伽の水。 左様の奉公をこそ申し習ひて候へ。 武士の御前の御酌は。 これがはじめにて候へば。 よきやうに教へ召し仕はれ候へ。 吉次聞いて。 左様の事をも私にてこそ申せ。 これは人の御座敷ぞ。 ただ罷り立てと叱る。 あら痛はしや牛若殿。 しほ〳〵として座敷を立たせ給ふ。

ここに濱千鳥の局。 ちやうへ参りて申しけるは。 如何に君聞召せ。 今参の京藤太とやらんが吹きげに候ぞなう。 世にあり顔に笛をさして候。 ちやうこの由を聞召し。 和御前は東海道の名折りを申す者かな。 藝は主を避けず。 泥の中の荷知るを人倫といひ。 知らざるをば木竹に譬へたり。 如何に吉次が伴れたる。 京藤太と申すとも。 吹けばこそ笛をばさすらめ。 調子一つ所望せよ。 承り候とて。 牛若殿の御側に行き君のちやうよりの御所望にて候に御身のささせ給ひたるその笛一手あそばせ。 牛若殿聞召し。 何この冠者に笛吹けとや。 大和竹にめをあけたる。 草苅笛にて候を。 東の旅の徒然に。 さしはさして候へども。 吹く迄のことは思ひ寄らずにて候。 吉次聞いて何と申すぞ上様よりの御所望は。 汝がためには生涯の思出にてはなきか。 樵笛にてもあれ。 又草苅笛にても候へかしなど調子一つ吹き申さぬぞ。 牛若可笑しく思召し。 あうこれは一旦の禮まで。 さらば一手吹いて。 思出に聞かせばやと思召し。 母の常盤の淀の津の彌陀次郎が許より。 買ひ取らせ給ひたる。 弘法大師の蟬折なれば。

いつくしきとも中々にあう申す許りはなかりけり。この笛を取り出し。千五上勺。中六下口とて。八つの歌口に。花の露をしめし。とう盤渉に音をとつて雲井にさつと吹き上げ。萬事をしづめて遊ばしたり。ちやうこの笛を聞召し。面白の笛の音や。唐橋の中將殿は日本一の笛吹。富士一見のために。奥へ御下りましませしがこの宿に御着あり夜とても笛をあそばせし。音聲息ざし程拍子もあひ清んだるところは。唐橋殿の笛には水際まさつて覺えたり。これ程の笛にて。定めて樂は吹くらん。樂一つ遊ばせ。源聞召し。とても調子を吹く上。吹かばやと思召し一越調に音をかへ。しゆつこんらくを遊ばされ。やがて押し返して廻盃樂を遊ばす。ちやうこの由を聞召し。

面白の笛の音やあら面白の樂の名や廻盃樂といふ樂盃を廻らす樂。下戸も上戸も押しなべて酒を飲めとの笛の音や。然るべくば明日ばかり。吉次殿が止れかし。京藤太に笛吹かせ管絃して遊ばん。あら面白の笛や候。所詮自一つ飲うで。唯今の笛の殿に思ひざし申さうず。吉次聞いて。如何に兄弟内の者近う參つて物を聞け。某が都にて申せしことはこれなり。笛は吹かずとも腰にさせ舞は舞はずとも常に扇を持てと申せしことはこれなり。そもあの京藤太が笛を吹かずば。上樣の盃なんどをば何として賜らうぞ。夫れ一つ賜つて現世の名聞後世の訴にせよ。やあ羨しの京藤太やと。盃を羨みしは理とぞ聞えける。牛若殿は三度聞召す。御盃を彼方此方へ廻し。夜も更け

ければ濱千鳥の局。盃を納めて皆局々へぞ歸られける。

ここに濱千鳥の局。御前達をあつめて申しけるは。さもあれ畫の京藤太とやらんは。見目も美しい者。笛も上手。但可笑しきことを申しつるものかな。夫れ笛の名には漢竹胡竹やう竹。青葉二葉。天人のひとへがくし。弘法大師の蟬折我が朝の笛には。うらやまと。しま竹より竹なんどとこそ申せ。まだこそ聞かね草苅笛とは。所詮昔の人は心の至がなうて笛にて草を苅りたればこそ。草苅笛とは申しつらめ可笑しさよととりどりにこそ笑ひけれ。君のちやう物越に聞召し。和御前達は何を笑ふぞ。さん候京藤太が草苅笛と申しつるそれを笑ひ候。扨て和御前達は。その草苅笛のいはれを知つて笑ふか知らで笑ふか。

百樣を知つたりとも。一樣を知らずば爭ふこと勿れと。申す譬のあるぞとよ。いで〳〵和御前達に。その草苅笛のいはれを語つて聞かせん。

昔我が朝に用明天皇と申せしは十六にならせ給ふまで后の宮もましまさず。ある時公卿殿上人集らせ給ひ扇を六十六本折らせ。繪女房を描かせ。國々へ廻し。如何なん賤の女賤の子なりとも。この扇の繪に似たる女房やある。急ぎ内裏へ參らせよ。一の后に祝ふべしと。日本國をぞ觸れられける。夫れ物の美しきをば繪女房とこそ申せ。日本廣しと申せども繪に似たる女房は一人もなくして。扇は都へぞ上りける。然りとは申せども。筑紫豐後の國。内山里と申す所に長者一人あり。四方に四萬の藏

を立てて住めば。萬の長者と申せしを。人の申し易きまにまの殿と申す。子のなきことを悲み。内山里の聖觀音に參り。申子をこそ爲給ひけれ。祈誓の驗はやありて。御寶殿の内よりも寶珠を賜はると北の御方御覽じて。御着帶の身となり。七月の煩。九月の苦。十月半と申すに。産の紐平かなり。取り上げ御覽ずれば。玉を延べたる如くなる姫にておはします。御夢想によそへ。玉よの姫と名付け。いつきかしづき給ひけるに。かの姫十四の年。この繪扇の下りたるを。引き合せて見てあれば。ものいへば扇の繪が嫉むべうに見ゆる。去る間内裏へ奏聞申されたり。御門叡聞まし〳〵て。急き内裏へ參らせよ。一の后に祝ふべしとやがて勅使をぞ

下されける。長者承り。たとへ宣旨にても候へ。唯一人の姫なれば。思ひも寄らぬことなりとて宣旨を背き申す。御門叡聞まし〳〵て。惜むところも道理その儀ならばまの殿。芥子の種を。日のうちに一萬石參らせよ。それが叶はぬものならば。姫を内裏へ參らすべしと重ねて勅使下る。長者承り。たとへ如何體の物なりとも。日數を經る程ならば。求め參らせんずるが。殊更芥子の種子を。日のうちに一萬石何としてかは求むべき。やう女房姫を内裏へ參らすべし。長者の女房これを聞き。如何にまの殿いたうな騷ぎ給ひそ。御身十八自十四の秋よりも。長者の院號蒙つて四方に四萬の藏を立て。内の眷屬なにはにつけ。乏しき事はなけれども。かかる物は時として草

合にもあふやとて。あの乾に當つて。萱の藏を造らせ。年々の芥子の種子を。とり集めて置いたるが。一萬石は。そは知らず十萬石もあらん。（ツメ）長者斜に喜うで。さらば車をかざれとて車の數をかざつて。日のうちに一萬石。内裏へそなへ奉る。御門叡覽まし〳〵て所詮唯まの殿は扨て三國一の長者であり。（コトバ）御門叡覽まし〳〵てその儀ならばまの殿。蜀紅錦をもつて。兩界の曼陀羅を二十尋に七流織りつけて參らせよ。それが叶はぬものならば。姫を内裏へ參らすべしと重々の勅使立つ。長者承りこは如何に蜀紅錦をもつて。兩界の曼陀羅は佛達の淨土にて蓮の糸をもつて織らせ給ふと承る。人間の身として。何としてかは求むべき。やう女房。王土に住居をす

る身が重ねて宣旨を背き何かせん唯。姫を内裏へ參らすべき。（クドキ）長者の女房これを聞き唯一人の姫なるを。内裏へそなへ申し。玉樓金殿の臺の内に住居をせば。我が子とは思ふとも見んずることも難かるべし。夕さりは名殘惜しみの管絃とて。夜とともの管絃なりされども曉は微睡み給ふ。かかりけるところに。内山の聖觀音は長者夫婦が枕上に立ち寄らせ給ひ。如何に長者。汝が娘は自に申子なり。惜むところも不憫さに。諸の佛達を集め申し。長者が中のでゐにて。錦を織るぞ聽聞せよ。承つて聽聞する。七夕彦星の織る梭の音は。てい。ほろろ。（フシ）これはさながら御法なり。二十尋に七流。織りつけて。長者殿の中のでゐに置き給ふ。長者斜に喜うで。急ぎ内

さんろ、鶴の事

裏へ奉る。御門叡覽ましくして。所詮唯まの殿は。佛にてましますや。佛の娘をこひかねて。十善の位をすべるとも何かは苦かるべき。位を御すべりましまして。十六の春の比。たどろくと下らせ給ひける程に。十八日と申すには豐後の國に。聞えたるはや。内山に着き給ふ去る間御門は。とある小家に立ち寄らせ給ひ。一夜の宿を借り給ふ。宿の太夫御門を見參らせ。あら美しのしよくわん殿や。御身何處の人ぞ。これは習はぬ旅を浮雲の。泊定めぬ修行者にて候。太夫聞いて。あらやうくしの返事や。唯すぐに仰せ候へ。さん候、都の者にて候。花の都の人は。何の御用にかかる遠國へ御下り候ぞ。奉公の望にて。その時太夫横手を打つて。殊勝の冠者殿が奉公

民藝と伝史 昭和十年 二月号

好や。この太夫こそ長者殿が執事なれ。この年になるまで子といふものを持たず。今日よりして子になり候へ。田地を耕作せんずるとも。かいせんをせうずるとも。それは御身がままざうよ。御門叡聞ましまして。御覽ぜられ候如く。楊柳の風にふけたる如くにて。田地を耕作せんこともかいせんとやらんも思ひ寄らず。唯奉公ならば望にて候。太夫聞いて。この上は力及ばずさらば長者へ申さんとて長者にかくと申す長者聞召し。急いで具して參れ。承ると申して。御門を具足し奉る。長者御覽じて。あら美しのしよくわんや。汝は何處の者ぞ。都の者にて候。名をば何といふぞ。さんろと申し候。長者聞いてさんろとは山の路。人の名には始めて聞いたや。面白

い名や如何にや。山路殿この長者は牛を千疋持ちてあるが。あれなる黄なる牛をば。舎人どもがはつたと悪んで。草をも水をも飼はぬなり。今日よりして山路殿に預け申す。草をも水をもよきに飼うてたび候へ。あら痛はしや御門は。戀ゆゑ領掌まし〳〵て明れば牛の口を牽き。千人の舎人と打連れ。後の野邊へ出でさせ給ふ。千人の舎人どもは。苅り習ひたる事なれば。てんでに鎌を提げてかきよせ。かきよせ。草を苅る。痛はしや御門は。何時苅り習はせ給はねば。牛にうちかかり。笛打吹いてまします。馬は馬頭觀世音。牛は大日如來の化身と承るが。實にやさありけるか人間は。見知り申さねど。畜生なれども色風情を。見知りたるかと覺しくて。草をも食まず。

角を傾け。舌を垂れ御門の笛を聽聞す。千人の舎人ども。この由を聞くよりも。山路殿が吹く物の。名をば何といふやらん。横笛と申しさう。面白いぞや。山路殿。草ばし苅るな笛を吹け。汝が牛には草を苅りてかけうぞよう。吹けよ。吹けよといふ程に。一度も草を苅り給はず。これをもちてこそ。夜更けて心清めるをば。山路が草苅夜の笛。若布苅るは田子の浦。若草苅るは武藏野よ。若布若草は和歌の浦。用明天皇の戀ゆゑ遊ばす笛をこそ草苅笛とは申すなれ。

これは筑紫の物語。さても都には御門を失ひ奉り。公卿殿上人集らせ給ひ。博士を召さるる。博士參りて卜を申す。來うずる八月十五日に。宇佐八幡の御前にて。

御放生會と申す事を執行せ給ふべし。扨て夫れは如何樣なる者にさすべきぞ。さん候筑紫豐後の國。内山と申す所に長者一人候。かの者に神事を勤めさするものならば。御門は都へ還御あつて。天下は目出度かるべき由をれいもんを引いて申す。然らば筑紫へ使者を立てよとて。長者の前に榊を立つる。折節長者は出させ給ひ。これは何と申したる事にて候ぞ。來うずる八月十五日に。宇佐八幡の御前にて。御放生會と申す事を執行はせ給ふべし。扨てそれは何々がいり候ぞ。さん候しきしやうこくしやう神官宮人。八人の八乙女。五人の神樂男參り。ていとうの鼓を打ち。さつ〳〵の鈴を振り上げ。競馬あげ馬みこのむら。獅子田樂通つて後流鏑馬候よ。長者聞いて。

あらむつかしげなる事やとて。近里近郷を尋ねけるに。殘りは皆々揃ひたれども。この流鏑馬とやらんに。はたと事を缺く。その時千人の舍人どもを集めて。もし汝等が中に。流鏑馬をばし知つてあるか。舍人ども承り。上にさへ御存なきに。その上我々は。明暮牛にこそ乘り習ひて候へ。流鏑馬とやらんは思ひも寄らずにて候。長者聞いて。實に〳〵それはさぞあるらん。あの山路殿は都の者と聞いてあるが。流鏑馬をば知つてあるか。たとへ如何體の者なりとも。流鏑馬を知つて御神事勤むるものならば。正八幡もしろしめせ。是非長者が聖にとらうず。その時御門につこと御笑あつて。流鏑馬やすさうなることにて候。御門には十町に馬場をやり。二町をばのけ馬

場と名づけ、八所に的を立てて遊ばすを。八つ的と名づけてこれは公卿殿上人の技。神の前には三町に馬場をやり。三所に的を立てて遊ばすを。流鏑馬と名づけてこれは武士の技にて。何よりもやすさうなる事にて候。長者聞いて。扨ては御身はよつく心得て候や。まこと流鏑馬を知つて。御神事勤むるものならば。長者が智に取つて。四方に四萬の藏。數多の寶を添へて得させうぞと。堅く約束し給へり。

かくて八月十五日になれば。近里近郷の大名高家。宇佐八幡の御前に棧敷をうち埒を結ひ。各見物し給ふ。長者夫婦も同じく。棧敷をうつて見物す。去る間しきしやうこくしやう神官宮人。八人の八乙女。五人の神樂男參り。

ていとうの鼓をうち。さつ〳〵の鈴を振り上げ。競馬あげ馬みこのむら。獅子田樂通つて後はや流鏑馬になる。扨ても御門には色よき衣裝束を奉り。鹿毛なる馬に貝鞍置かせ。御前にひつ立つる。御門斜に思召し。引き寄せゆらりと召され。馬場渡し取つて返し。一の的ちやうと遊ばし。二の的はたと遊ばす。三の的に此度。ひらいてかからせ給ひけるに。神殿俄に震動して。白き水干立烏帽子。金の笏を御持あり。忝も八幡は。搖ぎ出でさせ給ひて。白洲に畏り。如何なる御事候ぞ。五ば十善神は九善九善の神の神事を。十善の御身として。勤めさせ給へば。愈五衰重うなりさう候今は御門へ還御あれ。還御ならぬものならば。末世の衆生を罰せうずるで候。人多き

その中に長者夫婦は。棧敷よりこぼれ落ちさせ給ひて。
如何なる御事ぞ。十善の御身を三年が間。使ひ申す事ど
も。口惜しさよと申し。流涕焦れたりければ御門叡覽ま
し〳〵。よしよし苦しかるまじ。汝が娘を戀ふるゆゑに。
いや三年は奉公ありつるぞ。今は姫を參らせよ承ると申
して。忝も宇佐八幡の。介錯人にて玉よの姫十六。用明
天皇。十八と申すに。御門へ還御あり。玉樓金殿の臺の
内に住居しいや鴛鴦比翼の語らひ淺からずこそ聞えけれ。
その後御子を。設けさせ給ひて。聖德太子と申す。我が
朝に佛法を。弘めさせ給ふなり玉よの姫は聖觀音。用明
天皇は阿彌陀如來の化身。聖德太子くゝせ觀音の化現なり。
用明天皇戀ゆゑ遊ばす笛をこそ。草苅笛と申すなれ知ら

ぬ事をば和御前達笑はぬ事であるぞとよ。
コトバ　その後君のちやう濱千鳥を召され。以前に笛吹いた
る京藤太とやらんは。思へば見るところのあるに此方へ
具して參れ。承ると申して。牛若殿を具足し申す。去る
間牛若殿。座敷に直らせ給ふ。ちやうこの由を御覽
じてあう不思議の冠者殿や。座敷に直る風情は野間の内
海にて失せ給ひし義朝に違はず。御目の内は偏に惡源太
にて御座候。もの宣ふ聲の色は朝長に違はず若しも源氏
の由緣にてましまさばはや〳〵名乘り給へとよ。
コトバ　源聞召しこれは上臈の子にても候はず。都三條邊に
住居する下臈の子にて候。ちやうこの由を聞召
しなう御内は何をのたまふぞ。自は義朝の妻女なり。萬

壽の姫と申して忘形見の御座候を。いらたか寺の麓に出家になし置き申すなり。扨てこのあなたに一間四面に光堂をたて。阿彌陀の三尊を安置申し。義朝悪源太朝長父子三人御影を現はし申すなり。若しも源氏の由縁かかりでましまさば。燒香なんど。あれかしなうあら心深の冠者殿や。源聞召し。軒の玉水ちり〳〵草。包めども包まれず。扨て隠せども隠されず。父よといへる聲を聞き。やまぶき顔に打匂ひ。アタルいまは何をか包むべき。義朝に八男常盤腹には三男。鞍馬の寺に住居せし牛若と申す者なり。ちやうこの由を聞召し。扨ては鞍馬におはせし。牛若子にて御座ありけり。若君見申せば。死して久しくなり給ふ。義朝の御姿を。見參らする心地のありて懐し

さよとのたまへば。源も二歳の年。別れ申せし父御をば。夢とも更に辨へず唯今か様に仰せらるれば。冥土にまします父御前を。拜み申す心地のありて懐しさよとのたまひて。御袂に縋りつき。ふし沈みてぞ泣き給ふ。互に盡きぬ。その涙よその袂も濡れぬべし。

コトバ その後君のちやう濱千鳥を召され。あれ〳〵具足し申し御影拜ませ申せ。承ると申して。牛若殿を具足し申す。立ち入り御覽ありければ。實にも義朝悪源太朝長。父子三人の御影を現はし申す。源斜に思召し。燒香禮を參らせ。不思議に牛若こそ思ひ立つて。吉次が太刀を擔いて奥へ下り候へ。かへす〳〵も道の間の守護となり給へと。サシ深く祈誓を申す。習はぬ旅の疲。禮盤引き寄せ

枕と定め。少し微睡み給ひけり。

かかりけるところに。父子三人眞黑に鎧ひ。牛若の枕上に立ち寄らせ給ひ。嬉しくも幼心に思ひ立つて吉次が太刀を擔いて奥へ下るものかな。構へて吉次吉内吉六兄弟三人が中さんことを。我々父子三人のいふ事と思ひ。西を東北を南とも背くべからず。吉次が太刀を擔いて奥へ下り候へ。そよ忘れたり日本國の盗人どもが。吉次が皮籠に目をかけ。青野が原によりきし。夕去の八つの比は寄せうぞ。用心よきに仕れ。父子三人の者も。草の蔭にて鐵の楯となるべきなり。かくてもあらまほしけれども。修羅が始まるに。暇申して牛若とて。立ち歸らんとし給ふ時。源夢心に。あら御情無や。なう暫くと仰あつ

て。御鎧の袖に縋ると思召し。兩眼覺めて御覽ずれば。御影の袖に。取り附き申す。（フシ同音）さては夢にてありけるぞ。あへなの今の。（ヤキ）対面やとて流涕焦れ給ひけり。（コトバ）さりながら慥に御夢想ありけるものをと思召し。もとの所に御歸あり。萠黄匂の御腹巻を。草摺長にざつくと召し。上帶結つてちやうと締めこんれんとの御腰の物を。一文字に御さしあり。かうがいぬきて枕と定め。（弄）鬚切の御佩刀を腹の上にどうと置き。弓手の足をさし延べ。馬手の足をきつと立て弓手の御目のまどろむ時は。馬手の眼が天井をはつたと瞰んで殿居をしてこそ臥されけれ。

太夫　扨ても青野が原に。よりき仕る盗人どもは誰々ぞ。先づ一番に越後と信濃の境なる。熊坂長範親子六人。坐

する。善光寺なる。南大門のみばらかひの右馬丞。五町の與次さいくちの七郎。はつ田の刑部。かいつかみの鷲次郎。まどをのぞくは空盲。(窓)(眼)　皆に塗つたる生あぜを。(畦)　曉走る蟻姑次郎。でんがくが窪には。友を迷はす狐三郎。同じく。次郎。伊豆の御山にはやげ下の小六。ふじに坂(富士)東次板東六このものどもを先として。大將七十餘人。その外都合小盗人三百人に過ぎざりけり。大幕三重にひかせ大筒大瓶かき据ゑ。我等が寶を飲まばこそ。吉次が皮籠を飲むなるに。飲めや唄へやざめけとて舞うつ唄うつ酒盛をする。

かかりけるところに。熊坂長範は東西の鳴をしづめ。面々は何と定むる方もなうして酒を參るぞ。いで〳〵長

範が。盗みしはじめし由來を語つて聽かせ申さん。某が親にてさうし人は越後と信濃の境なる。熊坂といふ所に唯佛のやうなるまたうどなり。某は如何なる佛神の計ぞや。七歳の年。長野鄕といふ所にて。伯父の馬を盗み取つて。ならび飯田の市にて賣つたるに。ちつとも仔細が候はず。それよりも盗は。資本も入らぬ。よき事と思ひ定め。日本國を走り廻つて盗をするに。一度も不覺をかかず。かくて長範は。子を五人持つて候が。何れもよい能を持つて候。太郎は畫强盗が上手。次郎は夜討が上手。三郎は忍が上手。四郎は馬をよく盗みさう。五郎は人をかどへ取つて。あの佐渡が島へ賣りさうもの。彼奴原は一期過きうずる能を皆持つて候。七歳の年よりも。不覺

をかかぬ長範が今夜胸こそ騒ぎ候へ。天晴三百七十餘人が中に。才覺廻つたる人やましますらん。吉次が宿へ打越え。内のけこをそと見て御戻り候へかし。

太夫　人多きその中に。伊豆の御山のやげ下の小六。某見て參らんといふ儘に。柿の篠懸鹿間の頭巾。まへわづかに引つ冠うで、青墓の君のちやうの門外に寄つて大音揚げて呼ばはる。熊野山の山伏。佛法修行のそのために。奥松島へ下るなり。山伏は十人に餘つてさうぞ。今夜一夜の陪堂たべやつと呼ばはつて。内のけこを靜に見て通る。

ワキ　稍遙に候ひて。内よりも米の俵を投げ出す。

太夫　小六急度見て物への門出に。繩かかりたる物は忌々しと存ずれば腰の刀をひん拔いて。掛繩はらりと切つて棄

て。米を少し取り。青野が原に走り歸つて。中の座敷にどうと居て二の息をほつとつぐ。ワキ　長範これを見て。扨て如何にやげ下殿。太夫　小六聞いて得物はいくらもさう物。八十四の皮籠を。切戸の脇に積んだるは只寶の山の如し。四十二疋の雜駄。三疋の乘馬。何れもよい馬にて候。三十餘人の兵士の者。弓胡籙太刀刀をつとり添へ。用心する顔には見えて候へども。胴突を當つるものならば。彼奴原は椽の下へ隱れうず馬も皮籠もやす〳〵と取らうずが。爰に大事の事が候。ワキ　今に始めてやげ下殿の。大事とは何事ぞ。太夫　小六聞いて。いや語らせて聞召されよ。古は伴れても下らぬ。十六七のしよくわんが候。このわつぱが衣裳の體をあら〳〵語つて聞かせ申さん。先づそ

つと見たる所は。色白く尋常なるが。肌には鈍金をひつ違へて着て候。着たる直垂は。唐絹をもつて。地をば山鳩色に空色に一はけはいて。十八五色の糸をもつて。物の上手が縫物を縫ひて候。先づ弓手の紐付に。齋垣鳥居社壇を縫ひ。馬手の紐付には。たけくらべに杉を三本縫うて。源氏の氏神白鳩が。十二の飼子を飼ひつれ。羽節と羽節をくひ違へ。ばつと立つてはさつとは下り。舞ひ遊んだるいはひの樣をありく〳〵と縫うて候。後の菊綴には。北山殿のさんさう住吉のすわびん。御室の御所のけいき景氣をありく〳〵と縫うて候。扨て又袴を下りに。しぐせいぐわんを學んで。唐土の猿も千疋。日本の猿も千疋。唐土の猿は大國なれば。せいを小さく面を赤く縫うて候。日本の猿は小國なれば。せいを小さく面を白く縫うて候。日本と唐の潮境のちくら沖といふ所にて。唐土の猿は日本へ越さんとする日本の猿は唐土へ越さんとする。越さう越さじの。がまのさうの所をば。あうありありと縫うてさう。扨て又袴の蹴廻に。岩に松鶴に龜。堰にかかる川柳。沖の涙がどうと打つてさつと引いて行く。潮境を縫うてさう。着たる腹巻は。これは萠黄縅なり。世の常の腹巻は草摺を八枚下ぐるが。この草摺は十二枚。十二枚の草摺に。白金黄金をもつて。藥師の十二神をいがくとあらはす。さいたる刀は皆黄金造なり。とつつけ鞘口に。倶梨迦羅不動明王あう瀧壺へ飛んで下り。劔をのうだる所を。ありく〳〵と彫つてさう。表の目貫は不

動の體。裏の目貫は鞍馬の大悲多聞の。御神體をあらはす。下緒には法華經の七の卷。藥王品を。三ながれ組んで候。持つたる太刀は。二尺六寸か。七寸かと覺えたり。切羽股よせ。うんどうかぶとがね。眞の目貫そら目貫。せめしばひき石突かはさきに至るまで。上品の黃金にてひらめき立つて見えてさう候。着たる烏帽子は。六波羅樣の當世むきの。つぶのちつと荒らかなるを。一くせみくせませ。雛形にあひをあらせ。櫛形をいが〳〵と。一ためめためて。左へ折つた烏帽子なり。鬢の髮は縮んだり。眉の毛は苅つたり昨日か今日の山出。このわつぱが有樣を物によく〳〵譬ふれば。木ならば朱檀。鳥ならば鳳凰。金ならば沙金。昔をとるならば源氏の大將當世樣をとる

ならば。清盛宗盛の御公達でましますが繼母のなかは惡まれ。東と聞いて。吉次を賴んで奧へ下ると覺えたり。このわつぱが目のうちをたんだ一目見てさうが。油斷するものならば。三百七十餘人の。盜人の細首は助かり難く見えてさう候。

長範暫く打聞いて。やげ下殿の物語こそ。さら〳〵コトバ氣も散んぜぬ事にて候へさりながらそのわつぱが。何ともはやれかし。例の長範が。八尺五寸の棒を持つて。ゆりひらいて唯一打の勝負ざう候。夜は何時ぞ。はや八つの比になつて候。時こそよけれ人々はや打立てといふ儘にてんでに松明ともしつれ。青墓の君のちやうの門外へのめきたつて寄する。

去る間熊坂の太郎。胴突を取つて。どう〳〵と當つる。源聞召し。あは夜盗よと思召し。わざと表の蔀を。二三間取つて椽より下へ投げ落し。上なる蔀を下ろしかけ。寄する盗人を今や遅しと待ち給ふ。去る間太郎は黒皮の胴丸着。髪をばつと亂り。大長刀を引きずつて。人はないぞ唯參れやあ參れや參れと下知をする。源は御覽じて。彼奴は曲物。斬らばやと思召し。走りかかつて。いかづち切と名づけて。いやちやうと切つて御覽ずれば。無慚やな太郎。敢なく首を打落され。首は内へ轉びければ胴は外へぞ倒れける。熊坂の次郎が急ぎ走り歸つて。如何になう長範。太郎こそ手負うてましませ。長範聞いて。やあ痛手か薄手か。次郎承つて痛手やらん薄手やら

ん首が失せてさうばこそ。長範この由聞くよりも。無念の次第かな。そのわつぱに手並見せんといふままに。八尺五寸の。さても棒をば水車に廻いて源に渡り合ふ。源は御覽じて。長範が棒をば一尺おいてづんと切り。二尺おいてちやうど切つて手元許り殘されたり。三百七十餘人の盗人。この由見るよりも源を中にとりこめて。火水になれと揉うだりけり。源は御覽じて。やあ玉に慣れたる蓬萊の鳥の風情もかくやらん。驚く氣色はましまさず。打物の束をば。莖長に取り延べ大勢の中へ割つて入り。散々に切つて廻る。天は渦巻いて地は朱に染めかへ。龍が水を得雲を分け。虚空へ上る如くなり。未だ時を移さぬ間に。屈竟の盗人どもを八十三人切り伏せたり。長範

これを見て六尺三寸の扨ても長刀。水車に廻いて。源にわたり合ふ。源御覽じて多くの敵にわたり合ひ。骨を折つたり。實にや長範は新手の武者なり。大長刀にてたたき立てられて。受太刀になつていやきつ〳〵と引き給ふ。長範これを見。あはよいぞと思ひて。隙間なく打つてかかりけり。源御覽じて。僧正かかげにて習ひし扨ても。天狗の法は出合ふ所と思召し。霧の法を結んで。敵の方へ投げかけ。小鷹の法を結んで我が身にさつと打ちかけちやうと切つて御覽ずれば。無慚やな熊坂が。眞甲二つに打ち割られ。朝の露と消えにけり。それよりも源。奥へ下らせ給ひて。天下を治め給ひけり。

富樫

去る間判官殿。都を御立ましく〳〵て。急がせ給ひける程に。加賀の國安宅の松に程なく着かせ給ふ。判官松を御覽じて。あら優長なる姿かな。四國西國都にて。その數松は見てあれど。か程の松は未だ見ず。名の無き事はよもあらじ。尋ねて參れ武藏。辨慶承りて。松の邊を見てあれば。童が四五人松の葉寄せてぞ居たりける。武藏するとと寄つて。やあいかに童。この國にてこの松をば何の松とかいふぞ。こざかしき童が進み出てて申す。さん候當國は坂を隔てて此方。草深き遠國にて。か程の松に名付人も候はず。さりながら。在五中將の歌には安宅の松と

も詠まれて候。それのみならず鳥羽院の御内なる。佐藤兵衛憲清は。うはの空なる戀をして北國修行に出つると時て。西行とかれは名乗る。かの西行の歌には。根上りの松と詠まれたりなう山伏と。申しけり。判官聞召されて。物聞き給へ方々。勸學院の雀は蒙求を囀り。智者の邊の童は。習はぬ經を讀むとぱ能うこそこれは傳へたれ。こざかしき童に引出物取らせ。平泉への順道を委しく問へとの御諚なり。承ると申して。辨慶が笈より。も色よき扇を取り出し。童に取らせ。平泉への順道を委しく尋ね問ふ時に。童聞いて。さん候これより奥へは。上道下道中道とて三つの道の候。まづ下道の難所を。語らば聞召されよ。くろへ四十八ヶ瀬。親知らず子知らず。

いちふりしやうとうたのわき。二三のはざま最上川。あねはの松。かめわり坂と申しつつ。四十二所の名譽のこれが難所なり。少人もおはしますがいかでか下り。給ふべきさて上道の難所は。都の春は過ぎ行けど。越路の雪は未だ消えず。去年の雪の叢消えに。今年の雪の降り積り。谷の下水落ち合ひて水嵩まさりて。鳥ならで通ふべきやう更になし。中道と申すは。上道も順道にて。人の心も慈悲なれども。爰に一つの難儀あり。鎌倉殿よりも。觸狀が下つて。この國の戸樫殿。城塚を構へて。山伏の禁制強くして。一昨日の暮程に。九人通る山伏を。判官殿の御伴とて。押さへて斬つて懸けられたり。昨日の早朝に。六人通る山伏を。五位殿の御伴と

て。これをも斬つて懸けらるる。昨夜も五人斬らるる今朝も三人斬られてさう。か程なる難所を。いやたしやう（多少）こうはふるとも。切カ 爭でか下り。給ふべきなう山伏と。申しけり。コトバ 判官聞召されて。扨ては某一人の故に因つて。行方も知らぬ山伏達の。左樣に多く亡びさせ給ひつらん。吊はばやと思召し。松原に入つて見給へば。去年の冬の比よりも。二月下旬まで。斬り懸けたる事なれば。百許り程驀に懸かる。その中に辨慶一人。識法をば讀まずして此處彼所を奔りめぐつて首を見。五人の童をはつたと睨んで。この國の戸樫は何も知らぬと云ふ。童聞いてこの國の戸樫殿の。物知ろし召されぬいはれはざう。いで〳〵戸樫が物知らぬいはれを語つて聞かせん。

亂行不淨の大俗の首を上に懸け。ひんはつとまろめ。解脫幢相の。種々の法衣を身にまとひ。法界道場にして。彌勒の出世に生を爲さうず。ツメクビ 首を遙の下に懸けたるは扨てものをば知らいで懸けぬ アタル かれ。童聞いてうち笑ひ。横手を丁と合せて。わかれたり山伏。それを咎め給ふか。上に懸かつた俗の首に數多下の異名付けられたり。向ふ齒反つて猿眼に。アタル 小鬢の髮の縮んで。色の白きをば鎌倉殿の御舍弟に。源九郎義經の。御首と號して。遙の上に懸下けられたり。下に懸かつた首にも。數多の異名付けられたり。かう申してあればとて腹ばし立たせ給ふなよ。御身の如くに。飽く迄せいは高うて。極めて色は黑くして。眼に憎しみを持つたるが。物言うたる聲つ

きの。きことなき山伏をば。判官殿の御内なる。膝許去らずの西塔の。辨慶と號して。遙の下に懸けられたるぞ。山伏と云ひければ。いやさしも剛なる武藏坊が我が身の上と聞きなして。膝震うて立つたりけり。武藏心に思ひけるは。扨てはこの國の戸樫は。某が面をばよくは見知らざりけるや。その儀にてあるならば。某一人立ち越え。城の體を見ばやと思ひ。君の御前に畏まり。某一人うち越え。戸樫が城の有樣を見て參らんと申す。判官聞召されて。心變りか武藏。心變りに及ぶならば。都の土とは爲さずして。北國の道芝となさん事こそ口惜しけれ。辨慶承り。こは御諚とも存じ候はず。斯程山伏禁制の所を十三人が喚いて通り。恠められては如何に陳ずるとも叶ふまじ。まづ某一人立ち越え。城の體を見んずるに。見おほするものならば。山伏の法にてある間。悅の螺を二つ三つ吹かうず。又見損ずる物ならば。最期の螺を只一つ吹くべきなり。螺ばし一つ立つならば。すはや武藏めが。最期ぞと思召し。北方の。三昧堂にて清き自害おはしませ。暇申してさらばとて。立離れんとたたりしが。思へばこれが最期なり傍輩の。人々に名殘や惜しく思ひけん。龜井片岡伊勢駿河。間近きさまに近付けて。如何に方々武藏め一人戸樫が館に移りて。城のけごを見損じたらば。辨慶が腹切らうず。君御腹を召されなば。死出の山にて待ち申さん。あう方々。先にも腹を切るならば。三途の川にて待ち給へ。暇申

して。　さらばとて名殘り惜げに。　立ち出づる。　去る
間辨慶は。　飛驒の工匠がうつ墨繩にはあらねども。　只一
筋に思ひ斷り。　さしも待ち懸くる。　戸樫が城へ入つたる
は人に變つて覺えたり。　山伏の法にてある間。　れいじ讖
法をこそ誦むべきに。　武藏何とか思ひけん。　高念佛を申
し。　上土門よりつつと入つて。　内の體をば見たりければ。
戸樫が城の有樣待つ程に拵へたり。　先表の櫓十三所。　脇
の櫓九所。　二重三重に高櫓を上げさせ。　東表を見てあれ
ば鞍置馬四五十匹牽つ立てて置いたりけり。　西の遠侍を
見てあれば。　戸樫が若黨百人許り並び居て。　蟇目くつた
り矢矧いだり。　碁將棊雙六に心入れたる所もあり。　着座
を見てあれば。　四十許りなる男の。　平文の直垂に烏帽子

のさしきを。　たぶ〳〵と上げさせ。　ふんたうに懸かつて。
若侍に雙六うたせ。　助言して居たりけるは。　ツメ　是れぞこ
の國のあう戸樫の介と覺えてあり。　あら口惜しや時こそ
あれ日こそあれ戸樫が出でたる所へ。　某來つたるは詰め
たる業と覺えたり。　忍ばばやと思ひしが。　見えたる事も
なき先に。　敵にけこを見知られて。　惡しかりなんと存ず
れば。　大の聲音を差し上げて。　熊野山の山伏が佛法修行
の。　その爲に。　出羽の羽黑へ通りさうぞ齋料賜べと乞う
たりけり。　戸樫これを聞き。　持つたる扇にて疊表を。　丁
と打つていやあれを見よ人々。　愚人夏の蟲。　飛んで火に
入ると能うこそ是れは傳へたれ。　心を盡して待ち懸くる。
西塔の辨慶こそ。　唯今來つたれ。　打て張れ搦めよ。　いや

指繩なんどと犇いた。固よりも武藏。我が身の上とは知つたれども。聞かぬ體にもてなして。大木枯木の花眺め空嘯いて立つたりけり。コトバ時剋も遷さず戸樫が若黨百人許り眞黑に甲ひ。武藏を眞中に取り込むる。武藏逸雄の若者どもに。犇と討ち止められては。惡しかりなんと思ひ。戸樫が居たりし椽の端へすると寄つて。篠懸の袂ひき繕ひ。大の眼に角を立て。戸樫をはつたと瞰んで。如何なる野心ちやうきやうの者を召し置かれ候て。唯今參つたる法師までも。憂目を見んづるやらんと存じて候に。よく〳〵承つて候へば。この法師が身の上と。聞きなして候は虛事ざうか戸樫殿。戸樫聞いて。扨ては汝は。判官殿の御内なる。膝許去らずの西塔の辨慶にて

はなきか。ゑとこにさう。(何處)山伏の名は。世の例多しと申せども。判官坊膝許去らずと云ふ山伏の名は今こそ聞いて候へ。左樣に才覺廻つて。辨舌の明かなるが辨慶にてはなきか。あう才覺廻つて辨舌の明かなるが辨慶ならば。左宣ふ戸樫殿の。才覺廻つて。辨舌の明かにましますは。扨て御身も辨慶か。戸樫聞いて。何とも陳ぜよ只辨慶といふ。武藏餘りに陳じ兼ね。但しかう申す法師が額に。辨慶といふ字ばし据つて候か。字の据つたると同じ事。鎌倉殿よりの。繪圖のある上疑あらじと云ふ。よもあらじたばかり事ぞと心得。ゑせうのあらば見んと乞うた。あら無慙の辨慶が。幾程命長らへんとて。繪圖を乞うつる優しさよそれ取り出して見せよ。承ると申して。若侍

が座敷を立ち。八尺屏風を取り出し。武蔵が前に颯と立て。繪圖をさらりと打ち懸けて辨慶に見する。寫しも寫いたり畫きも畫いたる繪師かな。武蔵が丈は。六尺。二分。繪圖も六尺二分なり。色黑く丈高く。眼の悪しを寫いてあり。剩へは武蔵殿。左の眼先に痣のあるまで。寫いたは遁れつべうは。なかりけり。武蔵今は言葉を變へて陳ずる所と思ひ。如何に戸樫殿。以前にこの法師。熊野山伏と申せしは。御身の心地少し引き見んため。是れこそ南都東大寺の。勸進聖さうよ。戸樫聞いて尊うさう。寔に南都の勸進にてましまさば。勸進帳はおはすらん拜まんと乞はれたり。あら無慙や辨慶。南都の勸進とは述べたれども勸進帳はあらばこそ。

持たぬと云はば杖打に打ち覆せられうず。持つたと云はばあらばこそ。是非を武蔵。辨へ兼ねて立つたりしが。いや〳〵持つたと云はばやと思ひ。愚なり戸樫殿。三國一の大伽藍の。勸進をせうずる聖が。勸進帳持たでは如何候ふべき。是非見參に參らんと云ふままに。笈をひつたと下し。絡げ繩ふる〳〵とほどき。上段に手を入れて。からり〳〵と探しけれども。都にて入れざる事なれば笈には更になかりけり。武蔵餘りの口惜しさに。目を塞ぎ。南無や八幡大菩薩。源氏の氏子をば。百王百代。守らんとの御誓と承りて候ぞや。一の瑞現を。見せしめ給へとからり〳〵と探さるる。實にや八幡大菩薩の。與へ賜びけるか。自然の往來の。卷物一卷候ひけ

る。おつ取つて指し上げて。勸進帳は。これにあり拜み給へと。見せにけり。（コトバ）戸樫是を見て。尊うさう（候）。これへたび候へ拜まんと請はれたり。眞の勸進帳にてあらんずるには。如何に戸樫が拜まじと云ふとも。押へて拜ませんずるが是れは自然の往來なり。一字なりともこれはといはれ。悪しかりなんと存ずれば。愚なり戸樫殿。忝なくも十善帝王だにも。冠の巾子を傾け。拜ませ給ふ勸進帳を。申さんや御身は。大俗の身として。手に取る程ならば。五體竦んで立ち所危しゑと嚇す。戸樫武藏に嚇され。さらばそれにて遊ばせ。是れにて聽聞申すべし。武藏この勸進帳を讀みおほせん事は不定。讀み損ぜん事は治定。讀み損ずるものならば。人手には懸るまじ。あ

れに衝いて立つたる。白柄の長刀引ん奪うて。飛んで懸らんずる若者共を。一々に追つ拂ひ。あれに牽いて立つたる葦毛なる駒の。蹄堅さうで如何に驅け足の疾かるらん。引ん奪うて打ち乘り。三昧堂に參り。（下）君にこの由申し。一の刀にて。こんせん（前）がいし（害）奉り武藏め腹を切らうず。君御腹召されなば。十一人の人々も皆腹を切らうず。生きては功をなさずとも。死んでは功をなすべきなり。日比我が君。七生迄と契り置かせ給ひたる。（ツメ）愛宕の太郎坊。（下）比良の山の（中）大郎坊。山々の小天狗天のやいじん。はつしやうじん。牛頭馬頭阿防羅刹。異形異類の鬼共を。引き具し候ひて。本望なれば關東へ。刹那が間に亂れ入つて。箱根山の嶺より。黑雲をたなびき電光

を飛ばせ。玉を琢く鎌倉に。車軸の雨を降らし。谷七郷を洗ひ流し憎かりし梶原を。左右なくも殺さずして。百鬼神に仰せ付け熱鐵の湯を沸かし。口の内へ流し入れ。六腑五臓を焼き拂ひ七代子孫を取り殺して。本望を遂ぐるならば菅相丞にてあらずと。荒人神と武藏めが。仰がれん下ずる事ども は案の内と思ひければちつとも騒ぐ事はなし。コトヤ武藏この勸進帳を。高く持つて讀むならば。後なる人々に讀まれうず。又低く持ちて讀むならば。紙が薄くて字が透り。前なる戸樫に一字なりともそれはといはれ。悪しかりなんと存ずれば。六尺二分の辨慶が。七尺優に伸び上り。しうちての笠を。頭甲にきつと着なして。字ならば二行三行。そつと開いて。カカル

さうかんに押し當てて。何とは。知らねども。敬つて申すと上げたりけり。ヨミセノウヤ敬つて申す。勸進の沙門こらくたむのちしきのしやうに曰く。下和州山科の里東大寺の。中勸進の事ことに十方旦那の助成を蒙らんと欲す。右の旨趣如何といふに。かの伽藍の濫觴は。聖武天皇の后光明皇后と申すは。大職アタル冠の。御娘生身の觀音なり。然るに。有漏の生涯は歩を他界に懸くる釋尊亦雙林の煙と昇り給ふ然るに御門后の御別れたへにして。雲上に曇あれば月卿光を失へりかれ追善の爲に。一寺の伽藍を建立し給ふアタル今の。大佛殿これなり。御堂の高さは。二十丈本尊の御丈。十六丈遠く異朝を。尋ぬるに大唐四十八箇の大伽藍に勝れ。天竺アタル祇園精舎にも。超えま

して。我が朝に並びなしされ莊嚴。七寶を鏤めくわう（光）やう（耀）らん（燦）けい（鏡）を琢き。御堂の内に珠玉を飾り。瑠璃の壁磚磼の垂木瑪瑙の桁桁。玻璃の柱本尊は金銅盧遮那佛。並びに四天は黃金を展べ。十一丈の瓔珞。虛空無何の。風に亂り。花せうアタルゑんの。玉の旌かかる無雙の。大伽藍に雷火降つて火失す破滅の時に相差はず。爰に深草の御門のぎやうさう越の君に合力し。悉く琢き給ふこれはこれ。王法の繁昌なり。王法の繁昌は。天下のアタル吉慶たり目出度かりける折節に東大寺興福寺。兩寺の間に衆徒喧嘩を出し互に破滅の。火を放す眞に魔闍の。所爲をなし煙庭に。飛んで落ち雷火雲を走れば佛像。跡を削り。五時の函燒け八教の軸も灰となす。爰にによたいの御門

のぎやうざう勸進の力を勵ますとはいへどもさんアタルたいさくわんもはんさくなり。上目出度かりける折節に爰に平家の大相國惡逆の下知に。隨つて本散位の中將重衡左衞門ともたか民部重吉都合その勢三千餘騎。持下治承四年十二月。二十八日に。南都へ馳せ向ふアタル南都の衆徒防ぎ戰ふといへども法末世に盡き。忝くも二階の總門てかいの門に放火をせしむ。かれ猛火。みちくて堂アタル塔僧坊神社佛神の嫌なく一塵も殘らず。燒き下拂ひ畢んぬ。煙。有頂。天に上り。雲となつて爭ひ下ければ十六丈の。盧遮那佛。御頭落ちて塚の如し中御身は湧いて山の下如し。こんじん世界の。しやうごんを寫し奉る東金堂。西金堂下刹那が內に。燒き拂ひ畢んぬ悲しきかなや

恩愛別離の生死の（アタル）輩あれを見これを見るに何時をか。期すべきぞ。御眼鹿となつて。春日山へ飛び入り（アタル）給ふ。比丘も比丘尼道俗男女の。嫌なく大佛殿の名殘を悲しみ炎の中へ飛び入り。飛び入り燒け死するものは。數知らず阿難附續の靈地の今朝灰燼となつて。地に踏まるるきやうご滅び荆棘あり姑蘇臺の露。瀼々たり偶殘り止まる（アタル）物。（下）ししやう兄弟の門に立ち寄り暫はねを休むる爰に。志ゆせう坊聖せんせい坊。（下）春日大明神の。御示現を被つて。勸進帳を額にあて。おほそれ（アタル）おそれ。法皇の御方へ訴訟を。上げらるる法皇こんぢつを運ばせ（アタル）給ひ。肥後肥前筑後筑前豐前豐後日向大隅薩摩九國を。寄せらるる。女院の御方より。伊豫讃岐阿波

土佐四國を寄せられたり。四國九國より。鍛冶千人番匠千人杣千人三千人。春日山へ。分け入つて材木を（アタル）採つて淀木津河へ降す事。（原本不明はげ）敷し彼の大物。小物を如何にとして。地形の表へ引き着くべきと歎き（中）悲む。渴仰の涙肝に銘し。三寶のめぐみに寄り。大國より。智者の牛が來て。一日一夜に。引き着けて牛大國へ歸りけり。日本人悅うで。地形の表。御堂の高さ二十丈。本尊の御丈十六丈。かうは八ちやう多聞持國增長廣目。百餘せんの文机。鈴獨鈷花皿もとの如く鑄（アタル）たてまつる。さりとはいへども御堂の供養佛の供養鐘の供養三供養を未だ遂げず。この供養を（アタル）のべんため。六十（アタル）六人の。扨ても小聖。（アタル）六十六箇國へ各廻つていや勸むる所の勸

進なり。一紙半錢に入つたらんずる輩は。今生にては安穩快樂の。徳を被り。來世にては。弘誓の舟に竿をさし千葉の蓮華に。戯れんず事は疑ある　アタル　べからず南無歸命けいと讀み上げて。くる〳〵と引ん卷いて。もとの笈へ　アタル　投げ入れたる。武藏坊が　アタル　有樣。人間の業でなかりけり。

笈さがし

詞

去る間武藏坊辨慶は。富樫が館にて勸進帳奉伽帳を。悉く讀み上げければ。富樫よく〳〵聽聞あつて。あら殊勝や。誠に南都の勸にて御座有りけるを。存じ申さで一時なれども白砂に立て申しつる事。左こそ佛神三寶にも憎しと思召されつらん。こなたへ御入り候へとて辨慶を請ぜらる。武藏安堵の思をなして。今は笈を此處に置かばやと思ふが。いや〳〵痴れたる者に笈探され。惡しかりなんと存ずれば。笈懸けながら座敷に無圖と直る。富樫御覽じて。小勸進にて候へども。卷絹三十疋武藏が前に積ませらるる。富樫の北の方を始め。その外心ざし

の人々は。武藏殿が前に寶の山を積む。辨慶これを見て。あら夥しの御奉伽共候や。只今は賜はり度くは候へども。存ずる仔細の候。來うずる三月に。これよりも都へ着けて賜べと申す。富樫聞いて。京は何條と問はる。武藏何時もいひつけたれば。都三條河原さきの。辨慶が許へ着けて賜べといはんずと志して。あう都は三條河原きの。辨といつしがあつと思ひて。辨そうの御坊へ着けて賜べとぞ述べにける。さらば御暇申すとて互に暇乞ひはれ。富樫が館をぞ出でにける。三まん堂に參りて。君に斯くと申しければ。武藏殿にてなかりけり。只八幡の御現化とて御手を合はせ給ひけり。その夜は宮の越さだけの大明神に一夜の通夜を申し。

夜を込めて出でさせ給ふ宮人申しける樣は。これより越中への御下向はなか〳〵叶ひ候まじい。それを如何にと申すに。倶利迦羅の峠を。砥波の七郎が七百餘騎にて支へ。山伏を通し申さず。能登と加賀との境をば。しほの小太郎が防ぎ山伏を通し申さず。越中への御下向は思ひも寄らずと申す。辨慶濱に下り。若し能登の方へ下る舟こそもや有るとぞ問うたりける。折節すすの岬へ下る舟こそ候ひけれ。天の與ふる處として。この舟に便船し。その日の內に能登の國すすの岬に着かせ給ふ。御舟よりも上らせ給ひ汀の岩に腰を掛けて邊の體を見給ふに。石巖峨々と聳え。風縮んだる萬木は繪に畫いたるが如くなり。西の沖は果てしもなく蒼海雲を浸し櫓櫂をわたる越舟や。波

間にかづき浮き沈む。水にはぶれて飛ぶ鷗汀の岩に。波懸けて底荒磯の岩間にも。砕けて見ゆるうつせ貝。人の心は荒磯の。片思ひなる鮑貝。みるめなのりそ取らんとて。海夫共海に下り漬たりかつきの爲に浮き沈む。

去る間武藏坊辨慶は。とある岩間より。螺にみるめの着いたるを取り上げて御前に參らする。螺は生きて動けばみるめも共に動く。判官御覽じて御前の都に御座あらば。斯樣に動くみるめをば如何にとして。御覽候べき。遠國の果てにても。某が德により。斯かる名譽の玩びを御覽ずるよと。仰せければ。御前取り敢へさせ給はで。都より波の夜晝浮かれ來て。道遠くして憂き目見る哉。判官聞召されてあら殊勝の御詠歌や候。卽て御返歌を申さん

とて。憂き目をば藻鹽と共に搔き捨てて喜びとなる。すの岬や。この歌に慰みで。今は舟路も便りなく。遙々の廻りをして越中へこそ急がれけれ。磯傳ひ峰傳ひ。絶え絶え細き谷の道。石動山を伏し拜み。越中の國に聞こえたる六動寺の渡りに着かせ給ふ舟に乘らんとし給へば。渡守が申しけるは。この渡りは南都造營の爲なり。賃無くしては渡し申すまじい辨慶聞いて。如何なる津泊り關にても。山伏の法にて賃といふ事はなきぞただ渡せと申す。ふつつと叶ひ候まじい。舟賃無くばただ御戻り有れと申す。賃は無し急がしし。遲參せば跡よりも。如何なる事か出で來なんと。御前の紅の。千入の袴を取り出だし。詮方盡きて舟賃にこれこそあれとて賜びにけれ。

渡守が見參らせ。これはわれ〳〵が見知り申さぬ物にて。不足には候へ共。さらば渡し申さんとて。六動寺を漕ぎ出だしはうしつをあよみ過ぎ。いわくせの渡り今日もはや。打出の宿と打ち眺め。御通りありし處々に旅人數多行き逢ひて。これより奥への道なから少人を歩ませ申していかでか下り。給ふべき喃山伏と申しけり。さては舟路ならでは行くべき便り有らばこそ。便船あれかしと仰せければ。折節越後の直江の津へ下る舟こそ候ひけれ。この舟に便船し。直江の津に程無く着かせ給ふ。御舟よりも上らせ給ひ。直江の太郎が宿所に一夜の宿を借り給ふ。浦の人々さし集まり。内議評定する樣は。そもこの浦は當國のこう善光寺へ參る道。總じて數多の道辻

制札のその上。見も知らぬ山伏達の。せい〳〵着かせ給ひたるは。判官殿か怪しや。いざ〳〵咎め申さんとて。我れもと覺しき浦の人。七八百人さし集まり弓箭を帶しひしめいたり。御宿の女房は情ありける者にて。辨慶を招き寄せ。囁き申しける樣は。痛はしや客僧達を。判官殿なりとて。搦め取り。鎌倉へ具足申さんと。大勢率して只今向ふなりと申す。辨慶聞いて打ち笑ひ。嬉しくも聞かせさせ給ひて候や。去りながらわれ〳〵は。羽黒山の山伏にて。別に仔細はよもさうじ御心安く思召せと。左あらぬ體にもてなし。さて君の御前に參りこの由斯くと申しければ。義經聞召されて。あはれ實に義經は如何なる月日生れけるぞや。天に業の網を張り地にさかもぎの

關を据ゑ。五尺に足らぬ。形骸を隠し兼ねたる悲しさよ。去りながら口多くしては言葉の誤りも有るべし。御邊達は山伏の。嶺のこき取學びにて上の山へ入り給へ。義經一人殘り居て。問答して見んずるに。陳じ損ずるものならば。合圖の貝を吹かうぞ。その時下り降り共に腹を切り候へ。げに〳〵尤然るべう候とて。傍に立ち忍ぶ。その跡に浦の人。雲霞こうしやに押し寄せて。鎌倉殿の御舍弟。大輔判官義經の。御着き有つたる由を承り。直江の太郎が御迎に參りて候。はや〳〵御出で候へ。鎌倉へ具足し申さんと大音擧げて呼ばはる。判官聞し召れて。何判官殿とは何處に御座候ぞあうに去る事あり。何時ぞやの事かとよ。平家を攻めさせ給はんため。十萬餘騎を率し。

奥よりも打つて上らせ給ひしを。羽黑の傍にて。そつと見參らせ候ひしが。只今も千騎に劣る事はよもさうじ。やはか斯程の小勢にて叶はせ給ふべきぞ一夜の宿の情に。山伏共に具足賜べ。ていの御伴申し。一方防ぐべしと仰せければ。浦の人々承り。以つての外に相違してあきれて爰に立つたりけり。直江の太郎が申しけるは。判官殿と申すは丈小さく色白く。向ふ齒反つて猿眼に。赤髭にましますと承つて候が。只今斯樣に仰せらるる山伏の形相判官殿にお居て疑ふ所なし。御出で候へ。判官聞召されて。さて面々は。眞に仰せ候か。序をもつて音に聞く。鎌倉殿とやらんを見て通らうにとうして連れて行き給へ。浦の人々承り。いや〳〵しもさもなき山伏達を。判官殿

なりとて搦め取り。鎌倉迄遙々と。具足したればとて、
させる功名はなくして。山伏共に呪詛はれ善かりつべし
と覺へず。所詮笈を賜はり中を見んと。眞の山伏行者なら
ば。山伏の道具持つべし。空山伏にて有るならば。山伏
の道具よも持たじ。笈を賜はり中を見んと聲々に申す。
判官力に及ばせ給はず。八張の笈を取り出だして浦人の
方へ渡し給ふ。浦の人々この笈を取つて行き。中を開い
て見てあれば先一張の笈には金剛界の曼陀羅。護摩の次
第しよそんの法。數を盡して入れにけり。珍らし文か怪
しやと疑ひ申す所に。くがみの寺よりも。法師一人來つ
て。悪しく拜み知つて悪しくして罰當るなとて元の如く
に取り納むる。二番の笈の中には。顯密二種の法。しや

つけうのとめいあり。これも忝しやとて本のごとくに
取り納むる。第三番の笈には。三鈷獨鈷鈴錫杖。くはし
花皿を入れにけり。四番の笈中に。五大尊の靈像不動降
魔の諸天本尊の數を盡したり。五番の笈の中には。返牒
願文往來。假字眞字の手本。弘法の御自筆。道風の震ひ
筆。秘品の數を盡したり。知るも知らぬも押し並べて。
尊しと申しつつ手を合はせぬはなかりけり。笈に仔細
の候はばこそいざ戻らんと申す。直江の太郎が申しける
は。如何に方々。一切の事が率爾にては叶はぬぞ。殘る
笈を誰が爲に置きたるぞ只懇に探せと申す。げに〳〵こ
れもいはれたりとて。又次なる笈を取つて行き。中を開
いて見てあれば。判官の都より持たせ給ひたる。萌

黄匂の御腹巻。小手具足を取り出だし。これは山伏の道具さうか。判官聞こし召されて。さては面々は。當國の小山寺の山伏達にならつて。羽黒山の山伏の禮儀をば知ろし召されぬよ嘯。抑羽黒山と申すは役の行者のこけの道。山伏の秘書あり爰にゐゆとと名付けて。我が儘にふるまふ方あり。山伏これを嫉み瞋意の怒絶えせず。これに因つて武具弓箭を持たぬ法師が有らばこそ。この邊にもあい善き賣具足やさう御ひけいあれ。山伏の甲冑持う事。は諸方に隠れ候はばこそ。あら世間狹や面々。げにげにそれも嘸あるらんと。又次なる笈を取うて行き中を開いて見てあれば。御前の都より持たせさせ給ひたる。五尺の髮七尺の懸帶。唐の鏡十二のかけご入りたりし。

手箱なんどを取り出だして。これも山伏の道具さうや。あら殊勝と。行ひ澄まさせ給ひたる。山伏の道具共や候。されば こそ判官殿なれと聲々に申す。判官ちつとも騷がせ給はず面々の不審は道理。去りながら掛帶髮裝束の謂れは。この法師が爲に姥御にてましますは。羽黒の權現の一の神子たるにより。今向ふさんじつかうの。神輿の御供申さんため。都より買ひ下し給ふ。さて又かけご手箱は。越中の國水橋を通りし時。水橋殿の姫君の。瘧病を強くいたはり存命不定におはせしを。この山伏の中に驗者の上手有るにより。七日泊り加持し。忽ち驗に着け申し。これに因つて財寶を。ほそんの前に取りかくる。覺束なくば使者を立て水橋殿へ問はせ給ふべし。浦

の人々これを聞き。斯様に御述べ有らんには。何處に詰めがさうばこそ。御身にてもましませ。同行にてもましませ。是非一人賜はり。鎌倉へ具足申さんと聲々に申す。判官力に及ばせ給はず腰なる貝を取り上げて。二つ三つ吹き給ふ。貝の聲も靜まりければ。上の山に隱し置く人人に武藏坊辨慶。常陸坊海尊。龜井片岡伊勢駿河この人人を先として打刀まさかりを。面々に持つて亂れ入つて。何とて和法師は。貝をば吹くぞ。夫れ山伏の貝吹くは約束が有つて吹くものを。左右なう貝を鳴らす事。ひがごとなりと申しつつ義經を中に取り込めたり。判官聞召されて。哺靜まり給へ方々。この浦の面々この法師一人取り詰めて。判官になれ。義經になれと仰せあれど氏も種

性もなきによりならじと申し候を。只なれ〳〵と仰せ候程に。餘り詮方盡き果てて只今の貝を吹いて候御免あれやと仰せけり。辨慶がこれを聞きさては奇態な事かな。羽黑の方の山伏に由なき事を言ひつけ。判官になれ。義經になれと。何事ぞ。とてもの事にてあるならば直江せんけを我等が棲家となすべきなり。爰に立つたる大夫殿。見知らぬ顏には居たれども。六ちやう舟の船頭。七月の始。あひた酒田を漕ぎ出だし。八月の始。越前の國とかや。敦賀の津に聞こえたる。せいしが本を宿として七里半。あらちの中山かい津の浦より舟を立てて大津の上り大津の。かう大夫が許を宿として。一年に一度づつ。下り上りし給ふ六ちやう舟の船頭と見ないた事は空事か今

こそこめは見るとも明年の夏の頃。何處にても參り合ひ。
ああら痛はしや。このわん禮を申さんとて。から〳〵と笑
ひければ浦の人々これを聞き。判官殿にて御座あらば。
我等が舟の着け所やはか。知ろし召さるべき事のこはら
ぬその先に此方來よ浦の人々と一人二人逃げて行く。辨
慶續いて追つ懸けて。大音擧げて申す樣。何とて面々は笈
をからげて返さぬぞ。夫れ山伏の懸笈。私ならぬ事ぞと
よ。嶺の八たい。金剛童子の乘り移り給ふなる。懸笈を
不淨の身にて。取り出だし候て。只は置くべきか笈から
げて得させよと續いて追うて出でければ。手を合せ立ち
戻りけんぎに咎はさうばこそ。何事も打ち忘れて。御免
候へ。少人も御座有れば傳馬なんどの御用は御目に懸か

るべしと云ふ。左しも賢き浦の人。御戒力におされてそ
の後物を申さぬは道理とこそ聞こえけれ。
その後判官武藏を召され。陸を行かばこの先に。又物憂
き事も有るべし。便船有れかしと仰せければ。辨慶承り。
殊の外に腹を立て。總じて我が君の。此處にても便船。
彼處にては便船と。便船好し給ふに因つて。斯かるむつ
かしき事も出來候や四國西國の御合戰は。皆舟戰にて御
座候ひし間。舟路の事をも大略心得て候。舟を買ひ取つ
て我れと漕ぎ下らんに。何の仔細候べき。判官實にもと
思召し。直江の太郎を召されこの邊にあひよき賣舟やさ
う御ひけいあれ。直江承り。餘所をひけい申す迄も候は
ず。小鷹隼波潛。石割太郎呼子鳥とて。舟をば數多持つ

て候御用に任せ召さるべし。判官聞召されて。その小鷹といへる舟如何程もせよ。とて。秘蔵に思召す御腰の物を。直江の太郎に下し賜ぶ。直江御腰の物を賜はり。我が宿所に罷り歸り。舟具足ひしびしとし繕ひ。舟押し浮めて早召されよと申す。十三人の人々はわれもく〳〵と召されけり。憂かりける直江の津を事故なく漕ぎ出だし。順風を得て帆を擧げけり。雲海漫々として際もなし。雲の波霞の烟わけがたし。蒼波なほ道遠し。汀の海は錦に似雁北天に飛びにけり。何れのせいけつか。義經と諸共に。歸らん事を得ん事は菅丞相の詠なり。羨ましやな雁金は。葉月にならば來こそせめ。義經は何時の時に都へとてか歸るべき。せめて玉章許りをば。言傳んとのたまひつつ。

歌を詠み詩を作り舵を取り帆を擧げて波路遙に吹かれ行く心指しこそ哀なれ。

コトバ

斯かりける所に。佐渡の國北山の嶽よりも黑雲一つ立ち蔽ふ風か雨か怪しやと仰せけるところに。越後の國藏王堂の上よりも雷電雲を響かす。あは氣色の惡いは。山蔭風の隱れ島。何處にかある舟寄せて。この難を免るべしといふ。いはせも果てずして。大風梢を吹き碎き渚に砂を飛ばすれば平々としたるうん海に。雪の山こそ多かりけれ。水を天に吹き上げ逆の雨とぞ成つたりける。上下舟に醉ひ給ふ。その中に取つても。義盛と辨慶。二人許りこそ。大肌脫ぎに肌脫いで。艫舳に立つてぞ廻りけり如何にもしてこの舟を磯へ寄すべからず。荒磯に舟

を寄せ。舟損じては叶ふまじい風に任せて舵を取れ。帆
菰が風に揉まれなば。帆板を切つて風を通せ尚しも風が
烈しくば。大綱小綱を切り落し纜に結ひ付け引かすべし。
取舵より水入らば。面舵へ乗り直せ。龜井片岡は戰場許
りの嗜にて。斯かる時には。前後不覺に。見え給ふものか
な、やあ舟底に下り立つてあかゆをなりともかへ給へ。
假令この舟が。鬼界高麗契丹國へ落さるると申すとも
われ〳〵二人あらんず程は何の仔細の候べき。我が君と
申す。判官聞召されてあの義盛と申すは。伊勢の國の者
にて。渡りの舟に習つて。舟路の事をば心得べきが。不
思議やな武藏は。文にも武にも達者なるが。舟路の事を
もこれ程に心得けるが不思議さよとそぞろに褒めさせ給

ひけり。あら痛はしや御前の。御身も只もおはせぬに。
荒き波剛き風に弱り果て。丈と等しき御髪を波と涙に搖
り流し。むづかる聲も。弱り果て今を限りと見え給ふ
十一人の人々は。この由を見參らせ。げに〳〵夫婦の中
程に。割り無き事はよもあらじ。痛はしや御前の。都に
御座の御時は。七重の屏風。八重の几帳。九重の幔の内
御簾吹き反す。風をだにも人かと厭ひ給ひしが。今は何
時しか變り果て。斯かる遠國波島にて。さて果て給はん
痛はしやと鬼神を僞く。輩も不覺の泪流しけり。
斯くて黑雲次第に引き蔽ひ。偏に長夜の如くなり
今迄は有りとも覺えぬ舟共が。その數數多ほの見えけれ
ば。助船か嬉しやと仰せける處に。左はなくして。赤旗

指し連れたる武者共が如何程も多く湧き出でたり。不思議に思召す處に。舟の内に聲有つて。宗盛父子これに有り。東國の九郎冠者戀ひしやと。呼ばはりかけ近づくと見ゆる。能登殿と覺しき人。小舟に梶取召し具し近付くと見ゆる。二位殿と覺しき人。先帝を抱き參らせ。只今海底に身を投げんとて。義經の方を怨めし氣に見て立せ給ふ。辨慶これを見て。所詮引導せばやと思ひ。舟底につつと入り。頭巾篠懸打ち懸け。船の舳板につつと立ち上つて大音上げて呼ばはる。昨日は西の海岸にて。多勢の歎を見今日は又北國の郷にして。眼前歎をなす事は。夢幻の如し。有爲の法はさながら。今吹く風の如くなり。むさの願をなす時は。今立つ波の如し。大小の議論は。

風に因つて形あり。一つの風が有ればこそ。多くの波形あれ。風波のにげんは。迷ひの前夢なり。人海くうかいにしてしやうとなし。悟る時は風も波もあらばこそあら痛はしや平家には。去んべき智者のなければこそ。多くの怨靈を。佛にはなさずして。執着とうしやうに。輪廻し給ふ痛はしさよ。只今申す。辨慶が引導につき發心の一理を悟つて輪廻の羈を離れて。妙覺無爲の位に。就かせ給へと申す時。二位殿の聲として。昔は一天の國母として萬乘の聖主と有りしかど。今は又御裳濯川の流れゑんり波底に身を入れし。愁歎のていきう。ちつくの執念は。砂よりも尙多し。これに因て六道おほくのさとを廻り三津。八難のきうこうを。遁れ難く思ひしに只今申す。辨

慶が引導につき。發心の一理を悟つて輪廻の羈を離れて。妙覺無爲の位に。着いたることの嬉しさよ。昔は敵今は導師と成り給ふ暇中してさらばとて。波の底に入り給へば風も波も靜まりて舟は小波に搖り据ゆる。かくて御座船をいづくともなく押しよせ。上りて問せ給へば。越後の國寺泊と申す。後へは戻らざりけりと御悅は限りも無し。この里人が申しけるは。これより先はねずみつきの關とて。世の初まりより候が。鎌倉殿よりも。判官殿の御姿と。御内の辨慶の姿を繪圖に寫し。關所の前に高札を打つて置かれて候が。山伏の禁制もつての外に候。辨慶聞いて打ち案じ。この關屋をも。某が謀にて通らうずるにて候。所詮熊野より下向する。先達と號し。某は傳

ひとくのうわさをきくとなくハ
さあらけり。
寛永文字辰六月廿日　主基三郎

馬に乘つて通るべし。恐れながら我が君をば。あいのふに作りなし申し。中の簑笠を負せ申すべし十一人の人々は。笈篠懸を取り隱し皆々男に成り給へげに〳〵尤然べう候とて。十一人の人々は本の男に成られけり。辨慶は傳馬に乘つて。關所の前をとどろがけして通す。その日の關守井澤の與一が候ひしが。關の戸をはたと閉て。制札を御覽ぜよ。叶ふまじいと申して萬事を捨てて支へける。辨慶これを見て。都よりこの國迄。山伏の禁制として。辻々に札は立ちぬれども。この法師は年々熊野へ參る德により。關守共が見知つて。難無うこれ迄通したるに。この關屋にて只今。打ち止めんとは何事ぞ。熊野の權現はおはせぬか。關守の奴原を。竦めて賜び給へと。

いらたか珠數を取り出だし。さら〳〵と押し揉んで。熊野の方を伏し拜む。關守上下怖ぢ恐れ恐ろしの人の勢や。この人々を關屋にて打ち止めんと申すとも。國が半國。搖ぎ候ても。一人も討つか。討たぬでこそ有るべけれ中中の事を仕出だして。關所の者共。殘り少なく討たれては。何の用に立ちさうべき見ぬ體知らぬ由にして御通しあれと申しけり。井澤の與一がこれを聞き。げに〳〵これはいはれたり。如何に喃先達坊判官殿の御内の。辨慶と云ふ人に似させ給ひたる程に斯樣に申したれども。御通りあれと申し。關の戸を明けて通しけり。心の剛なる德により。鰐口を免れて鬼神が門を出でけるを褒めぬ人こそ無かりけれ。その後に判官殿。中の簑笠を漫に

負はせ給ひ。片目を塞ぎ。かたこしをひき。關所の前を通らせ給ふ。關守共がこれを見て。爰にあいのふにさされたる男こそ。下司分の中には生れ付きたる判官殿なれ。例へば腰はひかばひけ片眼をだにも潰さずば。定の判官殿よと。一度にどつと笑ひければ。十一人の人々は生きたる心地もなかりけり。辨慶は馬の上よりも大音上げて申す。やあ剛力。さなきだに山の内は。村雨の繁きに。ややもすれば。下がつて。道者を濡らす不道さよ。歩めと云ひて持つたる鞭にてちやう〳〵と打つたりけり。判官御覽じて。御身の樣に馬に乘り樂して下る人だにも。宿に着きぬれば腰が痛いなんどとて。人に腰を打たするこれ程重き荷を負うて。得こそ歩むまじけれと。泣く體

にもてなし急がせ給ひける程に最上川にぞ着き給ふ。

ことばさる間判官の持たせ給ひたる簑笠を。彼處にがばと投げ棄て給へば。辨慶走り寄り宙にておつ取り三度戴き頭を地につけ。たばかり事とは申しながらも正しく主君の打つ杖の天命爭で免れ候べき只今の辨慶が狼藉をば。佛神三寶も宥させたび候へとて。鬼の樣なる辨慶が。東西を知らず歎きければ。十一人の。人々も皆泪をぞ流しける。

ことば判官聞召して。よし〳〵武藏殿。佛陀にも因果は免れさせ給はず。ましてや末世において。破戒の凡夫の身として。爭で因果を免るべき。殊にこれは。辨慶が打つ杖ならず。舍兄賴朝の遊ばす杖と思へば。これを怨と思ふまじ早々舟に乘れやとて。川舟に召されけり。

遙の川上に。鵜と申す鳥が數多下り居て遊びけり。御前御覽じて。如何に武藏殿。あれなる石に。下り居た鳥は何といふやらん。鵜と申す鳥でさう。御前聞召し一首の歌に斯く許り。最上川如何なる神の誓にや。うゐたる石の流れざるらんと斯樣に詠じ給ひて。急がせ給ひける程にあねはの松龜割坂に着き給ふ。人々の嬉しさ譬へん方はなかりけり。

高館

去る間鎌倉殿梶原平三景時を眞近く召しての御諚には。寔に義經が謀叛に於いて疑ふ所なし。急ぎ義經を退治し。世を治めんとの御諚にて。長崎の四郎に三百餘騎を下し賜ぶ。長崎三百餘騎賜はり。急ぎ奥にも着きしかば。催促廻し勢揃へ。泰衡が館に寄り來し。照井の太郎を筆取にて。着到を附くる。泰衡が館に寄り來し。照井の太郎を筆取に錦戸四郎もとよし（本吉）ひづめ（比爪）の五郎。のくみをぐりを先として宗徒の兵七千三百餘騎と早や着到に附くる。抑比は何時なるらん。文治五年閏四月二十七日。今日は日柄佳からず。明日の辰の刻に向ふべしと定めて。太田山口中

村に既に陣取つて控へたり。扨も高館殿には。宵までは侍八人。大將共に九人と聞こえしが。次ぐ日の御合戰に侍九人。大將共に十人の由來を委く尋ぬるに。紀州熊野の住人に鈴木の三郎重家にて。物の哀を留めたり。或夜鈴木女房に語りけるは。某思ふ事有之。この曉奥州へ罷り下り候ぞや。心の儘に罷り下り。君も目出度う御座あらば。明年の夏の比便の文を參らせん。夏の比しも過ぎ行かば。浮世は不定の習にて。道の草葉の露霜と。消えぬるよと思召し後世をば賴み奉る。暇申してさらばとて。地體が鈴木殿。熊野育ちの人なれば。山伏の姿に樣を替へ。笈取て肩に懸け。物憂き竹の杖をつきその節々に夜を込めて。藤代を

一休後語イ

立ち出で。早や九重に着きにけり。下人目忍ぶの旅なれば。何時しか花の都をば霞と共に立ち出でて。中大津の浦より舟に乗り。上海津の浦に上りつつ。北國道の憂き難所を下らせ給ひける程に。七十五日と申すには。奥州衣川高館の御所に著きにけり。

コトバワキ 鈴木何とか思ひけん。笈篠懸をば傍に取り置き。打掛取り出し著るままに。編笠深々と引つ被うて。高館殿の門外に寄つて。御内の體を聞き居たり。扨も高館殿には。敵向ふ由聞こえければ。侍達を召さるるに。何時も變らぬ武藏殿を先として。以上八人畏る。ツキ判官御覽じて。如何に方々。義經が運命明日を限なり。方々が手にかけ。某が首を取り。關東へ參らせ。賴朝の御目に

掛け。勳功の賞に預らば。奉公の忠には後世を吊へ。ツレ武藏坊辨慶は。中々あさましやわらたる許にて御返事を申さず。太夫片岡龜井の六郎が。目と目屹と見合せて。こは御諚とも存じ候はず。誰かあつて御首を賜はり。降參をば申すべき。今迄候人々も。皆御供とこそ思すらん。さはありながら此中にも。落ちんと思はん人のあらば。平に暇を申し落ちよ。誰も怨みは殘らずと。座敷を屹と見渡しければ。よしたけ廣綱一同に。太人涼く申されたる物やフシ誰もか樣に。申し度き御返事にて候ぞや。思ふに敵。曉寄すべし大手下搦手と。二手に分けぬ事あらじ。味方は假令無勢なりとも。兩陣にむらがつて。軍は花を散すべし。未だほのぐらき早朝にあれは大手これは搦手

なんどとて聲をば聞くと姿は見じ。我も人も心靜にある時に。上へ申して御アダルし。尤然るべしとて。種々の大瓶大筒を御でいへ申し出しつつ。君も御出ましく〳〵て。女房達の御酌にて。上に盃据わりければ。下は以上八人なり。三獻の酒据われば。後には互に入れ亂れて。思ひ指し思ひ取り。自酌自盛の樂遊び。舞うつ歌うつ飲む程に。龜井飲うたる盃を。武藏殿に。思ひざし立つて舞をぞ舞ひにける。蓬萊山には千歳經る。松の枝には鶴巣くふ巖がかたに。龜遊ぶ。

コトバ ちほりみつかしら。鴨のいれくひをひともみもうて。鳴の羽がへしを颯と舞うて。立ち廻る所にて。ツメ門外を見てあれば太刀脇挾んだ男の。フシ編笠眼深に引つ被う

たるが。唐居敷に。腰を懸け龜井が舞を。聞き居たり。

コトバ ツレ 龜井六郎もあれは誰ならんとは思へども。思ひ寄りなき事なれば。舞すでに舞ひ納め。酌に手懸て居たりしに。門なる男の聲として大の聲音をさし上げ。御内へ案内申し候はんと高らかに呼ばはる。下 太夫 鳴を靜めて座敷には誰ぞらんと聞く所に。西塔の辨慶が。この聲を聞き付け。あれは敵の奴原が。下 案内檢見のその爲に。僞學んで來つてさう。何樣てうの使を。餘すまじいと云ふ儘に袴のそばを高く取て長刀おつ取り出でんとする。龜井の六郎も續いて座敷をづんと立ち。武藏が袖を引つ止め。靜まり給へ武藏殿。不思議やこの聲を聞いたる樣に思ふとて。フシ龜井走り出でて見てあれば。舍兄鈴木の三郎殿。

旅窶に面瘠せて一人爰に立ち給ふ。亀井は夢とも辨へず。する〳〵と走り寄り。鈴木が袂に取り附けば兄も弟に取り附いて扨て如何に〳〵と計り遙に有つて鈴木殿。何事かあるか亀井。亀井この由承り。その事にて候ぞ。秀衡浮世に在りし程は君をも尊み申せしが。有爲無常の習にて。秀衡去年の冬果敢なくなりて候ぞやその子ども我が君に。心變を仕り鎌倉よりの檢見には。長崎の四郎殿を申し下し賜はりて。扨て國の大將に。照井伊達が向ひつつ。太田山口中村に陣取りてあると聞いて候。などやかに程に御身の思召し立つならば。二年も三年も先に御下りまし〳〵て。一旦樂を。し給ひて思出と思召すべきに。何に詰めたる御運かは。今日下り。給ふこそ悦の中の歎

なれ。今生にてみ見え申すこそ。何よりもつて嬉う候へ浮世の安執晴れてあり。上にも知ろし召さるまじ咎め怪む者あらじ。遠近人の。風情にて。御歸りあれや鈴木殿。ツメ鈴木殿此由打聞いて。不覺なり亀井龍門原上の土に骨は埋むとも名をば埋むる不覺さよ。師弟主從父子夫婦。三世の奇縁なくしては。何しに今日參るべき。下鈴木が參りて候と。上へ申せ亀井とて草鞋脱ぎ捨て上に着たる。打掛脱いでふはと捨て兄弟連れて判官の御前指いてぞ參りける。コトバワキ義經御覽あつて。如何に珍しや鈴木殿。積悪に餘殃あり。因果歴然の道理に依つて。平家に着せしその科が。今義經に報い來て。明日を限と早やなりぬ。これに

候人々をも。敵の許すならば。落し度くは思へども。許さねば力及ばず。汝をば人も見知るまじいぞ。咎め怪む者あらじ。遠近人の學にて。はや〳〵熊野に罷り歸り候へ。見し者と思ひ出ば。後世をば吊うて給べ。鈴木ありてもこの軍に勝つべきにもあらず。疾う〳〵歸り候へ。

中太夫 鈴木承り謹んで申しけるは。あら御情無の御詞や候。君に犯せる科なくして。討たれさせ給ふべき前業如何おはしけむ。何ぞや鈴木めが月日こそ多きに。今日參り逢ふ事は三世の奇縁朽ちせぬ故。軍散じて罷り下りさもあれ君の御最期所は。何處にてか御はしあるらんと思ひ遣り申したる迄にて。

色太夫 門の唐居敷に腰を懸けて只一人すご〳〵と腹切らんずる事はなんぼう無念に候べき。

コトバ 是非御具足一領賜つて。打死せんと申し切つて落ちんずる氣色はなし。

ツレ 判官聞召されて。この上は力及ばず。いで〳〵さらば鈴木に具足一領取らせんとて。小櫻縅の鎧を召し出させ給ひ。この鎧と申すは。小栗の佐藤が子供が設の爲にとて。縅し立てたる具足なり。兄嗣信は小櫻。舍弟忠信は卯の花を好めば。卯花縅に結構し相待つる所に彼等兄弟は討たれぬ。面目なけれど義經。佐藤が館へ打ち越え。子供が最期を語つて聞かする。母はちつとも歎かずして。

クドキ 斯かる家の面目候。御供申し出しより。歸らん事は不定ぞと思ひ設けて候。さはありながら兄弟が若しも御供仕り。罷り下りて候はば。取らせんずるその爲に。具足を二領縅し立つるこれ〳〵御

覽候へや。フシ 同音 待つて甲斐なきこの記念を見つる事の果敢なさよ。上 誰に鎧を取らすべき。我が君に參らせん。小櫻縅を義經に。卯の花縅を武藏殿に。ツメ 得させたる具足なり。一つに彼等が記念といひ二つは札良き具足なり。下 自然の事のあるならば。義經着せんその爲に。これ迄持たせて侍れども。御邊にこれを取らするとて。同毛の三枚冑に。打物そへ鈴木が前にどうと置いて。旅窶に左こそあるらめ早そこ給はれ鈴木殿。下 鈴木面目施して。御代が御世の御時に。千町萬町賜つたるより今この鎧にしかじとて。かはらけ取り上げ三杯汲んだゆる鈴木殿が所存をばいや褒めぬ人こそ無かりけれ。コトバワキ 武藏坊辨慶は。少しもしほれぬ眼より。涙をはら

はらと流し。異國は知らず本朝において。我が君の御内の人々の樣に揃うたる事あり難し。それを如何にと申すに。一歳嗣信忠信が討死。伊勢駿河が京鎌倉にての死樣。唯今鈴木殿が。御具足一領賜はつて。千町萬町の御恩に換へじと悅うづる事よ。イロ 大夫 か程迄良き郎黨を持ち給ふ我が君の。御果報の程のうたてさは。せめて大國四箇國。御知行なきこそ口惜けれ。コトバ 大夫 奥方の奴原が何千騎にて寄せ來ると云ふとも。公事武者の驅兵。思ふにさこそあらんずらん。今はこの夜も更け行くらんに。飲めや歌へやざめけとて舞うつ歌うつ酒盛する。ツレ 既にその夜も夜半ばかりの事なるに。鈴木の三郎重家は居たる所をづんと立ち。中門の廊に出で。弟龜井を近

熊野の手代

付け。如何に重清。今度某紀州藤代を出し時。先祖重代に傳はる腹卷を一領着て下る。この腹卷の由來委しく語つて聞かすべし皆傍輩達も聞き給へ。忝くも熊野の權現の古。摩訶陀國の主として。富王の中の富王にて天下を守り給へば。海内殊に靜なり。然れどもこの御門に。御世を嗣がせ給ふべき王子の更におはせねば。如何ならんずる后にか。王子の誕生あるべきと。后の數を揃ふるに。既に千人祝ひ申す。（クドキ 太夫）寵愛に思召されたる。后に王子の御座なければ。（フシ 同音）況してや疎き方樣に爭でか更におはすべき。（上）されども末の后に。（五聖）ごすゐ殿と申すこそ。懷妊とおはしませ。御門叡感斜にて。今は早餘の后。御氣色更に（下）よからず。ごすゐ殿にうち添ひて。既に一の

后とし内裏に移し申さんと。宣旨有りし折節に。數百人の后達。これを嫉み妬みて。御門御座なき折節に。武夫を語ひてごすゐ殿に亂れ入り。后を害し奉り深山深く捨て申す。されど如何なる不思議にや死骸も敗れ損ぜず。野干のものもあふさすし滿ずる月に誕生ある。しかも太子と御座します。人住む山にてあらざれば。人倫更に立ち寄らず。虎狼野干は立ち寄れども食し服す事も無く守護を加へ奉る。痛はしや太子は。母の死骸の乳味を服し給へば。忽に食となり野干のものを友として。年月を經る程に。天の岩戸の明暮と早七年になり給ふ。（下 ツメ 天下）には歎にて。遠國遠里波島迄。尋ね給へどましまさず。世を憂き事に思召し。既に早位をすべり給ふ折節に。（下）た

ふとき人のましまして。居所を尋ね給ふとて。山中に分け入り。太子を見付け奉り。内裏に歸りて奏聞申す。臣下卿相。下不思議の思をなしつつ。山中に分け入り。委しく見奉れば。形はごすゐ殿にしてその面影も變らず。太子御年七歳なり。人を見馴れ給はねば臣等邊へ立ち寄るを。怖ぢ戰かせ給ふを。ちけん上人走り寄り。太子を抱き取り申し。ごすゐ殿の死骸をば。山中に廟を築き。込め奉りその後に。太子をば雲上へ移し奉る。御門不思議に思召し。ちけん聖を召されて。委しく問はせ給へば。聖も如何で存知せん。山中に到つて。樹下石上を心掛け。居所を尋ぬる折節に。太子を見付け奉り。奏聞申して候。と。有の儘に申す。御門叡覽ありあう濁れる世に生れて

戒を保つこういんに。斯かる罪を作る由は。まろが科にてあらずや。斯かる物憂き國には。ありて益なき事とて。萬里の飛車と申して。虚空を翔る車に。今の太子諸共に。既に乘じ給ひけり。第一の臣下に。のうみの大臣重高。おくみの中將兼光。彼等二人を友として。車の榻に乘じて。東を指して飛び給ふ。我が朝紀伊の國牟婁の郡おとなし里にしてはまた。熊野權現と現れ。衆生を濟度し給へり。ごすゐ殿の王子は。若王子にておはします。のうみの大臣はこもりの宮と現ぜらるる。おくみの中將は飛行夜叉これなり。この御跡を慕ひて。ちけん上人飛び來つて聖の宮と現ぜらるる。其の外の神達は。次第次第に歸朝して。（四所）ししよ明神。五大王子勸請十五社金剛夜叉。

諸社と現じ給ふも。皆此時の人々ぞ然るに龜井よく聞け。重高より重家まで十六代と覺うるぞ。重高の古。摩訶陀國より我が朝へ下飛ばせ給ひし折節。御門ひやうしのその爲にこの腹卷を召されて。飛び來り給ふなり。代々嫡子に傳はれる。家の寶今鈴木迄相傳す。重代なれば身を離さず。この度も著て下り奥方の奴原に取られて終に他門の。寶となさん惜しさよあうそれとても力なし。重家は面目は君の著長賜りぬこの度の疲に。二領重ねん事難し御邊にこれを取らすると。唐錦繊黄金札の腹卷を。脱いで龜井に取らせけり龜井殿腹卷引つ立て。これ見給へや人々。ろくめう經の中にも。人の果報はきによつて。次男に生れても。總領を繼ぐべしと說かれたるは爰なる

べし。この時家の重代を。龜井の六郎讓り得て。千筋の矢先中るとも。胸板に受け止めて。死なんず事の嬉しやと。躍り上つて悦うたり天晴武士の手本やと賞めぬ人こそなかりけれ。

コトバワキ すでにその夜も明方になりしかば。武藏坊辨慶は居たる所をづんと立ち。四間所へつつと入り。何時も好む褐の直垂。水に鴛の脇楯し。三引兩の弓籠手指し未だ鎧は著ざりけり。梨子打烏帽子おつ被うて。白綾疊んで鉢卷にむずと締め。二尺餘なる打刀を。十文字に指す儘に。四尺二寸の太刀佩いて。人々御免候へとて。四間の（出居）てゐより中門の廊に出で。唐櫃に腰をかけ東向にぞ居たりける。

太夫 鷲尾片岡熊井太郎。源八兵衞廣綱。備前の平

四郎。ツメ 同音 けげの鎧著冑の緒を締め太刀佩き矢負ひて 下 皆ながら。唐櫃に腰を掛け。目と目屹と見合せたる。この人々の有様は。樊噲張良安祿山も。面を側めつつ恥ぢぬべし。 下 その中に取つても龜井の六郎重清は。一際秀れて扮装つたり。肌に取つては唐紅引つ違へ。美精好の はつたるに。寄掛目結の直垂の括を結つて締めたりけり。楊梅桃李の左右の小手。白檀琢の臑當。熊の皮の揉足袋。銀にて縁金亙し。踵高に踏被うたり。獅子に牡丹の脇楯し。ツレ 唐錦緘黄金札の腹巻さつくとゆり懸け。糸緋緘の鎧二領重ねはらりと著。躍り上つて高紐かけゆつて上帶丁と締め。九寸五分の鎧通を馬手の脇に指いたりけり。一尺八寸の打刀を十文字に指す儘に。三尺八寸候ひし青

江作の太刀佩いて。四十二指いたるたかうずべうを。斜高に取つてつけ同毛の五枚冑に。鍬形打つて猪首に著白綾の母衣を颯と懸け塗籠弓の四人張。せめのせき弦懸けさせ。眞中握り横へて。四間のてゐより中門へ搖き出でたるその有様物によく〳〵喩ふれば。めいほく太子はくた王。我が朝にては將門純友吉野山にて名を擧げし。奥州の忠信も。只これ程はありつらめ。きりやうに寄せて出で立つたりやと聲を揃へてほめたりけり。コトバ ツレ かく奥方の軍兵も打つ立つ由こそ聞えけれ。先大手へは時の執權人長崎殿を大將にて。三千八百餘騎衣川大手の門に押し寄する。搦手はたてとりの海。二千五百餘騎西の門に押し寄する。ワキ 御所の手は大手は鈴木兄弟兼房唯

三騎にて固めぬ。搦手をば鷲尾片岡熊井太郎源八兵衛廣綱以上五騎にて控へたり。辨慶はうき武者にて大手の櫓に走り上つて。軍の下知をぞしたりける。龜井の六郎重清も。同櫓に上り。冑を脱いでとうと置き。弓取り直し弦食ひ濕しすびきしてこそ立つたりけれ。太夫兄の鈴木弟龜井を見上げてきつと見てや。御邊は櫓に上りたるや。ツレ龜井が聞いてさん候此所と申すは。平城にては候へども。久しう拵へたる所にて。堀廣うして底深し。如何に敵が詰め寄せて。埋草を込むと云ふとも。三重の堀をば只。一時にはよも埋め去らじ。その時重家重清兄弟と名乘つて切つて出で。奥方の奴原に手並を見せて呉れさうべし。太夫鈴木聞いて。あうよくいつたり龜井。但し

重家は長旅に腹卷に肩引かせ。矢束も矢坪も覺えねども。さらば射て見ん龜井とて。ツメ同音同櫓に上る。斯くて寄手の人々は。大手搦手中揉み合せ鬨をどつと上ぐる。六種震動斯くやらん。天地響て夥し。城には以上九人の人々軍の法優くも。鬨をつとぞ合せたる。物によく〳〵譬ふれば。コトバワキ雷亙る春の野に古巣を出づる鶯の初音を告ぐる如くなり。コトバワキ鬨の聲靜まりければ。照井の太郎高直。一陣に駒驅け出し。如何に御陣へ申すべきことの候。昨日迄判官殿を。主君と仰ぎ申すといへど。鎌倉殿の御意に背きおはします。さるによつて長崎殿。御敎書を帶し御下向のその上。天下に住みながら。祝ひ申すに及ばざるによつて。義經の御自害ましまさば。介錯申せとの

御使に。高直參りて候と。申させ給へ人々と。弓杖に縋つて控へたり。太夫武藏坊辨慶は。櫓の歩の板を。毀れよとと〳〵と踏み鳴らし。何かう云ふは照井めかれ。下角打つたる冑を着。容儀骨柄ゆゆしくし。よき馬に乘つたれば。秀衡が子供の中には。誰なるらんと思ひしに。陪郎黨の照井か。この門外迄參り來て。馬の上にて名乘る樣。ツメ狼藉なりその陣をやあ引いて退けとぞ申しける。照井の太郎がこれを聞き。斯く宣ふは。武藏殿か事珍らしき雜言かな。下君を深く尊めば。臣を敬ふ道理あり。鎌倉殿の御敎書帶し今日の大將給はつて。罷り向つた高直にて。和人共をば眞實に。物の數とは思はぬなり無用の廣言申さんよりも甲を脫いで弓弦を外し命を接げとぞ

申しける。武藏坊辨慶も。言葉なくして立つたりける。龜井の六郎が武藏が邊へ立ち寄つて。なう〳〵武藏殿。神明をも尊まず。ぶめいにも恐れず。法に任せで振舞ひ候傍若無人の奴めには。何を仰せ候とも唯げんをけうするに似たるべし。無用の論を止め給へ君こそ御腹召さるるとも。我等が斯くて候へば軍は花を散すべし。斯う申す兵を如何なる者と思ふぞ。熊野權現の一の臣下のうみの大臣重高よりも十六代の後胤。鈴木の庄司の次男。龜井の六郎重清。年積つて二十六。照井殿に矢一筋奉らん矢受けて見よと。いひもあへず。四人張に十四束。取つてかうと打ち番ひ。本弭末弭一になれときり〳〵と引きしぼり。まちを拳に引つ懸け。ゑいやとかつて打つたる

はどうづきなんどのごとくなり。一陣に進んだる。照井が舍弟に。たか野の二郎が。駒ひつそばめて控へたる。鎧の袖の三の板。妻手の脇楯おくれの板。きものたばねをするりと透しあひひきかけて裏をかけぐつと脱けて餘る矢が。裏に控へたる。照井が馬の太腹に。剔せめてづんばと立つ。たか野は痛手なりければ受けもあへせず妻手がへしに鋌をついてどうと落れば照井が馬は痛手負ひ。屏風がへしにひつたとかへし高膝折つて臥しければ。照井は馬より下りたつた。アゲ城には武藏鈴木を先として。射たりや射たりと搖り上げ搖り上げ笑ひけり。寄手は射られ音もせず。異國のきんくわが弓の威も只これ程で有りつらんと寄手も舌を捲いたりけり。コトバ太夫兄の鈴木。

弟の龜井を見上げて熟々見て。クドキ太夫あゝ射たりや龜井。この五六年離れ御邊如何程生ひ立つてあるやらんと。心許なく思ひ遙々下りて見てあれば。容儀骨柄よりも勝れたる長矢束の大弓は。世にも不思議に思ひしに。おしでかつての定まつて。フシ同音射たりや龜井殿。唯今のその氣色を。紀伊の國に止め置く一族共に見せばやな。コトバツレ君も御出あつて御見物あれかしな。重家も矢一つ射て見せ申さんといふ儘に十三束三つがけの。中差拔いて油ひき。矢狹間廣々と引かせ。如何に奥方の軍兵。今の龜井が兄。鈴木の庄司とは我が事なり。四國九國の御合戰には。御供申し度々の高名名を顯し。御代靜まつて後。紀州藤代は本領なれば。安堵を申し所領に

下り。義經の都下着をば知らで御供中きぬなり。さはありながらこの五六年。紀州藤代にありとはいへど。君の御事龜井が行方。一方ならぬによりさうて。歩行して紀州藤代を出で。急ぐとすれど歩路。日數積りて昨日迄。七十五日にて昨夜着いて。今日の御合戰に逢うたるはなんばう果報の者ぞ。龜井が矢程こそなくともうけて見よとぞいうたりける。下中夫太奥方の軍兵は楯の端をつき重ねて鈴木が射る矢を待ち懸けたり。鈴木この由見るより も。十三束三つがけ。三人張にからりと番ひ本弭末弭ひとつになれと。きり〳〵と引き絞り。かなぐり放しにかつきと放す。一陣に進んだる。照井が從弟に。丸田の藤次が。たか野がたうの矢一筋と。進み懸けたる胸板に。

立つより早くくつと拔け。裏に控へたる。むき野の四郎が首の骨にひつしと立つ。二騎の武者が溜めずして。弓手妻手へとうとうと落ちにけり。續く軍兵これを見て。この者どもが矢先には鐵の楯をついたりとも。叶ふべしとも覺えずや。この陣引けやと云ふ儘にむら〳〵ばつと引いたりけり。上鈴木兄弟櫓よりも。下り拳に。毛よき武者をかいえりかいえり。指し取り引き詰め。散々に射たりけり。矢種盡くれば鈴木兄弟。櫓をゆらりと飛んで下り。駒引き寄せて打乘り。衣川の中の瀬を。水に鷗が一雙波間を傳ふ風情にて。鐙の鼻にて涙を叩かせざめかいて渡しけり。奥方の軍兵。この由を見るよりも。鈴木兄弟手取りにせよ。太刀も刀もいるべきかとて折り重

つて犇いたり。鈴木兄弟。この由を見るよりも玉に馴れたる蓬萊の鳥の風情も斯くやらん。驚く氣色はなかりけり。大勢の中へ割つて入り。西から東北から南。蜘蛛手かくなは十文字八花形といふものに。散々に切つたりけり。鈴木の三郎重家十三騎斬つて落せば弟龜井が手に掛けて。二十七騎薙ぎ伏する。實には敵も怵へばこそ。風に木の葉の散る樣にむら〳〵ばつと引いたりけり。この人々は手も負はずし。河靜々と渡し戻し勢かゝつて控へたる異國の樊噲張良も斯くやと思ひ知られてあり。

武藏坊辨慶は櫓の上にて熟々見て。あら面白と鈴木が合戰したる樣や。流石にあの方々は。天下の御用。くじよの軍をし習うたる人々にて。敵の色を覺つて。駈

け引いつる心根の面白さよ。暫く人々御待ちあれ。出立つて來んと云ふ儘に。おていへつつと入り。黑糸縅の鎧を着。先の梨子打烏帽子にて。今度は白柄の薙刀を打ちかたげ。大手の櫓に走り上つて。東向にぞ立つたりける。（同音）抑比は何時ならん。文治五年。閏四月の上十八日の未だ巳の刻許なるに。照りに照つたる朝日に。物具の金物は折柄色や勝るらん。開いた扇は紅にて。日に指し向つて立つたりける。武藏坊が有樣はたうはつ毘沙門四天王の荒れたる氣色も斯くやらんと。大音上げて呼ばはる。如何に奥方の軍兵。鳴を靜めて事の心を確に聞け。それ人間の命は電光朝露。打つも打たるも夢の戲。昨日迄は肩を並べ。膝を組みし面々が。

今日敵となれるも。因果歴然の道理に因つて世をも人をも怨むまじい。さりながら汝等が。遠國に住んでいりとり強盗し。境のはう地論じ。二十騎三十騎。引き分け引き分け。此處彼處にて空印地し。飛礫打つたらんには似まじいぞ。今日武藏がする軍こそ手本よ見習へ。奥方の軍兵。今日武藏が長刀にて。斬り殘したらん輩は。見しものと思ひ出ば後世をば吊うて給べ。末代の物語に。辨慶舞を一番舞はうぞやう囃いで給べや人々。ツレ鈴木兄弟は。豫て用意やしたりけん。皷を取り出だし敲き上げて囃す。地體武藏はさんとにても亂舞延年の上手舞をば一手習うたり。長刀の柄をとう〳〵と打つて調子を伺うて立つたりしが。かすみにかすんで。大きなる聲をはつた

とあげ一聲をぞとつたりける。サシ 太夫 嬉しやとう〳〵と。鳴るは。瀧の水日は照るとも。何時も絶えせじ面白や。ツレ 花を流すは吉野の川。太夫 筏を下すは大井川。ツレ 同音 紅葉を流す立田川。都邊に。名川様々多けれど遠國ながら名所かな。きり山高嶺の。殘の雪消え。谷のつららも融けぬれば。衣川の水嵩勝つて。奥方の軍兵を。辨慶が薙刀にて。湊をさいて。斬り流す斬り流すと。揉烏帽子といふ曲を。一拍子はらりと蹈んで開いた扇を櫓より。衣川へ颯と投げ入れ扇の落つるより早くあう櫓を飛んで下りたりけり。さんのへたちの白葦毛。七き八ふん。あけ六歳に引き寄せゆらりと乘つたりけり。鷲尾片岡。先驅せんと進んだり。辨慶がこれを見て。いで〳〵武藏が

荒切せん。跡をばこなせ若武者共とて先驅してこそ渡しけれ。向はしのぶもとよしたけい丸田を先として。奥には我と思しき者三百騎許で控へたる。陣の中へ武藏。駒を颯と駈け入れたり。奥方の軍兵は。陣を二つに分けたりけり。されども爰に。高田の太郎と名乘つて。武藏坊に渡り合ふ。辨慶これを見て。もつて開いて横手切にかんしと斬る。甲の弓手の吹返。表のほうさき。妻手のかぶりの板を掛けて。づんと斬つてぞ落しける。はなさきこの由を見るよりも。あ切つたりや武藏殿。そこを引くなといふ儘に。透間もなく懸りけり。辨慶これを見て。もつて開いて。拜み打に丁と打つ。甲の眞甲切り割つて。後は鍪母衣附。前は半頭涎金。四枚金胴ひつしき草摺二

つに颯と打ち割られて弓手妻手へ捌けたり。柴田の四郎がこれを見て。あ切つたりや武藏殿。そこを引くなといふ儘に。透間もなく懸りけり。辨慶これを見てあう奥方の軍兵は。心は剛にありけるぞや。退く風情の見えざるは。手並の程を見せんとて。もつて開いて。丁と打つたりけり。柴田も聞うる兵にて。かぶりの板にて受け流し。さらぬ體にて駈け通す。二陣に續いたる。龜井の六郎が。武藏殿の切り殘しを。受け取つたりやといふ儘に。青江作三尺八寸横手切にかんしと斬る。龜井が腕や強かりけん。太刀の金や良かりけん。四枚胴を押し掛け。二十五差いたる征矢を掛け。ゑや腰の番をば。車切といふものにふつつと斬つてぞ落しける。上は拔けてどうと落つれ

ば下は鞍に乗つたりけり。これを始めて七騎の人。入り違へ揉み違へ散々に斬てぞ廻りける。斯かりける所に土佐の八郎高直と。龜井の六郎重清。むずと組んで二人が。兩馬の間へどうと落つる龜井は無雙の剛の者。仇と組むならば。大勢定めて折り逢ふべしと。色豫て覺り。土佐を取つて押へて。首ふつと搔き落し。立ち上らんとする所に土佐が乳母の十郎が。透をあらせず折り逢うて。龜井が弓手の腕をば。水も溜らず打ち落す龜井無雙の剛の者。心は高砂や高砂や松の緑と榮ゆれども。痛手を負ひぬれば。太刀を杖に突き今を限りと見ゆる。舍兄鈴木。大勢の中にて戰ひしが。弟龜井は痛手を負ひ。存命不定なるを聞き。敵を四方へ追つ散らし。我が身を屹と見

たりければ。痛手薄手の嫌なく。十三處手を負うたり。今は斯うよと思ひて。龜井を肩に引つ懸けて。城の内へつつと入り。高き所に置き。やあそこで腹切れ龜井。南無阿彌陀佛と諸共に。鈴木は生年三十三。龜井の六郎十六。刺し違へて死にけるを惜まぬ者はなかりけり。

武藏坊辨慶君の御前に參り。早や鈴木兄弟こそ討死仕つて候へと申しければ。判官聞召されて。龜井がことは豫てより思ひ設けたること。無慘や鈴木。紀伊國より遙々と下り。世になき主の方人して。討たれぬるこそ無慘なれ。今朝より誦む御經も。早やほうなうの時分になるに防いでたべや武藏。辨慶承り今度は某が死番に當つて候と申しもあへず。おていへつつと入り。鐵を

厚さ五分に鍛はせ。桶皮胴と名付けたるを。刀溜に着たりけり。黒糸縅の鎧。糸緋縅の鎧三領を重ねさつくと着。ゑびら刀首搔刀三腰までこそ指いたりけれ。長刀こそりはを打ち違へ。鞍の前輪に締め付け。弓手に熊手。おつ取つて。妻手に長刀を打ちかたげ膝にて馬を乗つたりけり。辨慶が驅け出づれば唯小山の動く如くなり。大勢の中へ割つて入る。膝口高股三の腹はらり〳〵と引き破れば將棊倒の如くなり。この勢に恐れ。捨鞭打つて逃くる所へ辨慶駒を駈け寄せ。熊手を指し渡し。甲の天邊に引つ懸け。えいというて引き寄せ下げ斬りにしてぞ捨てにける。況んやかんわう唐迄。その名を得たる辨慶が今を最後の合戰に。面を合はする者はなし。怒れる眼は黒雲

の所々の晴間より。朝日のうつろふ如くなり。敵を靡けて喚く音。雷霆電光霹靂神獅子象虎の吼うる聲斯くやと思ひ知られたり。辨慶が二度の驅に。奥方の軍兵は百八十騎討たれたり。今は向ふ敵のあらざれば。物臭い軍かな。思うつる事よとて。小高き所に駒駈け上げ暫陣をぞ取つたりける。ソキかかりける所に。信夫の庄司が嫡子。小太郎といつしもの。辨慶が以前の驅足に父を討たせ。一矢射ばやと狙ひしが。早爰にて見付け斜ならずに悦び弓と矢を打ち番つて。かいなくつてひようと射た。辨慶がのど〳〵と控へたる。胸板にはつしと中り。小兵の矢の悲しさは。ひそりけるその矢が。内冑へからりと入つて。笛の鎖にひつしと立つ。上太夫もの〳〵しといふ儘に。

矢を搔いかなぐつて見たりければ。鳥のしたにて射たりけんからは抜けて根は留まる。さしもに剛なる辨慶も。馬より下にどうと落つる。クドキ 太夫 あら無念や西塔の武蔵と。て鬼神の樣にいはれしが。斯程の細矢に中つて果敢なくならんずる口惜しさよ。コトバ 太夫 最後に彼奴を斬らずば黄泉の障なるべし。さりながら以前の如く。馬に乘つて追ふならば怖ぢて左右なく近付くまじい。所詮虚死始め近付かん所を。斬つて呉れればやと思ひ。側なる胄引つ懸けて虚死してぞたるみける。ツレ 信夫 この由見るよりも。さこそ人々の。鬼神の樣に宣ひし。武蔵坊辨慶をこそ。某手に懸け。射落して候へ。首取つて見せ申さんといふ儘に。いかものづくり三尺八寸。眞甲に指し翳し揉みに揉うて

ぞ走りける。太夫 辨慶鎧の隙よりも。見上げて屹と見て。ツメ 天晴器量やよい器量かな。下 あつたら若い者を。辨慶が手に懸け失はん事の無惨さよ。下 太刀の寸は延びたるや。彼奴に一太刀打たれては。悪しかりなんと思ひて。近々と詰め寄せ。うしおきにかつぱと起き。狼藉なる奴めには。手並の程を見せんとて。側なる長刀おつ取つて追ひ詰めさらりと薙いだりけり。高胯斬つて落され。の つけに反す所を細首宙に打ち落し。朱に染うだる薙刀。弓手の肩に投げ懸け駒引き寄せて打乘り。城の内へつつと入り。駒を彼處に乘り放し大薙刀に縋り。いやたんちたんぢと漂ひ。あら苦しや兼房よ君は何處に。お座しまコトバ す。兼房武蔵が手を引いて。御前さして参る。

ツレ 判官御覽あつて。あれは武藏か。ワキ さん候。ツレ 聲を聞けば古の武藏。姿はただ鬼神の如し。羨ましやな武藏は。生をも變へず忽に荒人神となつたるぞや。それへ〳〵と仰せければ。太夫承ると申して。落椽にづんと上がり。甲を脫いでとうと置き。甲の袖を片敷いて今を限と見ゆるが。兼房を近付け。最期に若君を一目拜み申さんと云ふ。兼房は若君を抱き申し武藏が手にぞ渡しける。クドキ 太夫 辨慶若君を抱き申し後の髮をかき撫で。龜割山の峠にて御產あらせ給ひし時に。辨慶が參り產湯を引かせ申し。男子は七歲迄物あやかりと承る。若君の御果報あやからせ給はば。伯父賴朝に御あやかり候へ。戒力は御親父判官。弓は爲朝の御弓勢。二相を悟つて惡魔の者の恐れんは。

平の秩父にあやからせ給へ。打物召されものの骨切つて。人に怖ぢられたらんはものその數にて候はねども斯う申す武藏めにあやからせ給へ。命の長くわたらせ給はんは三浦の大助が百六になりしに。あやからせ給へと申せし事の夢となり。未だ十にも足らずして。衣川の水の泡と消え果て給はん痛はしやと。はら〳〵と歎きければあら痛はしや若君は何のよしみをも。知召されざりしが。辨慶があらけなき。扮裝にも怖ぢ給はず。胸板を下りに流るる血を御覽じていたいけしたる。御手にて搔き撫でさせ給ひつつ。犇々と抱き付きわつと叫ばせ給ふにぞ。御前の女房お末の人。兼房。武藏も。消え入る樣に。泣きにけり。コトバ ツレ 判官御覽あつて。武藏が最期に酒を飲ませ

よ兼房。（ツキ 中）承ると申して。長柄の銚子。紅葉の盃を御前に上ぐる。（ツレ）判官取り上げさせ給ひて。（上）これは二世迄をさすぞ賜はれ。辨慶餘の忝さに。三度戴きたうたうと受け。悠々とはほしけれども。笛が切れたる事なれば。血に交りてこの酒が。（フシ 同音）胸板を下にさらり〳〵と流れけり。（コトバ ツキ）判官御覽あつて。武藏が最期は近づいたるぞ。念佛勸めよ。（ツレ）承ると申して。兼房念佛を勸めければ。（ツヤ）寄手の兵これを聞き。城の内に念佛の聞こうるは。如何樣武藏が腹を切るか。大剛の者の自害の樣。いざ見習つて手本にせん。（ツレ）尤然るべしとて我れ先にと亂れ入る。（太夫）判官御覽あつて。あは敵の近付くは。辨慶腹を切れ。兼房は防矢射よ。御經せんずる間とて御座を立

たせ給へば。（ツキ）辨慶は敵の呼ばはる聲音を力にし。大庭に下り。長刀に縋り又たんち〳〵と漂ふ。（太夫）判官御覽あつて。また打つて出づるか武藏。さん候。（イロ）判官思ひ續けて斯く許。後の世もまた後の世も。廻り合へそむ紫の（下）雲の上まで。（イロ ロト）辨慶承り返歌と思しくて斯く許。（ツメ 同音）六道の巷の末に待てよ君。後れ先立つ習ありとも。と斯樣に申して堀の舟橋をかぶ〳〵と渡りけり。奥の軍兵この由を見るよりも。あら恐ろしや又辨慶が懸かるは。爰を引けやと云ふ儘に我れ先にとぞ逃げにける。衣川颯と追つ越し向のはははたにて漂蕩する兵を十七八騎斬り伏せ。此方の端へ歸らんとしたりしが次第に性根亂れるれば。西向につつ立つて薙刀眼に搖り立てて。光明眞

言稱へつつ生年三十八にして衣川の。立往生を惜まぬものはなかりけり。（コトバツレ）奥方の軍兵この由を見るよりも。あら恐ろしや又辨慶が人をたばかつて打たんとする計よ。近う寄つて叶ふまじいぞ。遠矢を射よといふ儘に指し取り引き詰め散々に射たりけり。武藏に中たるその矢は。葦を束ねて槇の板戸を突く風情。固より死したる辨慶にて。その身をちつとも痛まず。（太夫）かかりける所にぬまたての庄司が申しけるは。如何に方々。到つて心の剛なるものは。立ちながら死する習のあると申すに。誰かある弓の弭にてちつと突いて見よ。（ツレ）實にこれもいはれたりとて。二十騎三十騎。駈け寄せ〳〵立ちけれども怖ぢて左右なく近付かず。（太夫）ぬまたての庄司がこれを見て。臆

病なる人々かな。其處退けぬまたて突かんとて。駒の手綱搔い繰つて。かつし〳〵と歩ませ寄せ。弓の弭をおつ取り伸べ。怖づ怖づ。（ツメ）かつぱと突いた。固より死したる辨慶で枯木を倒す如くに。たんぶとまろびけり。まろびけるその前に。持つたる長刀ひらりとするを見るよりも。ぬまたての庄司は。死したる者と知らずして又切つて懸かると心得。氣も魂も身に添はず駒より下に轉び落ち浮きぬ沈みぬ流れて。衣川の堰にせかれて死んだりしを。貴賤上下押し並べて。惡まぬものはなかりけり。

硫黄が島

爰に門脇の平宰相教盛。折を得て小松殿に參り。大臣に申されけるは。如何に大臣聞召せ。今度后の宮の御入内に。非常の大赦を行はるべきよし承る。これは何にもすぐれたる御祈禱なり。

夫れ人のなげきを止めさせ給はば。身の喜もあるべきなり。その上丹波の少將成經。ならびに平判官康頼。法性寺の執行がこと。よきやうに御計らひあつて。今度の内に赦免ならせたまはらば。いかがは目出度候ひなん。まづ思ひても御覽ぜよ。薩摩潟硫黄が島の。うき住居。思ひやるさへ不便なり。

小松殿聞召し。淨海に參りて

申さんとて。相國にかくと申させ給へば。相國聞召されて。いざとよ執行は。隨分は淨海が口入によつて。人と成りし者ぞかし。それに事に觸れ東山。鹿谷の謀叛に。當家をやすからず惡口しけると聞くこそ奇怪なれ。執行が事においては全う淨海は知るべからず。小松殿聞召し。御諚尤にて候へども。始より同罪にて。一所の島に流し。赦免の時彼一人。めし殘され候はば。なほ罪深き罪科たるべし。ただ同じ次でとぞ申されける。淨海聞召されて。いや〳〵執行がことにおいては。全う淨海は知るべからずと。大きに怒り給へば。この上力及ばずとて。八條殿を御出あり。門脇の屋形に移らせ給ふ。明れば七月九日。薩摩潟硫黄が島の流人は。丹波の少將成經ならびに平判

官康頼。　兩人の御教書。　八條殿よりも出でければ。　十日の逗留にて。　同じき二十日に使京を立つ。

されば薩摩潟とは總名なり。　奥七島は唐土口。　五島は日本。　總じて島は十二。　始はしらいしが島。　ちどりが島。

硫黄が島とて三つの島へ。　一人づつ流さるべきにてありしかども。　門脇殿の御訴訟深きによつて。　三人ながらめしあつめ。　薩摩潟硫黄が島へ流し給ふ。

ある時この人々三人。　あまりの徒然さに。　いざや島巡して遊ばんとて。　島巡をこそしたまひけれ。　かつや都にて傳へ聞きしよりは。　遙に越えて覺えたり。　乾より巽へ。　重山連つて。　百千萬の雷の音絶えず。　峰には雷電隙もなし。　麓の里に雨降りて。　昔は鬼が住みければ。

鬼界が島とも申すなり。　今は又何となく。　峰に硫黄が立ちければ。　薩摩潟硫黄が島と申すなり。　たま〳〵この島に住む人は。　わが住む國の人にかはり。　わがいふことをかれ知らず。　かれいふことをわれ知らず。　男はあれども烏帽子着ず。　女はあれども髪下げず。　賤が山田をかへさねば。　米穀の種もなかりけり。　その桑をとらざれば。　絹帛のたぐひもなかりけり。　水をむすばんとては。　澤に下り。　こたか木をとらんとては。　山林に入りて迷ひけり。

明暮月日を送りける。　うき身の程こそ悲しけれ。　されども少將のためには。　御舅にておはします。　門脇の平宰相教盛の所領。　肥前の國鹿瀬の庄なりければ。　少將一人の衣裳食事は。　日に隨つて送らせ給ふ。　一人の衣裳食事

をもつて。二人の人をぞはごくみける。判官入道少將。一つ心に申されけるは。我等都にありし時。熊野を信じ申し。五度づつ參り今五度參り。十度に足さんと思ひしに。この島に流され。赦免もなくて終に。この島のすもりと。なり果てん事こそ口惜しけれ。

げにやらん權現は。我を念ぜん衆生のあらば。いかならん野の末山の奥にありとも。光をさいて導かんと。誓はせ給ふ由承れば。たとへこの島に候とも。三山をいはひ申し。我等が歸洛を。權現に祈り申すべし。さて僧都はいかゞ思召す。僧都聞召されて。山王の御事ならば然るべし。權現の御事は。さしも信心候はず。この上力及ばずとて。二人すゝ〳〵と御たちあり。漫々たる海上を見渡し。峨々とある磯邊を巡り。三つの御山に似たる所を。尋ねけり。あるひは山高うして淨水久しく流れ出づ。あるひは木々の梢れい〳〵として峙り。ここは本宮證誠殿。かしこは新宮かんのくら。遙の北にあたりつつ。白石の峨々とあるよりも瀧水雲より流れ出で。松の嵐も神さび。飛龍權現の御立ある。那智の御山に似たりとて。ここを那智とぞ定めける。ことば攝津の國くぼつの王子より。九十九所の王子王子を。かたの如く勸請申し。それよりくろめに御下向あり。その間に僧都は。高き所に上り。東西南北を見渡し。よろづ觀念してましまし。しけるに。黑雲厚く隔つて。石巖崩れ海に入る。その時僧都ぜん(禪)に古き詩を思ひ出づる。同音 風佛前に花を散

す。岸崩れて魚害す。その岸心なくして。罪を得ず。コトバ
されば五體は五つのかり物。ソキ地水火風かたどり。心は
虚空の如くにて。形なければ色なし。諸法は有無の二道
にて。有とも見え。又はなし。フシ立つても居ても座禪な
りと。破戒無慙の高枕し起きぬ臥ぬぞしたまひける。イロ
フシこの上力及ばずとて。二人又すこ〳〵と。くろめをお
たちあるが。日數積つて裁ちかふべき。淨衣のあらされ
ば。麻の衣の潮に朽ちたるを。澤の水にて洗ひ。岩田川
の清き瀬にて。煩惱の垢をすすぎ。五大王子を伏拜み。
それよりも山路に上りければ。フシ高原や峰の嵐に誘はれ
て。いわうをこして參るにぞ。中天竺も遠からず。しう
てうちかつゆくませ。河發心門にも入りぬれば。はや本

宮に着き給ふ。あら有難やこれこそ。本宮證誠殿にてま
しませ。いざや我等が祝詞を申し。歸洛を權現に祈り申
さんとて。散米のあらざれば。濱の眞砂子を潮に洗ひ。
散米と定め。花を手折つて。御幣に捧げ。歸洛の祝詞を
ぞ申されける。
同音　再拜再拜これ當り來れる歳次治承。二年。戊戌。月の
ならびは十月二月。日の數三百五十餘箇日。吉日良辰を
えらんで掛卷もかたじけなくまします。日本第一大靈驗
熊野三所權現。ならびに飛龍大薩陀の教令宇豆の廣前に
して。信心の大施主羽林藤原の成經。ならびに沙彌性照。
一心淸淨の誠をいたし。三業相應の志をぬきんで。謹ん
でもつて敬白。

夫れ證誠大菩薩は。濟度苦海の教主。三身圓滿の覺王たり。兩所權現は。東方淨瑠璃醫王の主。衆病悉除の如來なり。あるひは南方普陀落能化の主。入重玄門の大士若王子は。娑婆世界の本主施無畏者の大士頂上の。佛面を現じて。衆生の諸願を滿てしめ給ふ。故に上一人をはじめ。下萬民に至るまで。あるひは現世安穩。または後世善所のために。朝には淨水を掬んで。煩惱の垢をすすぎ。夕には深山にむかつて法號を唱ふるに。感應怠ることなし。峨々とある峰の高きをば。神德の高さにたとふ。涓涓とある谷の深きをば。弘誓の深きに擬らへ。雲を分けて上り露を凌いで下る。ここに利益の地を賴まずんば。如何歩を險難の地に運ばんや。權現の德を仰がずんば。

なんぞ必ずしも。幽遠の境にましまさんや。よつて證誠大權現。ならびに飛龍大菩薩。青蓮慈悲の御眼をならべ。さを鹿の御耳をふり立てて。我等が無二の丹精を知現し(玉カ)て。一々の懇志を納受せしめ。給へ。まゝの御兩所權現は。各機にしたがつて。あるひは有緣の衆生を導き。又は無緣の群類を救はんがために。七寶莊嚴の住家を離れ。八萬四千の光を和げ。かりに垂跡と現じ。六道三有の塵に同じ給へり。故に定業亦能轉求長壽得長壽禮拜袖を連ね。幣帛禮奠を捧ぐる事。隙もなし忍辱の衣を重ね。覺道の花を捧げ。神殿の床を動し。信心の水を清いては。利生の池に湛へたり。神明納受ましませば。諸願なんぞ成就せざらんや。願くは十二所權現。利生の翼をつらね

て。遙に苦海の空を翔つて。左遷の憂を休め。歸洛の本懷を見せしめ給へ。再拜再拜と禮拜して。淨衣の袂をしぼるは。有難くこそ聞えけれ。

文覺

コトバ

そも〳〵源氏の御代を開かせ給ふべき。瑞相どもこそ多かりけれ。その故いかにと尋ぬるに。もとは攝津の國渡部源氏の大將に。遠藤武者遠房がその子に。遠藤瀧口盛遠と申せしが。出家して戒名を文覺とこそ申しけれ。その頃あらざる大願を起し。眞言教に心をかけ。酷熱の暑きに笠をも着ず。玄冬の冴ゆる夜衾の數をも重ねず。大峰葛城を七度まで通り。熊野の那智の瀧に。三七日打たれ。正身大聖明王に逢ひ奉りしかば。すでに權者とこそ聞えけれ。その後都へ上り。愛宕山の麓。高雄の神護寺と申す古寺に御座ありしが。かかる上は佛閣を建立せ

んこそ本望なれ。まづしゆろ（鐘楼）建立あるべしとて。洛中洛外を勸進して廻られしが。院の御所法住寺殿に參り。これは高雄の神護寺の。鐘撞堂の勸進に參りて候。御奉加あれと申し。勸進帳を文覺は高らかにこそ讀まれけれ。

カカル頃は卯月上旬に遲櫻（同音フシ）ちる木の下は。寒からで。空に知られぬ卯の花の雪は小庭に散りしきて。山杜鵑村雨に。ぬれてさわたる折節に。雲上の。管絃。講は。半ばなり。コトバ上萬達は御覽じて。そうぞうなり後日に參れ。御奉加あるべしとぞ仰せける。文覺承り。なに雲上の管絃講とや。笙ちやく（笛）琴箜篌。琵琶によふとうの遊は一旦の榮花。鐘撞堂の勸進は。來世のためにて候へば。只今管絃講を御ととめあつて。御奉加あれと申し。勸進

帳を文覺は高らかにこそ讀まれけれ。上萬達は御覽じて。そうぞうなりあの法師を。追ひ出せと仰せければ。おくちもしらぬ青侍。十四五人はらりと立つて。そうぞうなり後日に參れ。御奉加あるべしとの仰にて候を。支へて參り狼藉を。致すところは奇怪なり。急ぎ出でよといふままに。文覺の持たれたる勸進帳を引奪うて。七つ八つに引つさいて。彼所へかばと投げ棄て。ツメ（同音）またとつて引つ立てていや門の傍へ出でにけり。文覺御覽じて。そもく〳〵これは。何事ぞ。否ならば幾度も。その由をこそ申すべきに。何ぞ文覺が。黑衣の上に恥辱を。與ふるところは遺恨なり。よく〳〵物を按ずるに。千手の二十八部衆。藥師十二神將と。降三世明王の。降魔の利劍を提

げて悪魔を降伏し給ふに。何ぞ文覺が。帶したるこの劒は。何の料ぞと思召し。薄墨染の衣の袖を。くる〳〵とくり上げて。馬手の脇よりも。氷の樣なる劒をぬき。おつぷせ〳〵さすほどに。靑侍を七八人。時刻移さず刺殺す。四門の武士ども集まつて。高手小手に縛めて庭上にこそはひつすゑけれ。（コトバ）上萬達は御覽じて。こは音に聞えたるほつかふものの文覺なり。古もかかる惡事をし。出家しぬると聞きしが。なほもその心の失せざる事の不道さよ。うんきをはねよと議せらるれば。すでに死罪に及びけり。されども法皇よりの宣旨には。たとへば文覺こそ破戒の者にてありとも。解脫幢相の。種の法衣を身にまとひたる者を。いかにとし劒の尖には。かけさすべ

き。ただ〳〵七條大路に。土穴を構へ落し入れ。百日を待つべし。百日過きば掘り起し。けうやう（孝養）し跡をはとうて得させよと。綸言あれば官人等。鋤鍬を持つて出で。七條西の洞院に（同音フシニ）二丈五尺に。土穴を掘つて文覺を落し入れ。上にも土をはねおほひ。百日日持を。送りしは實に哀なる。次第かな。（コトバ）かくて十四五日うち過ぎ。文覺の籠られたる籠のあたりに聲あつて。いかにこの内の聖々と召さるれば。文覺承り。かやうの土穴に籠つて後。訪ひくる者もなかりしに。一向に我をば失へとの宣旨により。尋ぬるぞと心得。濁惡しよちうなる間。それとても力なし。候とこそ答へけれ。いや〳〵別の仔細にてなし。比叡山中堂藥師。

醫王善師の仰には。あら無慚や文覺は。破戒の者とはいひながら。あらざる大願を起し。未だその願成就せず。今一度助けおき。所願を成就させんため。十二神のその内に。金毘羅大神御使に參りたり。土穴の暗き闇あらば。瑠璃の壺をとらするぞ。壺の光で照して見よ。食事の望のあるならば。とても壺に藥を入れて得さする上。藥を服して命をつげ。これたまはれや文覺と。げにあでやかなる御手にて。瑠璃の壺をぞ（カカル）賜はりける。（同音フシ）げにも暗き闇をば。壺の光で照しけり。食事の望のある時は。藥を服して命を。つぐ何に。その身の衰ふべき。瘠せず黑まず。文覺は日數を送り。給ひにけり。（コトバ）また十四五日うち過ぎ文覺の籠られたる籠のあたりに聲あ

つて。いかにこの内の聖々と召さるれば。候（さふらふ）とこそ答へけり。いや〳〵別の仔細にてなし。中堂藥師の仰には。左樣の土穴に籠らんより我が前に參り。經讀み念佛申し。百日を待つべしとの仰にて候（さふらふ）。文覺承（うけたまは）り。かやうの土穴に籠りて何としてかは出でさうべき。金毘羅大きに腹を立て。左樣の心中にあこそ。かかる無明の苦は受くれ。神通自在たるべくば。などかたやすく出でざるべき。文覺げにもと思ひ。居たる所をづんと立つと思へば。その身は芥子のごとくにて。出でられけるこそ殊勝なれ。（カカル）（同音フシ）さて金毘羅と。うちつれて。中堂藥師に參りつつ。經讀み陀羅尼をみて給ひて。明けぬ。暮れぬと。せし程にはや。百日に。なりにけり。（コトバ）滿じける曉かたじけ

なくも御本尊は。御帳のうちよりも。あらたに御聲を出ださせ給ひ。いかに文覺聞くかとよ。日數も今日は百日と覺うる。人の心を破るは菩薩の行にもれたる業。はやはや罷り歸り。御尋に逢ふべきなりとぞ仰せける。文覺承り畏つて候とて。またもとの上穴に籠られけり。

さても法皇よりの宣旨には。ありし時の聖を土の籠へ入れつるが。日數も今日は百日と覺うる。掘り越し孝養し跡をばとうて得させよと。綸言あれば官人。鋤鍬を持つて。出で上穴をあけて見てあれば。瘠せもせず黑みもせず。いとど氣色はあでやかに。につこと笑つて出で給へば。

同音 ツメクワンニン 官人肝を消し東西へばつとぞにげにける。文覺御覽じてなう何とて動轉したまふぞ。これはありし時の

聖にてはなきかと。文覺に力をつけられて。やう〳〵心をとり直し文覺を。守護し奉り法住寺殿にぞ參りける。

コトバ 法皇叡覽ましく〳〵て。殊勝なりとよ。文覺。ここにたとへの候ぞ。愚者の作善は善ともに罪なり。知者の作る罪は。罪ともに善とは今こそ思ひ知られたれ。今日よりも文覺聖人に補ひ置くぞ。さりながら。ありし時の勸進帳を只今讀め。聽聞せんとの宣旨なり。文覺承り。勸進帳はあらばこそ。時刻移しては叶はじと思ひ。持つた る扇をはらりと開き。高々とさし上げ。勸進帳を文覺は高らかにこそ讀まれけれ。

ヨミモノ 沙彌文覺敬つて白す。殊には貴賤道俗の助成を蒙つて。高雄山の靈地に一院を建立し。二世安樂の大利を勤

行せしめんと乞ふ勸進の狀。夫れ惟れば眞如廣大なり。成佛の假名をたつといへと未だ法性隨妄の。雲厚く覆つて。十二因緣の峰にたなびきしより以來。本有。心蓮の月の光幽にして未だ三毒四慢の。大虛に顯はれず。悲しきかな佛日早く沒して。生死流轉の衢に。冥々たり。唯色に耽り香に耽る。誰か狂象跳猿のまとひを謝せん。徒に人を謗し法を謗す。これあに琰羅獄卒の責を免れんや。

カカル 同音

ここに文覺たまくく。俗塵を。打ち拂つて。法衣を飾るといへと。惡行なほ心に。逞しうして日夜に作り善苗また。耳に榮つて朝暮にすたる。痛ましきかな。再び三途の火坑に歸つて永く。生死の苦輪を。廻らさんことを。この故に牟尼の。憲章千萬軸。軸々に。佛種の。

因を。あらはし從緣至誠の法。一つとして。菩提の彼岸に。到らずといふことなし。かるがゆゑに。文覺無常の。觀門に淚を落し上下の。親族を勸め上品。蓮臺にあなうらを。勵して等明。覺王の。靈場を。建てんとなり。夫れ高雄は。山堆うして。鷲峰山の梢を表し谷。靜にして商山洞の。苔をしけり。岩泉咽んで。布を引き嶺猿。叫んで。枝に。遊ぶ人里。遠くして囂塵なし。師跡。事なうして信心のみあり地形。勝れたり尤も。佛天を崇むべし奉加小なり。誰か助成をせざらん夙に聞く。聚沙爲佛塔功德。忽に。佛因を感ず。況んや一紙。半錢の寶財においてをや。願はくは建立成就して。禁闕。鳳曆御願。圓滿乃至都鄙。遠近里民緇素。堯舜無爲の。化を謳ひ椿

葉。再くはいの。笑を披かんことはまた。しやうりやう（聖霊）ゆひ（幽儀）前後大小。速に必ず一佛。眞門の臺に至り三身。萬徳の月を翫ばん。仍て勧進修行の趣。蓋以如此。治承三年三月の日。文覺坊とぞ讀み上げける。かの文覺の勧進帳を。ほめぬ人はなかりけり。

法皇叡聞ましまして。殊勝なりとよ文覺。はや〳〵罷り歸りよきに建立仕れ。御奉加あるべしとの宣旨は。面目とこそ聞えけれ。されども諸卿一とうに奏し申されけるやうは。かかる破戒の木科人を。さしも置かせ給ひなば狼藉國に餘りなん。死罪をば宥められ。流罪させられ候はばいしかりなんとぞ申されける。かかりけるところに右大將宗盛。進み出でて申されけるは。あはれ同じ

う候はば。某申したまはつて。伊豆の三島の觀音堂へ流し。失ふべしとぞ申されける。法皇叡聞ましまして。と もかくも宗盛が計らひたるべしとて。平家方へぞ渡されける。宗盛なのめに思召し。ふくいの庄の下司。二郎太夫ありはるに仰せつけさせ給ひ。伊豆の三島の觀音堂へ流し失はれしは。これぞ平家の。運の末とぞ聞えける。さても法皇よりの宣旨には。構へて文覺を本道をば叶ふべからず。熊野の灘をまはし。舟路たるべしとの宣旨なり。承ると申して。上下三十六人にて。文覺を守護し奉り。法住寺殿をぞ出でにける。（サシカドヒ）あら痛はしや文覺は。都の名殘も今ばかりとやおぼしけん。六條邊に立ち出でて。東の方を御覽ずれば。音羽の山の松風に。（同音フシ）をの

れと。きんやしらむらん。麓に落つる。瀧壺は。名に知られたる。清水寺。本尊は千手。千眼。にやくかせいくわんの。御誓もらし給はずば。文覺がこのたびの。遠流の罪を宥めつつ。今一度都へ。歸し給へと祈誓して。西を遙かに眺むれば。丹波に老の山。谷の堂嶺の堂。嵯峨法輪寺。太秦の藥師になほも。名殘あり。北には鞍馬せき山。鬼門にあたりて比叡山。中堂藥師の十二神。さて我が山の十二神。金毘羅大將しちせんのやしや。北野を拜し奉り。文覺この度の。遠流の罪を宥めつつ。二度歸洛つかまつり。多年望の願どもを成就せさせ給へやと。祈誓を申させ給ひつつ。南を遙に眺むれば。八幡山に。立つ霧の岩清水にやかかるらん。かいとく解脱。弘誓力。

金剛八幡願くは。源氏を守り給へやと。祈誓を申させ給ひつつ。賤が作道。鳥羽の山莊を。よそながら伏し拜み。刑部左衞門なにがしが。涙はせきあへず。念佛申し經を讀み。その舊跡を。見渡せば。いとどひて。淀の津に着きければ。はや川船にのせられて。水に任せて流れ行く。弓手を遙に眺むれば。琴の音。しらむるきんやの里。かの在五中將の。眼白の鷹を手に据ゑし。片野の原の。狩衣今きて見るぞよしなき。馬手は山崎關戸の院。誰かたてけんたから寺。雛を育つる鳥飼のかふりの。里はこれかとよ。はや渡部に着きければ。海上遙に梶を取り。追手の風に帆を上げて。浪路遙に。吹かれ行く志こそ。あはれなれ。

コトバ 文覺心に思召す。 あつぱれ源氏の代なりせば。かほどの罪によも遠島までは流されじ。これもただ平家の奴原が重科するによつてなり。これより伊豆の大島まで。何十日にも行かば行け。源氏を守るしるしには。食事を止めて服すまじいと思召し。船底につつと入り。枕とつて引き寄せ。打臥し給ひてその後。起きも上り給はず又寝入り給ふこともなく。臥しながらのたまひけるは。さてここはいづくを通るぞ。これは天王寺の沖と申す。さては佛法最初の天王寺にて御座ありけるや。異國にては南岳大師。わが朝にては聖德太子。衆生濟度の慈悲深し。さりとも佛法方の文覺を。よも捨て果ては給はじな。さてここはいづくを通るぞ。これは住吉堺宇治の湊。若吹

上や玉津島。布引の松岩井寺。藤代峠由良の湊（カカル切）目の王子ちりの濱（同音フシ）みなべたなべの。沖過ぎて那智の。沖とぞ。申しける。文覺聞召されて。われこの御山に參り。三七日は瀧に打たれ。正身の大聖明王に逢ひ奉りしその時ははや。權者とぞ思ひしに。何と行ひ。なしたる文覺が。今日ぞや。ここはいづくぞはまの宮。さのの松原たひのまつ新。宮の湊伊那の里。伊勢の國志摩の國。尾張三河の。沖過ぎて天。龍の灘に。着き給ふ。コトバ この灘と申すは東國一の惡所なり。富士の高根に黑雲が。二なみ三なみさつとかかる。水主梶取これを見て。あは風よ恐ろしや。みつなはを解いて帆ごもを下ろせ。帆柱を立てなほせよと。いへる時刻もなかりけり。伊勢

の國。くつがおろしといふ風が。まんじうもんじに吹いたけり。熊野なる新宮おろしは後に吹き。一方ならず四方より。（同音ツメ）もみ合せたる風なれば枯木は枝をおろし。草の根をかへして。あぐる涙はひとへに。煙の立つがごとくなり。四方の風が一度にぱつと。もみ合せて吹く時は。今この船叶ふべきやうあらずして。片腹を立てくるり〳〵とまはりけり。守護の武士梶取ども。聲を揃へて一同に。南無阿彌陀佛と申せども。船のうちなる文覺は何に憂いた氣色ましまさずそらいびきかいてぞ。臥されける。守護の武士梶取ども。この由を見るよりも。あら不道のあの聖や。たとひ便船などにて。のつたりと申すとも。かかるこうは（荒波）の難あらば。御經讀み陀羅尼み

て。龍神納受の。祈禱なんどあるべきに。この沖にてわれ〳〵が。死せんずることどもはあの文覺ゆゑと覺うるなり。船底よりも引き出し。海へ入れんといふもあり。またある方の意見には。私ならぬ文覺なればいかがはせんといふもあり。かやうに色々と申しけるを。聖は聞召さるれど。いよ〳〵聞かぬ體をしてそらいびきかいてぞ。臥されたる。かかりけるところに。艫打つ涙が集つて。文覺のつぶりを。さつと打つぞ通りける。その時文覺腹を立て。臥したるところをかつぱと起き。船の舳板につつ立ち上り。大音上げて。なにこの沖を文覺が通ると知らぬかゐい。さこそ流人と思ひて。龍王だにも侮つて。この涙風を立つる。涙風止めぬものならば。龍宮とはい

ふまじきぞ。　文覺分け入つて。　ためしをたつて吳れうぞ
ゑい龍王めとぞ怒られたる。　かの文覺の心中は人にかは
つて覺えたり。

コトバ　かかりけるところに十四五なる童女。　涙の上に畏り。
上人の方を伏し拜み。　あら難有や候。　われをば誰とかお
ぼすらん。　龍宮のをと姫にこひさひ女とはみづからなり。
上人涙の上を御通りある由承り。　一目拜み申さんため。
攝津の國渡部よりつきそひ參り候へども。　船底に御寢あ
つて御出あること更になし。　かくて大崎の御堂に上らせ
給ひては。　いつの世にか拜み申すべきと存じ。　この涙風
を立て。　上人を拜み申すことの難有さよ。　いで〳〵さら
ばこうばの。　風やめて參らすべしと申して。　海底に入る

と見えければ。　今まで荒れて凄まじき。　同音フシ　やみ海
の面へい〳〵とし。　追手の。　風の吹きければ。　守護の
武士梶取ども。　上人を禮拜し奉り。　艫梶をたてなほし。
風に任せて吹かすれば。　都を出でて文覺は。　伊豆の大島
まで。　五十五日着き給ふに。　食事を止めて。　服せぬは。
源氏を守る。　しるしなり。

コトバ　かくて大崎の御堂に上らせ給へば。　都の警固は御暇
を申してぞ上りける。　かくて大崎の御堂に御座ありけれ
ども。　あたりの浦人參り。　上人を尊み申す事もなし。　如
何にもして彼等を。　近づけんと思召されける間。　相形の
法を行はせ給ひ。　來うずるかた八十日。　過にしかた八十
日を占はせ給へば。　あたりの浦人參り　上人を尊み申す

こと限なし。伊豆の田中に御座ある兵衛佐頼朝。傳へ聞召されて。乳母子の盛長を召して仰せけるは。まことやらん大崎の御堂にこそ。都より有驗智徳の聖御下りましく〳〵て。相形の法を行はせ給ふが。少しも違はぬ由を承る。いざや參りて御うら一つ申さんと。主從舟に召され。大崎の御堂に上らせ給ひ。後堂の椽の板を。とう〳〵と踏み鳴らし給ふ。折節文覺は高座に上り給ひて。勤半ばの事なるに。御弟子の覺文坊を召され。いかに覺文聞くかとよ。唯今後堂の椽の板の鳴つたるを。聖不審に思ふなり。しかんをもつて考ふるに遠くば百日。近くば二十日のその内に。日本國の主となるべき人の足音と。聞きつる事の不思議さよ。頼朝聞召されて。あら目出度の御うらや。これにましたる事あらじ。いざ戻らんとぞ仰せける。盛長承り。かかる有驗智徳の聖に御對面あり。猶猶行末の。めでたかるべき事どもを。御尋ね候へかしと申しければ。頼朝げにもと思召し。勤の一座過る程。後堂に立たせ給ふ。やう〳〵勤過ぎければ。聖高座より下りさせ給ひ。唯今の客人それ此方へと仰せければ。頼朝はやく御座になほらせ給ふ。文覺御覽じて。不思議や御身は誰人ぞ。いつぞや平治の春の頃の。流され者にて候。さる事あり。義朝に三男頼朝にてましますか。さん候。御身の父義朝のなれる姿。見たく候かと問ひ給へば。見たく候とも見たからずとも。なか〳〵申すばかり。なし。

コトバ いで〳〵さらば見せ申さんと笈とつて引き寄せ。上段より錦七重に包みたる。髑髏を取り出し。これこそ御身の父。義朝のなれる姿見たまへとてたびにけり。程ふりたる事なれば更にそれとも思召さず。さらぬ體にもてなし。傍なる机に置き給ふ。文覺御覽じて道理なり頼朝。程ふりたる事なれば疑ひ定めてあるべし。さても義朝長田に打たれ給ひ。御頭上り獄門にかかり。晝は日に照され。夜は雨露に打れ。後には地に落ち。人馬の蹄にかかりつべかりしを。文覺あまり痛はしさに。夜に紛れて盗み取り。百日壇にて行ひ。今まで持ちて候と。机なる頭に向つて義朝。義朝と仰せければ。それかあらぬか御聲かすかに聞えければ。クドキ その時頼朝御袂にうけ參らせ

高々とさしあげ。生きたる人に向つてものをのたまふごとくに。いかに候父御前。さても西坂本までは御供申して候ひしが。闇さはくらし雪は降る追ひ後れ申し。草野といへる山里にかくれて年を送り。春にもならば御行方を尋ね申して參らんと。思ひ候ところに。思の外に郎等に打たれさせ給ひ。御首上り獄門にかかれる由を聞くよりも。せめて變らせ給ふ御姿をなりとも見參らせ。もし命の長らへば樣をもかへて御菩提を。とひ申さんと思ひ。忍びて都へ上りしに。今須河原にて彌平兵衛に生捕られ。同音フシ うき六波羅へ。渡されて。六條。河原にて。すでに。死罪に及びしを。池の尼公に助けられ。この島に流され。二十四年の春秋を。送り迎へて過ぎ行けど。

すこしも父の。御事をば。忘れ申す。隙もなく。戀しく思ひ申せしに。命のうちに御姿を。見參らせぬる嬉しさよ。あれは佐か。文壽かと。今一度仰せ候へとて。御顏に。押しあてて。流涕焦れたまひければ。文覺も覺文も。さて御伴の。盛長もみな。涙をぞ。流しける。

文覺御覽じて。涙をかけぬ御事なり。それ此方へと仰あつて。またもとのごとくに取り納め。いかに賴朝聞召せ。文覺があらん程は御心安く思召せ。平家調伏すべしとて。十二箇條の卷物を書きこそ記したまひけれ。そも〳〵十二箇條と申すは。第一に天地の祈禱。第二に國王の祈禱。第三に佛神の祈禱。第四には源氏の祈禱。第五には源氏を守る衆生の祈禱。かくのごとくの五箇條は。

五體五行五せつの。いはひをあらはすところなり。今殘る七箇條は。平家を失ひ亡ぼすべき。調伏の七不思議をあらはす七つの數なりけり。この卷物は唯今。賴朝これまで御出の。引出物とて參らせらる。三度戴き守りにかけ。萬事は賴み奉る。さらば御暇申すとて。また御舟に召され名古屋の御所に歸られける。これぞこの源氏の。繁昌の始とぞ聞えける。

その後文覺は白木の輿をこしらへ。南面にかき据ゑ。虛空へ向つてのたまひけるは。文覺こそ唯今上洛仕れ。輿かきやある。急ぎ參れと仰せければ。いづくからとも知らざるに力者二人來て。御輿をかいて。虛空へ上ると見えければ　カカル　刹那が間に王城の。祇園林に　同音フシ　つき給ふ。

晝は人目を忍び。四條の町へ立ち出で。數の供物を買ひ集め。七重に棚を結ひ。百八十本の幣串を削り數の。人形を立て並べ調伏の法を行はる。三七日に滿ずる日。上段中段下段の。百八十本の幣串が。一度にばつと亂れ合ひ。平家の宗徒の雲客の。御頸きれて明王の利劍にかかると見えしかば。一方は成じたりとて。壇を破つて出で給ふ。さてこそ壽永の秋の頃。平家都を落され。つひに軍に勝ずして亡び果てさせ給ひしは。文覺の憤。強き故とぞ聞えける。

敦盛

そもそもこのたび平家一の谷の合戰に。御一門士大將。總じて以上十六人くみあしのその中に。ものの哀を止めしは。相國の御弟經盛の御子息に。無官の太夫敦盛にて。ものの哀を。止めたり。その日の御裝束。いつに優れてはなやかなり。梅の匂のはだよせの優なるに。唐紅をめされ。練貫に。色々の糸をもつて。秋の野に草づくし縫うたる直垂。弓手のてつかい兩面の脛當紫裾濃の御着長。黄金作の御佩刀。十六さいたる染羽の矢。村滋籐の弓。連錢葦毛なる駒に梨子地蒔。白覆輪の鞍置かせ。御身輕ろげにめされたり。めされたる御馬。鎧のけにいたるま

で。げにゆゆしくぞ見えられける。御一門とおなじく。主上の御供をめされ。濱に下らせ給ひしが。御運の末のかなしさは。笹竹の横笛を。大裏に忘れさせ給ひ。若上臈のかなしさは。捨てても御出あるならば。さまでの事のあるまじきを。かつうはこの笛を忘れたらんずることを。一門のなをりと思召し。とりに歸へらせたまひて。彼方此方の時刻に早や。御一門の。御座船を遙かの沖へ押し出す。あら痛はしや敦盛。鹽屋のはたを心がけ。駒に任せて落ちさせ給ふ。

かかりけるところに。武藏の國の住人。しの黨の旗頭。熊谷次郎直實。このたび一の谷の先陣とは申せども。させる高名をきはめず。無念たぐひはなかりけり。あつぱれここもとを。よからん敵の通れかし。押し並べむずと組んで。分捕せばやと思ひ。渚に沿うて下りしが。敦盛を見つけ申し。ななめならずに喜うで。駒の手綱うつすゑて。大音あげて申す。あれに落ちさせ給ふは。平家方におきては。よき大將と見え申して候。かう申す兵を。いかなるものと思召す。武藏の國の住人。しの黨の旗頭。熊谷の次郎直實。かたきにおいてはよきかたき候ぞ。まさなくも敵に。鎧の總角さかいたを。見せ給ふものかな。引つ返し御勝負候へ。いかに〳〵とて追つかけ申す。あら痛はしや敦盛。熊谷と聞召し。遁れがたくは思召されけれども。駒に任せて落ちさせたまふ。

かかりけるところに。遙かの沖を御覽ずれば。御座船眞

近く浮んであり。あの船を招き寄せ乗らうずものと思召し。腰よりも紅に日出したる扇拔き出で。はらりと開かせ給ひて。沖なる船を。目にかけて。ひらり〳〵と。招かるる。船中の人々に。人しもこそ多きに。門脇殿は御覽じて。母衣懸武者の船招くは。左馬頭行盛か。無官の太夫敦盛か。あれを見よとの御諚なり。惡七兵衛承り。ふなばりに突つ立ち上がり。長刀を杖につき。冑をぬいできつと見て。痛はしの御事や。何として御座船に。めし後れさせ給ひけん。經盛の御子息に。無官の太夫敦盛にて。渡らせたまひ候ぞや。めされたる御馬の毛。鎧のけに。いたるまで紛ふところはましまさず。痛はしさよと申しけり。門脇殿は聞召し。敦盛ならばこの船を。

押し寄せて。助けよ。水主楫取承り。艪櫂をたてなほし。船を渚に寄せんとす。この程二三日。吹きたほりたる北風の。名殘の波は今日も立つ。風はきほおつて。波はごうじやのごとくなり。白涙せがいを洗ひ。砂を天に上れば。ただ雪の山のごとくなり。小船こそ自ら。弓手へも馬手へも。思ふさまには扱はるれ。ことにすぐれたる大船に。大勢はめされたり。疊む涙にせかれつつ。次第〳〵に。出れども磯へ。寄るべきやうはなし。敦盛この由を御覽じて。いや〳〵この馬を。およがせて。あの船に乗らうずものと思召し。駒の手綱かいくつて。海上にうち漬で。浮きぬ沈みぬおよがせらるる。痛はしや敦盛。老武者にてましまさば。三頭に乗り下つて時々

聲を立てたまはば。御馬は逸物なり。沖の御座船に。難なく馬はつくべきに。若武者のかなしさは。馬に離れて叶はじと。思召されける間。まへかさに乗りかかつて。雙の鐙をつよく踏み。手綱にすがりたまひて。浮ぬ沈みぬおよがせらるる。馬逸物とは申せども。疊む浪にせかれつつ。およぎかねてぞ見えにける。熊谷この由を見參らせ。まさなの平家や。沖の御座船は。遙かに程を隔てつつ。しかも浪風あらうして。いかで叶はせたまふべき。引つ返し御勝負あれ。さなきものならば中指をまゐらせんと。弓と矢をうち番つて。そぞろ引いてかかりけり。敦盛御覽じて。なか〳〵さび矢に射中てられ。一門の名折と思召し。駒の手綱ひつかへして。遠淺になりしかば。

みづまりばつとけたて。染羽のかぶら打ち番ひかうこそ詠じたまひけれ。梓弓矢をさしはげて引くときはかへすことをば知るかそもうき。熊谷も。心ある弓取にて。あつと思ひ雙の鐙蹴放つて。返歌とおぼしくて。かくばかり。いたつきのはやはづれんと思ひしにやといふ聲にたちぞとどまる。かやうに詠じて。待ち受け申す。去る間敦盛。弓と矢をからりと捨て。御佩刀ひんぬいて。受けてみよとて打たれたり。熊谷さらりと受け流し。とつてなほしてちやうと打つ。二打三打。ちやう〳〵と打ち合せ。けれども。何れも勝負見えざれば寄れ組まん諸共とて。たがひに打物からりとすて。鎧の袖をひつちがへ。むずと組んで二人が。兩馬のあひにどうと落つる。

あら痛はしや敦盛。御心はたけく勇ませたまへども老武者の熊谷にて。ものの數とはせざりけり。やすゝと取つて押へ申し。冑ちぎりてからりと捨て。腰の刀をひんぬいて。首をとらんとしたりしが。あまり手弱く思ひ。さしうつぶいて。相恰を見たてまつるに。薄化粧にかね黑く眉太うはかせ。さもやごとなき殿上人の。年齡ならば。十四五かと見えさせたまふ。熊谷あまりの痛はしさに。すこしくつろげ申し。上臈は平家方においては。いかなる御公達にてましますぞ。御名字を御名乘候へ。あら痛はしや敦盛。老武者の熊谷に。組みしかれさせたまひ。世に苦しげなる息をつき。げにや熊谷は。文武二道の。名人とこそ聞きつるに。何とて合戰に。法なきこと

をば申すぞ。我等は天下の朝臣とし。雲客のざしきにつらなつて。詩歌管絃の。道に長じたりし身なりしかども。この二三が年は。一門運つき帝都をあこがれ出でしより。このかた。武士の勇める法をば。あら〳〵聞きて候。それ人の名乘るといふは。たがひの陣にむらがつて。軍亂れの折柄。矢なきえびらを腰につけ。つばなき太刀をぬきもつて。これはそんぢやうその國のなにがしたれがしと名乘つて打物の勝負をし。又組んで勝負を決するとこそ聞きつるに。われは敵に押へられ。下より名乘る法とは。今こそ聞き候へ。あう心得たり熊谷名字名乘らせ首をとつて。汝が主の義經に見せんためな。よし〳〵それ世にはかくれもあるまじきぞ。ただそれがしが首とつて。

汝が主の義經に見せよ。見知ることもあるべし。それが見知らぬものならば。蒲の冠者に見せてとへ。蒲の冠者が見知らずば。このたび平家の生捕の。いか程多くあるべきに。ひきむけて。見せてとへ。それが見知らぬものならば。名もなきものの首ぞと思ひて。叢にすて置けよ。すてての後は。やうもなし熊谷とこそ仰せけれ。熊谷承つて。さては上臈は武士の勇める法をば委しくしろしめされぬや。世に物憂きは我等にて候。君の御意に從つて。身を助けんとすれば親と爭ひ子と戰ひ。はからざる罪をのみつくるは。武士の習なり。花の下の半日の客。月の前の一夜の友。清風樓月飛花落葉の戲も。今生ならぬ奇緣と承る。このたびの合戰に人しもこそ多きに。熊谷が

參り合ふことを前世のことと思召し御名乘候へ。御首をたまはつて。ただ奉公のその忠に。後世をばとぶらひ申すべし敦盛は聞召し。名乘らじものとは思へども。後世をとはんず嬉しさに。さらば名乘りて聞かすべし。我をば誰とか思ふらん。門脇の經盛の三男に未だ無官はかりなにて。太夫敦盛生年は十六歳。軍はこれが始なり。さのみに物な。尋ねそよ。はや首とれや熊谷よ。熊谷承つて。さては上臈は桓武の御末にて御座ありけるや。なに御年は十六歳。なにがしが嫡子の小次郎も。生年十六歳にまかりなる。さては御同年にまゐり候ひけるや。かほどなき小次郎みめ惡く色黑く。情も知らぬ東夷と思へども。我が子と思へば不憫なり。あら無慙や。直家直實

もろともに。けさ一の谷の追手にて。かたきまれいの三郎が放つ矢を。直家が弓手のかひなに受け止め。なにがしに向つて矢ぬいてたべと申せしを痛手か薄手かと。問はばやと思ひしが。いや〳〵熊谷ほどの弓取が。敵味方のまの前にて問ふべきかと思ひ。はつたとにらんで。あらゆいにかひなの直家や。その手が大事ならばそこにて腹を切れ。また薄手にてあるならば。敵とあうて打死をせよ。味方の陣を枕とし。しの黨の名ばしくだすなといひてあれば。まことぞと思ひ。なにがしが方をただ一目見。敵の陣へかけ入つてよりその後。また二目とも見さりしなり。さても熊谷が。つれなく命ながらへ。武蔵の國に下り直家が母に逢ひて。打たれたるといふならば。

かんろの母が歎くべし。經盛とやらんも花のやうな若君を。渚に一人殘しおき。さこそ歎かせたまふらん。經盛の御愁歎と。さて直實が思をば。ものによく〳〵たとふれば。流水同じ。水なれと淵瀬のかはるごとくなり。熊谷あまりの痛はしさに。またさしうつぶいて御相恰を見たてまつるに。嬋娟たる兩鬢は秋の蟬の羽にたぐへ婉轉たりし雙蛾は遠山の月に相同じ。業平の古。片野の野邊の狩衣。袖うち拂ふ雪の下。翠黛紅顔錦繡の粧を。たとへば。繪には寫すとも。この上薗の御姿を筆にもいかでつくすべき。熊谷心に按じけるはいや〳〵この君の。御首をたまはつて。なにがし恩賞にあづかりたればとて。千年を保ち。さて萬年の齡かや。末代の物語に。助け申

さばやと思ひ喃いかに敦盛。平家方にて仰せらるべきことは。武蔵の熊谷と申すものと。波打際にて。組みは組んで候へ、ども。我が子の直家に思ひかへ。助け申したりと。御物語候へと。とつてひつ立て奉り。鎧につきたる塵打ち拂ひ。馬に抱きのせ奉り。直實もともに馬に乘り。西を指いて五町ばかり行き過ぎ後をきつと見てあれば。近江源氏の大將に。めかたまぶちいば三井。四つ目ゆひの旗ささせ。五百騎ばかりで追つかくる。弓手の方を見てあれば成田平山控へたり。馬手の脇には。土肥殿七騎で追つかくる。上の山には九郎御曹子。白旗をささせ。御近所にとつては。武蔵坊辨慶。常陸坊海尊龜井片岡伊勢駿河。この人々を先として。聲々に申すやう。武蔵の

熊谷は。敵と組んずるが。すでに助くるは。二心と覺えたり。二心あるならば熊谷ともに打ちとれと。われもわれもと追つかくる。この君の有樣。ものによくくたとふれば籠のうちの鳥とかや。あじろの氷魚のごとくにて。もりて出づべきやうはなし。人手にかけ申さんより。直實が手にかけ。後世をそれがしとぶらはばやと思ひて。又むずと組んでどうと落ち痛はしや御首を水もたまらずかきおとし。目より高くさし上げ。鬼のやうなる熊谷も。東西を知らで泣きゐたり。

熊谷涙を止め。御死骸を彼方此方へ押し動して見てあれば。鎧の引合に。笄竹の横笛を。したんの家にひちりき添へてさされたり。又馬手の脇を見てあれば。卷物一卷

おはします。これは何なるらんと。披いて拜見仕るに。あら痛はしや敦盛の。都出の言の葉をくれぐれとこそ遊ばしけれ。この君都に御座の御時は。按察使の大納言資方の卿の姫君十三にならせ給ひしが。天下一の美人にてましますを。仁和寺御室の御所にて。月並の管絃のあり し時。敦盛は笛の役。同じかくごにて。琴ひきたまひし御姿を。一目見しより戀となりて。歌によみ文に書き越さる。その文數の重りて逢瀬の中となりたまふ。中三日と申すに。平家帝都の花洛を去つて。西海の波濤におもむき給ふ。あら痛はしや敦盛。御身は一の谷に御座あると申せども。御心はさながら。都へのみぞ通はれける。思召し出されし時に。作られけるかと覺しくて。四季の

調をぞ書かれける。まづ青陽の朝には。垣根木傳ふ鶯の。野邊に媚く忍音や。（野徑）やけいの霞あらはれて。そともの花もいかばかり。かさね櫻に八重櫻。九夏三伏の。夏の空にもなりぬれば。藤波いとふか時鳥。夜々の蚊やり火下もえて。忍ぶる戀の心す。黄菊芝蘭の。秋にもなりぬれば。尾上の鹿。龍田の紅葉枕にすだくきりぎりす。咲かでや萩の咲きぬらん。玄冬素雪の冬の暮にもなりぬれば。谷の小川も通路も。みな白妙によもなると。いへどもきえて跡もなし。名殘惜しき故郷の木々の梢を見捨てつつ。今はまた一の谷の。苔路の下に埋もるる。經盛の末の子の。無官の太夫。敦盛と書き止めてぞ置かれける。かれを見これを見奉るに。いとど涙もせきあへず。御死

骸をば郎等に預け置き。御首笛。巻物ともに持たせ。大將の御前に參り。この由かくと申し上ぐる。判官御覽じて。あら不思議やこの笛は。なにがしが見知るところの候。それをいかにと申すに。一とせ高倉の宮。御謀判企の時。天下に小枝蟬折とて。二管の笛あり。蟬折をば三井寺にて。彌勒に會向したまへり。小枝をば御最期まで。持たせたまふ由承るが。水無瀬の光明山にて打たれさせ給ひし時。この笛平家の手に渡る。一門のその中に笛の器用を召されしに。しやくわん(弱冠)なれども敦盛は。笛に器用の人なりとて。下されけると承る。今朝一の谷の。内裏役所にて。笛の遠音の聞えしは。この人の吹きけるかとて。大將涙を流させたまへば知るも知らぬもおしなべ

て。みな涙をぞ流しける。敦盛は名大將熊谷いしくも仕りたり。この度の勸賞には。武藏の國。長井の庄をとらするぞ。急ぎ下れとの御諚なり。熊谷郎等ども所知入せんと喜ぶところに。熊谷その御返辭に及ばず涙のひまよりかくばかり。人となり人となればやとぞ思ふさらずばつひに墨染の袖。かやうに詠じ。御前を罷り立ち。何として敦盛の御死骸を。源氏雜兵の。ひづめの。通ふところに捨て置き申すべき。おくり申してあればとて。よも罪科には行はれまじ。いや〳〵おくり申さばやと思ひ。鹽屋のはたに下り。小船一艘こしらへ。雜色二人士一人相添へ。狀を書き認め。八島の磯へぞおくられける。平家は元暦元年二月七日に。一の谷を落ち。浦傳ひ。島傳

ひして。十三日の早朝に。八島の磯につく。敵味方のこ
となれば。そのあひ遙かに艫櫂を止め。大音あげて申す。
そも〳〵源氏方よりも。熊谷が私の使に罷り向つて候。
門脇殿の御内なる。伊賀の平内左衛門尉殿へ申したき仔
細の候と高らかに呼ばはる。あら痛はしや平家は。一の
谷を落ち。海路遙かに落ち延びたればさうなう源氏の勢
の。かかるべしとも思召されず。ただこの程のものうき
には。涙枕楫枕。夢おどろかす松の風。命も知らぬ松浦
船こがれてものや思ふらん。心細くもおぼせしに。源氏
の舟よと聞召し。われさきに〳〵と。艫櫂をはやめ。落
ち行けども。東國の源氏に逢はんといへる平家なし。
おほい殿の御覽じて不覺なり方々。世は澆季に及んで。

時末法にきすといふ。たとへば異國の樊噲が渡つて乘つ
たりともあれ程の小船に何程の事のあるべきぞ。誰かあ
る行き向つて聞いて參れとありし時。平内左衛門承つて。
存ずるみち候聞いて參り候はんと。屋形のうちへつつと
入て。いでたつその日の裝束は。はなやかにこそ見えに
けれ。肌には白きかたびらみな白おつて引つ違へ。褐の
鎧直垂の。四つのくくりをゆる〳〵と寄せさせ。楊梅桃
李のさうの小手。白檀みがきの脛當に獅子に牡丹の脇楯
し。いと緋縅の鎧の。巳の時とかがやくを。綿噛とつて
引つ立て。草摺長にざつくと着。結つて上帶ちやうどし
め。九寸五分の鎧通を。馬手の脇にさいたりけり。一尺
八寸の打刀。十文字にさすままに。三尺八寸候ひける。

赤銅作の太刀佩いて。梨子打烏帽子に。鉢巻し。白柄の長刀を杖につき。われに劣らぬ郎等どもを。七八人相具し。はし舟下ろし打ち乗り面に楯をしとませ。ざざめかいて押し寄する。樊噲が勢も。あうかくやと思ひ知られてあり。そも〳〵源氏方よりも。熊。谷が私の使とは。そも何事の仔細ぞや。おくりのもの申す。さん候敦盛を。熊谷が手にかけ申し。あまり御痛はしきによつて。御死骸にいろ〳〵の。武具ども又は進上を相添へ。これまで送り申して候。急ぎ御座船に御移しあれと申す。基國聞いてあら不思議や敦盛は。一門の御船にめされ。阿波の鳴門にまします由を。承つて候が。やはか打たれさせ給ふべき。もし詐にてや候らん。送の者申す。御不審はこ

とわり。誠偽をば。ただ船中を御覧ぜよと申す。基國聞いて。げに〳〵これはいはれたりとて。送の船に。わが船を押し寄せ。長刀を杖につき。送の船をさしうつぶいて見てあれば。げにといろ〳〵の縫物したる直垂に。敦盛の御死骸とおぼしきを。押しつつみてぞ置きにける。紫裾濃の御着長。黄金作の御佩刀。十六さいたる染羽の矢。村滋籐の。弓もあり。紛ふところはましまさず。基國あまりのかなしさに。長刀をからりと捨て。送の船に乗りうつり。御死骸に抱きつき。なげけども更に涙なし。叫べども聲は出でざりけり。ややありて基國は。涙を流し申すやう。痛はしやこの君の。一の谷を。御出の時。この着長を奉る。おとなしやかに敦盛の。いつしか御一

門。世が世にまし〳〵て。四海に風の治まりつつ。基國に所知しらせ。見るとだに思ひなばいかばかり嬉しかるべきと。仰せられしその時は。基國がうれしさを何にたとへん方もなし。まことの時は動轉し。めされざる敦盛を。一門の御船にめされつつ。阿波の鳴門にましますと申したる基國が。心のうちの不覺さよ。今一度基國かと。仰せ出され候へとて。消え入るやうに泣きければ。送の者もとも人もげに理や。道理とて。みな涙をぞ流しける。送の者申す。これは御使のみにて候。急ぎ御座船に御移しあれと申す。基國聞いて。げに〳〵思にばうじ思ひ忘れて候とて。敦盛の御死骸を。わが船に移し。大船に漕ぎ寄せ。この由かくと申し上ぐる。

門脇殿も經盛も。なに敦盛が打たれたるといふか。さんぬ候と申す。あら不思議や敦盛は。一門の船にのり。阿波の鳴門にある由を。風の便に聞きし程は。いかばかり嬉しかりつるに。熊谷が手にかかり。さては打たれてありけるかと。涙ながらに出で給ふ。女房達にとりては。女院をはじめ奉り。むねとの女官百六十人も。袴のそばをとり。みな船ばたに立ち出でて。御死骸に抱きつき。これは夢かや現かと。一度にわつと叫ばれしを。物によく〳〵たとふれば。これやこの釋尊の。御入滅の。きさらぎや。十大御弟子。十六羅漢。五十二類に至るまで。別の道の御歎。かくやと思ひ知られたり。ややありて父經盛は。落る涙の隙よりもあら無慙や敦盛。一の谷を出で

し時。故郷の方を見送り。心細げにて立つたりしを。勇めばやと思ひ。あら不覺なりとよ敦盛よ。三代槐門の家を離れ屍を野山に埋み。名を半天の雲井にあぐべき身が。郎等の見る目をも恥ぢよかしというてあれば。さらぬ體にて渚まで下りしが。笛を忘れて候とて。とりに歸りしその時。ともに歸らんと思ひつれども。敵味方におしへだてられ。又二目とも見ざりしなり。情ある熊谷にて形見これまで送りたり。空しき死骸この形見。今日は見つ。明日より後の。戀しさを誰に語りて慰まん。なう人々とのたまひつつ。もだへこがれ給ひけり。平家方の人々は。今一入の涙なり。その後熊谷が送りたる狀をめし出し。大將なればこの狀を。もし義經ばし送りてあるか。使は

是非をわきまへず。ただ門脇殿へとばかり申す。とても伊賀の平内左衞門へと書きたる狀にてある間。家長文を仕れ。承はり候とて。船のせがいに跪き狀をたまはりさし上げ。高らかにこそ讀うだりけれ。

直實謹んで申す不慮に。この君と參會し奉し間。直に勝負を。決せんと欲するきざみ。俄に怨敵の思を忘じ。かへつて武藝の勇消えあまつさへは。守護を加へ奉るところに。多勢一同に競ひかかつて。東西にこれはゐる彼は多勢。これは無勢。樊噲かへつて。張良が藝をつつしむ。たま〳〵直實は。生を弓馬の家に生れ。ただ身を洛西にめぐらし命を同じうす。ちんとうが夕せせばん〳〵に及んで。自他かくの面目を。施せりさてもこの度かなしき

かなや。この君と直實深く逆縁を、結び奉るところ。歎かしきかな。拙きかな。この悪縁を飜へすものならば。長く生死のきづなを離れ。一つ蓮の縁とならんや。閑居の地所を。示しつつ。御菩提をねんごろにとぶらひ申すべきこと眞僞。後聞かぐれなく候。この趣をもつて。御一門の御中へ。御披露あるべく候よつて恐惶謹言。元暦元年二月七日。武藏の國の住人熊谷次郎直實。進上門脇殿の御内なる。伊賀平内左衞門尉殿へとぞ讀うだりける。御一門雲客卿相。同音にあつと感じたまひ。げにや熊谷は遠國にては。阿防羅刹。夷なんどと傳へしが情は深かりけるぞや。文章の達者さよ。筆勢のいつくしさよ。かほど優しき兵に。返狀なくて叶はじと。おほい殿の返狀

を。經盛の自筆に遊ばしてたぶ。使は文をたまはり。急ぎ一の谷にこぎもどり熊谷殿に見せ奉る。熊谷いかんとして。弓矢の冥加なくしては。經盛の御自筆を。拜み申さんと。戴き披いて拜見仕る。その御書に曰く。

盛なる者の衰ふるは無常の習。逢へる者に別るること穢土の習。釋尊羅喉羅天の一子の別にあらずや。況んや凡夫をや。去んぬる七日に打つ立つしより以來。燕來つて語らへどその姿を見ず。歸雁翼を列ね。空に音づれ通るといへどその聲を聞かず。されば かのゆゑせきの。聞かま欲しきによつて。天に仰ぎ地に俯し。これを祈る。神明の納受。佛陀の感應を。待つところによつて七日がうちにこれを見る。内に信心をいたし。外には。感涙袖を

ひたすによつて。生れ來れるに逢へり。喜悅のはういな（芳意）くしては。いかがその姿を。二度見んずる頗る須彌の頂。低うして。蒼海かへつて淺し。進んでこれを報ぜんとすれば。過去遠々たり。退き答へんとすれば。未來永々たるものか。萬端多しといへど。筆紙につくしがたし。これは武藏の。熊谷の返狀とぞ讀うだりける。去る程に熊谷よく〳〵見てあれば。菩提の心ぞ起りける。今月十六日に。讃岐の八島を攻めらるべしと聞いてあり。われも人も。浮世に長らへて。かかる物憂き目にもまた。直實や逢はすらめ。思へばこの世は。常の住家にあらず草葉に置く。白露。水に宿る月より。なほあやし。きんこくに花を詠じ。榮花は先つて。無常の風に誘はるる。

南樓の月を弄ぶ輩も。月に先つて。有爲の雲にかくれり。人間五十年。げでんのうちを比ぶれば。夢幻のごとくなり。一度生を享け。滅せぬものあるべきか。これを菩提の種と。思ひ定めざらんは口惜しかりき。次第ぞと思ひ定め。急ぎ都に上りつつ。敦盛の御首を見れば物憂さに。獄門よりも盜み取り。わが宿に歸り御僧を供養し。無常の煙となし申し。御骨をおつとり首にかけ。昨日までも。今日までも。人に弱氣を見せじと。力を添へし白檀弓。今は何にかせんとて。三つに切り折り。三本の卒塔婆と定め。じやうどのはしに渡し。宿を出でて東山。黑谷に住み給ふ。法念上人を。師匠に賴み奉り。髻切り西へ投げ。その名をひきかへて。蓮生坊と申す。花の袂

を墨染の。とうちの里の墨衣。今きて見るぞよしなきかくなる事も誰ゆゑ。風にはもろき露の身と。消えにし人の。ためなれば恨とは更に思はれず。かくて蓮生黒谷に。籠居し。しやうねん念佛してゐたりしが。ある時蓮生。心のうちに思ふやう。紀の國に御立ある。高野山へ參らばやと思ひ。上人に御暇申し。蔦の藤笈肩に掛け。賴むものは竹の杖。黒谷をまだ夜をこめて出でけるが。都出の名所に。東山を眺むれば。清閑寺今熊野清水八坂長樂寺。かの清水と申すは。嵯峨の帝の御願所。純友の造立。田村丸の御建立。大同二年に建てられ萬の佛の願より千手の誓はたのもしや。敦盛の生靈頓證菩提と會向して。西を眺むれば。丹波に老の山おりくちに。谷の堂峰の堂。

北をかへりて見送れば。内野を出でて蓮臺野。船岡山の。墓標。見るに涙もせきあへず。南を眺むれば東寺西寺。四塚。年はゆけども老もせぬ。六田河原とうち眺め。山崎寶寺せきどの院を打過ぎ。八幡の山を下向して。惟喬の皇子の御狩せし。片野の原を通り。きんやの雉子は。子を思ふ。うど野にしげきませがきの。宿を過ぐれば。糸田の原。くぼつ津の玉子をふし拜み。天王寺へぞ參りける。天王寺と申すは。聖德太子の御願なり。七不思議の有樣。刧は經るともつきすまじ。龜井の水の流絶えぬぞ尊かりけるとふし拜み候ひて。天野に參らるる。大明神と申すは高野の鎭守にておはします。御山に法師を。授けてたばせ給へと。ねんごろに祈誓申して。はや高野山

へ參らるる。

忝なくも高野山と申すは。ていせいを去つて二百里。きやうりを離れむにんじやう。八葉の峯八つの谷。峨々として岸高し青嵐梢を鳴らせど。夕日の影のどかなり。あうかの寺より。御影堂の谷胎藏界の大日。百八十尊を表せり。さて又大たうよりし奥の院へこれも大日の三十七尊を表せり。金堂の本尊は。あしゆくほうしやう彌陀釋迦。これまた大師の御作なり。大たうと申すは。南天のてつたうを學んで。兜率天のばんりをかたどり。十六丈の寶塔。上は千體の阿彌陀。中は千手の二十八部衆。下は藥師の十二神。生々世々にきはなく。衆生あくしよの罪消え。來迎の三尊を拜むぞ尊かりけると。伏し拜み候

ひて。奥の院へぞ參りける。路のほとりの白骨は。砂子をまくがごとくなり。いよ〳〵念佛申し奥の院へ參り。敦盛の御骨を納め。蓮花谷の傍にちしき院と申す。菴室を結び。峰の花を手折り。閼伽の水を掬び。行ひすましぼ。善にも強し。文武二道の名人。漢家は知らず本朝に。蓮生八十三と申すに。大往生を遂げにけり。惡に強けれかかる兵あらじと。感ぜぬ人はなかりけり。

奈須の與一

去る間奈須の與一助高は。大將の御前に弓取り直し畏まる。判官御覽じて汝をこれ迄召す事は別の仔細でなし。沖の平家の方よりも作り物を出したり一矢射よとの御諚なり與一謹んで辭退を申す。あらやう〳〵しや早とくとありしかば。重ねて辭退を申し惡しかりなんと思ひ。畏まつて候とて。御前を罷り立ち。駒を引き寄せて打ち乘り。和田秩父兒玉黨。大勢控へて御座します。陣の前を通る時。與一申しける樣は。それ物の面白きは。夏山や青葉交りの木の下に。ひわと小雀と鶯と。そんちやうその木の枝に幾聲鳴くと。目には見ずして。聲ばかりとちにかけ。命も殺さず羽も散らさず引目鏑の。めはしらに射込うて取るぞ大事なる。あれ體に眼のあたりに。さし現れたる分の物。與一冠者にてあらずとも弓取つて引かんもの。要際より射ちぎりて。海上の花と散らさん事。いと易き程の事なりとて。から〳〵とは笑ひけれども。與一も養由ならざれば心細さは限りなし。鞍鞦漬たる程。駒海上に打ち漬で。沖を屹と見てあれば。扇の立つたるその間七八反きりと見ゆる。爰は遠しと存ずれども暫く陣をぞ取つたりける。沖の平家三萬六千餘騎。月卿雲客相殘らず。只今出でたる梨打烏帽子の小男は。扇の射手か面白やとざざめき亘つて見え給ふ。先づ一番に進む舟。女房達の御座舟。女院二位殿帥のすけ殿

ふげんじ殿。更科殿姨捨殿。じやうだう寺の丹後の局。ツメ安房の内侍に上總の。御局を先として。上臈女房二百人。下ともに二百八十餘人が。幔幕をあげさせ。天晴時の見物やとてざめき亘つて見え給ふ。その沖を見てあれば先帝を始め奉り御一門に取つては右大臣宗盛。御子の中將時實。新少將有盛。藏人の大輔成盛。能登守教經。修理の太夫經盛。扨僧綱に取つては三井の僧都善心。行明坊の阿闍梨法性寺の執行能圓。扨て侍に取つては。越中の二郎兵衛上總の五郎兵衛惡七兵衛景清飛驒の三郎左衛門。この人々を先として。諸國の受領檢非違使。かり武者に至る迄も。天晴時の見物やとてざめき亘つて見えにけり。去る間與一は陸地を反つて見てあれば大將を

始め奉り。武州に秩父殿。相州に和田殿。田代の冠者信連川越の太郎重家。小山の判官宇都宮の彌三郎友綱山名里見を先として源氏六千餘騎が渚へ颯と下りくだつて。射や當てんずらん。射や損ぜんと。手に汗を握つて。片唾を飲うでおはします。後はうりうあうはか。前は群れたる松。やくり八島も近かりけり。

頃は元曆元年三月十八日の事なるに。昨日吹いたる西の風。未だ波こそ靜まらね舟は浮木の物なれば浮いつ沈みつ漂うたり。能登守の計らひに。源氏に耻辱を搔かせんためくるりを構へて立てたれば濱風は嶮しくひらりくるりと舞うたるは。陸地を招くが如くなり。與一が馬と申すは明六歳の野取の駒濤風に戲れて上がつつ落ちつ。こ

の馬が手繩を打つてぞ狂ひける。舟も座敷に直り兼ね。扇矢壺に定まらねば。乘つたる馬も狂ひけり持つたる弓に汗立つてあう餘しつべうにぞ見えにける。その後與一寄せ來る波を手水とし王城の方を伏し拜み。南無や奈須野の明神。正八幡龍神。波風靜めて賜び給へと祈誓を深く申し。振り仰のいて見てあれば。寔に八幡氏神の。御加護にでありけるか。波風丁と靜まつて今は斯うと見ゆる。與一心に思ふ樣。女の持つたる扇を中指にて射る事は花見て枝を手折る風情と思ひ。上矢の鏑をするりと拔きさつ〳〵と爪よつて見れば。まちつとこの矢羽廣くして。濱風に吹かれ悪しかりなんと存ずれば。後輪に乘り居。前輪に押し當て。腰の刀を引んぬいて。むしり羽

を二三度さつ〳〵と搔いて捨てければ源氏平家は御覽じて。實の射手ぞ能くすると譽めぬ人こそなかりけれ。その後與一鐙踏ん張り鞍嵩に突つ立ち上がり。大音上げて名乘る樣。唯今源氏六千餘騎のうちよりも扇の射手に指され。罷り出でたる兵を如何なる者と思召す。下野の國の住人金村の太夫に十八代の後胤伊那の庄司が子。奈須の與一助高とて。生年十八歳に罷りなる。夫れ扇は上下に因つて差別あり。紙か要かいづくとも矢壺を指いて給はつて仕らんと申す。大臣殿聞召しあつ剛のものかな。扇ならばいづくをなりとも射さいたるを勝とせで。矢所こうつる優しさよ。自餘の者は叶ふまじい。以前に扇立てたる玉蟲出でて矢所を取らせよ。彼の玉蟲が由來を委

しく尋ぬるに。元は九國の住人に。花見の太夫が。末子。はぎやの八郎に京腹の妹あざなをば鸚鵡の前と召されしが一年女院北山へ。花見の御遊のありし時百首連ねて參らせ上る。日本一番のときに劣らぬ美人とて。四季に名をこそ變へらるれ。

春は青柳糸櫻。夏は又藤の花。秋は七夕の天の川瀬に堰き据ゑて。絶えだえ見ゆるは瀧の水。近うて色の。增せばとて名を玉蟲と付けらるる。むめぢのおり紅梅。七つ一重の衣の褄を。高々とおつ取つて。舟の舳板に突つ立ち上がり。迦陵頻伽の聲を上げ。ああら今めかしの射手殿や。日本廣しと申せども花の都に止めたり。車は千里を駈くれども。楔をもつて本とせり。針を下げては

みづを射。笄立ててはまちを射る。挾み物をば串を射。扇を立て要を射るとは申せども。要の邊は珍しからず。雲手の邊を遊ばせと。袖翳して。立つたるは金岡が繪圖に寫すとも筆も爭でか。及ぶべき。「與一この由聞くよりも。殊に大事の所を矢壺に指いつるものかな。射んずものをと思ひて。鏑を潮に打ち漬で。三人張に十三束。取つてからと打ち番へ。本筈末筈一つなれと。きり〳〵と引き絞り。勝手强に放しけり精兵の射る矢の癖として。手許にて鳴らずしにほひ〳〵て遠鳴して。扇の雲手の邊をば。ひふつと射切つたり。扇はやうの物なれば。花のごとくに颯と散る。鏑は愈々遠鳴して。大臣殿の召されたる。御座舟の脊櫂のうちにし海上へざつぶと

入つたりけり。平家三萬六千餘騎。射たりや陸地の源氏あう射たりやあよくはんと。暫く鳴は靜まらず。大將は御覽じて神妙なりと御諚にてやがて御判を出さるる。去る間與一。はたくるくとひんさいて。阿波の鳴戸の渡をしいはやが瀨戸を漕ぎ過ぎ花の都に着きしかば。關東に下つて賴朝に斯くと申す神妙なりと御諚にてやがて御判を出ださるる二つの御判賜はり。一門殘らず引き連れ所地入りとこそ聞えけれ。

元服曾我

文治元年正月十三日に鎌倉殿。箱根詣とぞ聞えける。去る間箱根には。鎌倉殿の御參とて。大衆衣を用意し。兒の衣裳を結構す。その中に箱王殿。衣裳の事を嗜まで。幼稚で離れし父御の事。今の樣に思はれて。偲びの泪堰き敢へず。こしの式部を近付け。如何に候式部殿。鎌倉殿の御前へ。我れは出仕を申すまじ。それを如何にと申すに。祖父伊藤の入道殿。謀叛人なりとて。御咎めの有りし事。世には隱れも候はず。式部殿とぞ申しける。式部この由聞くよりも。左も候へ。是れ程大衆結構候に。餘所ながら御見物有れかし。箱王殿とぞ申しける。さら

ば見物せんとて。鎌倉殿の御參を。今や遲しと待ち給ふ。去る間鎌倉殿。御登山まし〳〵て。講堂に籠らせ給へば。大名高家の人々。大庭廣椽に所せきなく並み居たり。その中に箱王殿。式部太夫を供として。下陣の格子の際まで出で。さもあれ仇の祐經と。名のみ許りは。聞きけれとその。姿をば。未だ見ず。敵を問はでと思召し。如何に候式部殿。鎌倉殿は何處にまします。式部殿とぞ聞いたりける。式部この由聞くよりも。大紋の指貫に立烏帽子召されたるこそ。鎌倉殿にておはしませ。箱王殿聞召し愚の人の敎へ言や。さればとて。鎌倉殿を。見損ずべきにはあらねども。仇を問はんが爲ぞかし。祐經はと問ふならば。式部大夫が心得て。彼れぞと敎ふる

事あらじ。八箇國の。大名諸名(ダイミヤウ)の。名字を。問うて。見んずるに。祐經といふ者に。問ひ當らぬ事よもあらじと。未だ幼き。御心に。案を。廻すぞ恐ろしき。(コトバ)さてあの君の弓手の御脇に。直られたるは誰さうぞ。武藏の國の住人に。秩父の重忠と申す人にておはします。さて又妻手の御脇に直られたるは誰さうぞ。相模の國の住人に。和田の義盛候よ。さて又君の御前に。中座についてましますは。何處の國の誰れさうぞ。伊豆の國の住人北條の四郎時政とて。君の爲には御舅。その次についたるは誰れさうぞ。田代の冠者信貫とて。これも伊豆には大名なり。その次々は誰れさうぞ。逸見武田小笠原。一條板垣。南部下山皆ついたりといひけれとあうなほ祐經と聞か

ざりけり。さて又外殿の格子を。北向きにはらりと。居流れたるは誰さうぞ。あれこそ相模大名に　さんま本間土肥土屋遠江の國の住人に。設樂長山皆ついたりといひけれど。なほ祐經と聞かざりけり。さて又下陣の格子を北向にはらりと。居流れたるは誰さうぞ。あれこそ信濃大名に。仁科高梨。犬飼諏訪殿原。木森代とり服部黨皆ついたりといひけれどあうなほ祐經と聞かざるは箱王に包むか覺束なし。コトバさてはこの度の御供を祐經は申さざりけるや。御供申すものならば。伊藤の大將にて有る間。末座にはよも有らじ。さらば歸らんと思ひしが。又立ち歸り問うたりけり。さてあの禮盤の際に。薄香染の直垂を着。雄々しげなる大名は。何處の國誰さうぞ式部

この由聞くよりも。あれこそ御身の爲には眼前の從兄。工藤一郎祐經と。申す人にておはしませ。カカル箱王殿聞召し。ようぞ立ち歸り問うたりけりと思へば。幼稚で離れし父御の事。今の樣に思はれて。仇なれども懷かしく。見とれて爰に。箱王殿茫然としてぞ。おはします。コトバ何とかしたりけん祐經箱王を見付け。扇を上げてこれへ〳〵とぞ招きける。去る間箱王殿仇の呼が嬉しさに大勢の中をかき分け〳〵通り。祐經が側へ寄つたりける。祐經箱王を膝の上に抱き載せ。御身の爲には御一族の片端と召し置かれたる。工藤一郎祐經と申す者にて候が。箱王殿のこの寺にまします由を承はれども。公方の隙なき間。今迄御目に懸からぬなり。見參の始に何をか箱王殿

に參らせん。少人の爲にはあはぬ引出物なれども。家に傳はる重寶なれば。赤木の櫛に銀の。目貫とう金打つたりし。小さすがを取り出し箱王殿にぞ引きにける。箱王この由見るよりも。ああら嬉しや。仇の手よりも刀を得たる事は。偏に箱根の權現の致させ給ふところなり。カカル取つて引き寄せ一刀と。フシ思ひ切りては有りけれど。祐經は。古兵箱王は。生年十三なり。腕が細くして着込めの上を。通すまじ。通さぬ物ならば。鎌倉殿の。御目の前。大小名の。御覽ずる處にて。親の仇を討ち損じ。冥途にまします河津殿。末代曾我の浮名を下さん事の。悲しさよ。とやせんかくや。あらましと。案じ煩ふその時刻。鎌倉殿の。御下向とて。大名小名。一度に座敷をはらりと立つ。祐經も座敷を立つ。眼の當りなる。仇をも討たで。過ごすぞ。無念なる。コトバサ去る間箱王殿學文所に立ち歸り。唯この事をぞ案じける。寢れば仇が夢に見え。起くれば身の添ふ如くにて。學文も心に入らざりけり。斯くて年月を經る程に。十六に成るは程も無し。曾我にまします母上。箱王を法師になすべしとて。袈裟と衣を用意して箱根へ上せ給ひけり。祐成聞召されて。さては箱王は法師に成るべきにて有りけるや。兒の姿を今一度。見ばやと思召さるれば。箱根へ上り給ひけり。箱王急ぎ立ち出で。祐成を一間所に請じ申し。明日はさて箱王は法師に成るべきよなう。クドキ中箱王法師になるならば。御身にたぐふ人あらじ。定めて

法師に成るならば。一人は寺の住居をし。祐成は里に住み給はば。仇の工藤祐經を。何と。してかは討つべきぞ。十郎殿とかきくどき。泣くより外の事はなし。クドキ祐成聞召し泪をはら〳〵と流し給ひ。哀れ實に世の中に。兄弟に縁無き者を尋ぬるに。祐成にて止めたり。京にまします小次郎殿は。都の住居とましませば。身の本望を語り慰む事もなし。越後なる禪師坊は國遙々にて音信なし。二の宮の姉御は女性の身。有るしるしもましまさず。箱王さへ法師に成り祐成は。友も渚の空せ貝。碎けて物を。中思ふとも。誰れか。哀れと問ふべきぞ。箱王殿と。かきくどき又。はら〳〵と。泣き給ふ。コトバ箱王申しける樣は。その儀ならば里に下り男になり。祐成の御供申

すべきが。但し母上の御不興もや候べきか。祐成聞召されて。御身男に成つて後。母上の御不興とも。祐成があらん程はよき樣に申すべし。クドキさあらば思ひ立んとて。常の所に立ち歸り。委しき事を書きとむる。フシ名殘をば〳〵。引。箱根の御山にとどめ置き。二つとなき命をば。冥途にまします父河津殿に奉る。師匠同宿人々に。名殘の數は。多けれど。思ひ立ちぬる。旅衣又こそ來ても逢ふべけれ。引。かへすがへすも名殘惜しの。式部大夫と書きとどめ。夜の間に忍びて出でにけり。濱邊の宮を筋かひに野徑の露に。そぼ濡れて曾我の。里にぞ。着きにける。コトバ祐成仰せける樣は。今は早一時も兒の姿にては叶ふまじ。やがて男に爲すべきが。烏帽子親には如何なる人

を賴むべき。伊豆の國北條殿を賴むべし。この儀はいしく候去りながら。陸地にては如何行くべきと。祐成馬を用意する。馬は一疋なり。祐成馬を引き寄せ。乘れや箱王。召され候へ十郎殿と。兄弟馬をぞ論じける。祐成仰せける樣は。ああら逆なる御ことが。いひ事かな。兒を陸地にて歩ませ。大俗の身にて馬に乘り。路次を行かうずる程に逆なる事の候べきか。乘れや箱王。クドキ いかなる御事候ぞ舍兄カカルを徒歩にて歩ませ申し。弟の身にて馬に乘り路次を行かうずる程に逆なる事の候べきか。召されれ候へ十郎殿。フシ 早乘れや箱王と兄弟。馬を論じけり。時刻をうつし夜明けなば。おほかた殿に洩れ聞え止め。られては叶ふまじ。箱王殿も。乘り給へ。祐成も乘らん

とて。馬一疋に。兄弟乘り。曾我の里をぞ出でにける上古も今も。末代も例し。少き。次第かな。

コトバ 兄弟馬を早めて打つ程に。北條の館も近づきければ。馬場末にて馬より下り。門外にこそ佇みけれ。折節江間の小四郎立ち出で。何處への御通り候ぞ。さん候別の仔細にて候はず。これなる童に烏帽子が着せ度く候ひて。賴み申して參りて候。小四郎聞いて。安き程の御事なり。但し父の北條に問ひ申さんとて內に入り。時政に斯くと語る。サシ 北條聞き敢へず泪をさつと浮べ給ひ。ジボル 夫れ昔は六十。六箇年を一昔とし。中頃はジボル三十。三箇年當代は。二十一箇年を。一昔とす。この人々が世が世にて烏帽子親を取るべきならば。源氏ならば鎌倉殿。平家

ならば小松殿のごゑんにて烏帽子を着うずるが。時代に從ふ習ひとて。傍輩を頼うで來りたる事の哀れさよ。夫れ〳〵此方へ請ぜよとて。フシなけれど。ていの塵を取り。破れねど。簾懸け直し。引き繕へば。既に早時。移り返事も。なかりけり。ツメ箱王大きに腹を立て。如何に候十郎殿。不思議やな江間殿は。何とて遅く見ゆるぞあう。やがて心得たり。昔は伊藤北條とて。鳥の二つの羽がひ。車の兩輪の如くにて。持劣り優りは無かりつるに。當君の御代と成つて。われ〳〵兄弟が。下世になし者にて有る間北條が卑めて。烏帽子を着せじその爲に。さてばし遅く見ゆるか。その儀にて有るならば上諏訪八幡も御知見あれ。今生この世にて。親の仇は討たずとも。簾中へ亂れ

入つて。北條とさし違へ。死なうずるにて候ぞやそこの程をば十郎殿。御用意有れとぞ申しける。コトバ祐成聞召されて。如何なる事ぞ箱王殿。北條も左は思はれ候はじ。心を靜めて待ち給へと。箱王を制し給ふ。その後江間殿出で合ひ。雜餉構へ候とて。今迄遅參仕る。此方へ御入り候へとて。兄弟を請ぜらるる。その時箱王色を直し。兄弟連れてぞ入りにける。北條やがて出で合ひ。一つは客人兒なれば。箱王を弓手の脇。祐成を馬手の脇へ請ぜらるる。その外江間の小四郎を先として。一族家の子若黨。車座にはらりと居流れ。三獻盃過ぎて後。北條烏帽子を召し寄せ。箱王殿の髪生し。鬢搔き濟まし着せ申し。名をば助五郎時宗と附けさせ給ひ。イロ「その時北條仰せけ

るは。如何に面々聞き給へ。夫れ烏帽子といふ事は。私ならぬ事にて有り。ツメ清和天皇の御この時。異國よりも我が朝へ。作物を越されたり。公卿殿上人。納言宰相以下北面。有官無官關白殿下さし集つての詮議なり。御門叡覽ましく〳〵て。これは男の魂なり。名は烏帽子といふ物。緣(柳)は大海つぶは星。くしげ(形)たは半月。と變るは國の武きさう(相)風口の。廣き事は命の長き相なり。小結を結うてきる事は。さながら須彌のはんふく(半腹)の學なり。この烏帽子を着る人は。命も長く名も高く。壽命長遠德自在富貴の家に至るべし。この烏帽子を召されて。末繁昌と祝ひつつ太刀と刀を取り出し。箱王殿に引き給ふ。祐成御覽じて泪をさつと浮べ給ひ。ああら耻しや。昔が

今に至る迄。烏帽子子の方よりこそ。引出物を申す習のあるに。却つて賜はる事の耻しさよと思へば汗も泪も諸共に。止め兼ねたるばかりなり。コトバ北條御覽じて。あら無慙や祐成。弟が烏帽子を着る程に。有りし昔を思ひ出し泣いたる事の無慙さよ。慰めばやと思召し。盃たぶ〳〵と控へ。給ひ。如何に候十郎殿。まことや承れば。秩父には六郎殿。三浦に朝比奈。曾我には十郎殿の一つ師について舞を習はせ給ふが。中にも十郎殿の。御舞の勝れたる由承る。これは箱王殿の祝言の始めなれば。唯一奏と請はれたり。祐成聞召されて。舞はじ物とは思はれけるが。斯くては座敷の興も無し。舞はばやと思召し直して。一聲をこそ上げにけれ。サシ イロ しづやしづ。賤が

緒環。繰り返へし。昔を今に。なすよしもがな。昔を
今に。なさばやと。稍暫謠ひしが。ああら何とも無やこ
れは無常の體そかし。舞ひ直さばやと思し召し
和歌のたいをぞ擧げにける。君を始めてをがむには千
代も經ぬべし姫小松。〳〵と。三返踏んで廻はれば。北
條を始め。連座ありし人々。一度にあつと感じけり。そ
の後舞も過ぎければ暇を申し兄弟。曾我古里に歸りけり。

和田酒盛

コトバ相模の國の住人和田義盛は。一門九十三騎を引き具し。山下宿河原。長者の宿所に打寄り。夜日三日の酒盛は。面白うこそ聞えけれ。長者も兼て相構へたることなれば。虎に劣らぬ遊君を。十八人すぐつて。和田殿ともてなさせど。されども和田の志ざす。虎は座敷になかりけり。使を立てて召さるるに一度の使に參らず。二度の使に返事もせず。三度にもなりしかば和田大きに腹を立て。異國を見ねば知らず。本朝において武州に秩父。相州に義盛などが打寄て。酒盛をせんずるに。召さずとも出合ひ。酌をもとり今樣をも歌ひ。推參せんこそ本にて

あるべきに。か程に召すに出合はぬ虎は不思議の者かな。山下うちを出でよといへ。朝比奈とぞ怒られける。長者聞召し悪しかりなんと思召し。虎御前の居たりし一間所に立ち寄つて。障子を隔ててのたまひけるは。たとひ萬萬の事ありとも。只今出でて。和田の前にて酌とつて。三浦へ歸し申されよ。夫れ普天の下に生を享け。王土にその身を置く事は。大事にてあらずや。虎御前とありしかば。虎御前この由を承り。あらうたての母の仰や。賢臣は二君に仕へず。貞女兩夫に見えずと。申す本文こそ候へ。貧なる者と思ひながら祐成に契約し。又祐成をひきかへて。和田に契約あらんとや。思ひも寄らぬ事なるべし。カカル虎はこれに同音フシありつるが。世になし者の。

十郎と。契をこめ。鎌倉の方へとも。申させ給へ。母上と召せども虎は。出でざりけり。

コトハ長者聞召し至極の腹に据ゑ兼ね。如何に虎御前聞き給へ。昔も親に孝ある輩を。和御前に語つて聞かすべし。夫れ伯愈は母に打たれ。打つ杖をば悲しまで弱る杖に音をぞ泣く。晋の孟宗は。母の願物に。時ならぬ走月に筍を求むるに。雪空しく山に降りみち。筍更になかりしに。諸天これを憐み給ひ。雪の上に竹の子三本育つ。かれをとり。八十に餘り給ふ。母の願をみてけると聞く。郭巨といへる者は。一人の母を養ひかね。我が子を土に埋まんとて。打ちける鍬の下よりも。金の釜を掘り出し。二度長者になると聞く。去る程に人の子の胎内に宿り。胤

を下ろすはかりごと。梵天よりも糸を下ろし。大海の底なる。針のみみを通すよりも受け難うて設けたり。二百七十餘日は胎内に宿り。神佛にも忌まれ申し。九品の淨土へ參ることなし。たまゝ人に生れけるその時の苦は。生きたる牛の皮を剝ぎ。せんからたちのその中へ。追入るるよりも堪へ難し。同音フシ玄冬。素雪の冬の夜は。衾を重ねてはごくめり。九夏三伏の夏の夜は。松。風に戯れて。空吹く風を。まねよせ凡妻子を。はごくめり。去る程に人の子の。三歳になるまで呑みたる乳味を。凡夫いかでか知るべきぞ。忝くも釋尊は。檀特山の傍にて。靜に算を置き。算段し見給ふに。凡そ一百八十石に記さるる。この理を聞く時は。白き骨は父の恩。ししむらは母の恩。報じても報じ難きを父の恩と說かれ。謝しても謝し難きを。母の恩と說かれたり。主恩高如須彌山。父母恩深如大海。何れを報じつくすべきぞ。やう虎御前。唯今出でて。和田の前にて酌とつて。三浦へ歸さぬものならば。總じてあの十郎殿の。馬鞍見苦しき體にて。相模の曾我よりこれ迄の宿通を。思ひ止まり給へと。あらかにのたまひて。長者座敷になほられしは。十郎殿のためには面目なうぞ聞えける。

祐成雙眼に涙を浮べ。夫れ天人の五衰人間の八苦とて。八つの苦のその中に。あはれ唯貧程物うきことはよもあらじ。今日この頃祐成などが。たのめたらんずる遊君を。恐らくはあの殿原が分として。遊君出せ。

酒盛せんなどといひしなれども。世に從へば力なし。侍が侍に向つて腕首を握り。（カカル）きちしよへするは習なり。（同音フシ）世をも人をも。葛の葉の。葛の葉の。怨むべきにてなしやとて。樊噲そねむ祐成も。我が身の程を觀じつつ。袂を顏に押し當てて泣くより外の。事はなし。（コトバ）虎この由を打聞いて。何をのたまふぞ十郎殿。昔の人の目に見え候か。東方朔の九千歲。うつつらの八萬歲。りうちくわしやうの二萬歲。しやうみやう居士の翁の。一千歲二千歲を。經るとは申し候へども。名をのみ聞いて今はなし。明日をも知らざる心にて。（カカル）今日の樂こそ嬉しけれ。（同音フシ）とどろ。とどろとなる神。も思ふ中をばよもさけじ。一人ましまし母の不孝は蒙るとも。座

敷へは。出づまじき十郎。殿と語りけり。（コトバ）祐成聞召されて。あらやさしの女の言葉や。か程なる遊君を。座敷へ出さぬものならば。長者の怨深かるべしと思召し。如何に虎御前。唯今の言葉は。山ならば須彌山。海ならば蒼海よりも猶賴母しう候が。爰に誓ふ言葉の候。親の不孝と申すは私ならぬ事なり。三千大千世界を。頂いてまします御名を。堅牢地神と申す。釋尊問ひ給ひけるは。三界は如何程重きぞと問ひ給へば。地神答へてのたまふ。須彌の山に。とうしみを一筋置いたるたとへよりも。猶輕く候が。爰に重きものあり。親の不孝を得。主の勘當蒙りたる者の通る時。大地が割れてみがいればあたりの木草枯れ果て。川を渡るに瀨越し。底

のうろくづも生を滅し。地神が頭に。カカル七尺の劒をたつるより。同音フシ堪へ難しとのたまへば。釋尊も阿彌陀佛。三世の諸佛達舌をまいてぞ。怖ぢたまふ。

コトバ又五障と申すは。五の卷の提婆品に說かれ。一者不得大梵天王。二者帝釋三者魔王。四者轉輪聖王五者佛心と說かれ。女に五つの障あり。また三從と申すことあり。幼き時は。父母の家とて家を持たねば。親に從ふ苦一つ。若盛なる時は。夫の家とて屋を持たねば。夫に從ふ苦一つ。扨て老してのその後は。子どもの家とて家を持たねば。子に從へる苦一つあり。カカルされば佛の說かれたり。同音フシ三界に餓鬼もなし。六道に佛もなし女に三つの。家なしと爰を。佛の說き給ふ。

コトバこの理を聞く時は不孝に過ぎたる科ぞなき。唯今出でて。和田の前にて酌とつて。三浦へ歸さぬものならば。名殘惜しうは候へども。祐成は曾我へ歸るべし。虎この由を打聞いて。母御の御不孝あらんと仰せ候をだに。御身にかへて思ひしに。さらば座敷へ出でんとて。十二一重の花の褄をとつて。座敷へこそは出でにけれ。積る年は十七歳。海道二番の遊君。大人氣なくも義盛の虎に心をかけられしは。理とこそ聞えける。虎御前出でて。和田殿ともてなせど。盃のけふたい心に入らず。義盛御覽じて。如何樣虎御前の。盃に心入らず見ゆるは。夫の十郎が內にあるか。居たらば出でて酒呑めと。使を立てよ虎御前。虎斜に喜うで。祐成の方へ使を立つる。祐成

は出でじものとは思はれけるが。出でぬ者ならば臆したりと思ひ。俄の事にてある間。かけ烏帽子にぞきたりける。夏野の草づくしの直垂。九寸五分の鎧通し。だみたる扇おつとり添へ前半にさされたり。大幕つかんでうちあげ。祐成これに候とて。座敷をきつと見渡せば。着座には義盛を始め。虎も長者。一門九十三人。車座にはらりと居ながれて祐成が居ようずる座敷はなし。爰に和田の右座に。疊が一帖明いたり。和田は三浦の大將とて。恐をなしてなほる人もなし。祐成御覽じて。あらことごとしや。和田といふに三浦の大將。祐成は伊東の大將まんごかく(互角)なる侍が。和田が居うずる座敷に。祐成が居まじいかと。おめず憶せず憚らず右座にむづとなほる。かくて盃三獻通りて後。母の長者蒔繪の盤に。紅葉のかわらけ据ゑて出で。虎御前の前に置いて。なう虎御前。その盃一つ呑んで。何方へも思ふずる方へさし給へ。虎この由を打聞いて。あらうたての母の仰かな。和田へならば義盛へ。十郎へならば祐成へ。させとは仰なくして。何方へも思はうずる方へとは。和田にさすならば十郎の怨。また十郎にさすならば。和田の怨あるべし。とやせんかくやあらましと。カカル案じたりし有様を(同音)物によく よく譬ふれば。ツメ明石の浦の人丸の硯と筆と料紙を。側に置かせ給ひて。出る舟入る舟。立浪。吹く風によそへて。三十。一字の言の葉にもらさじと案じ給ひしもこれには如何でまさるべき。深く物に譬ふるに。大國の事なるに

帝一人おはします。御門の御名をば。玄宗皇帝と申す。
ゑかるに皇帝に三千人の后あり。第一の后を。虞子君と
申す。扨てその次の后を。こうなふの楊玄琰の御女楊貴
妃と申しけれ。ゑかるに楊貴妃。三國一の美人たり帝寵
愛斜ならず公卿詮議まち〳〵たりいやしき。ひざぶらひ
の子供楊貴妃が一の后にそなはらば。百敷や大宮人をふ
りすて。我々内裏を罷り出でんと奏聞す。右を下りに。
楊玄琰の一とう。虞子君の一の后にそなはらば。百敷や
大宮人をふりすて。我々内裏を罷り出でんと奏聞す。御
門このことを。叡聞まし〳〵てやう〳〵の有様や。彼方を
いはへば。此方の怨あのまた此方をいはへば。彼方の怨
あり。何方の怨をも負はぬやうにと思召し。天寶十二年。

七月七日の日。紫宸殿かくのまに二人の后召されて。瑠
璃の盤に白石黑石のてうすに水牛の角の骰子を。白銀の
筒に入れ。早く三番一徳の勝負にかけて位を。爭ひ給へ。
后達と宣旨ある后は聞召されて。怨も戀も殘らず。さら
ば打たんとて。骰子の目を合せる始の勝は楊貴妃。その
次は虞子君。手詰の勝負になつて。折羽になりければ。
楊貴妃の乞目に。重三を乞はれたり。虞子君の乞目には。
重四を乞はれたり。兩の心はいくばくぞ重三にも重四に
も。かたきつておかずし。筒のうちでこの骰子。あ〻二
つ宛に割れては四つに成つて出にけり。楊貴妃の乞はれ
たる。重三も下りてあり。虞子君の乞はれたる。重四も
下りてあり。御門叡覽まし〳〵。あうやさしの骰子や。

汝は牛の角なるが人の心を千々に知つて。左様に振舞ふかや。さらば官をなせとて。骰子の目に朱をさいて。その時までは。重一重二。重三重四。重六と申せしを。牛(朱)三牛四と申すこと。この御代よりも始まれり。その骰子と申すは。物の心を知つたれば二つ割れ四つで出で二人后そなはる。そのごとく自もさしたき方は兩方なり。盃は一つ二つに割れてのけかしと千草に物を案じける。虎御前の心中をたとへん方はなかりけり。

かくて時刻も移りければ。長者御覽じて。あら遲や虎御前。所詮その盃一つ呑うで。何方へも思ひさうらん(候)方へさし給へ。虎この由を打聞て。これは母御は物に狂はせ給ふや。この御言葉のなかりせば。老人なり客人な

り。和田へこそさすべきに。この御言葉を聞きながら。和田にさすならば。海道七箇國の遊君の名折りなるべし。なんでうこの盃を。和田へはさすまじい物を。夫の十郎にさうず。男なれば取つて呑まうず。呑む程ならば。朝比奈かふるこほりが座敷を立てぞせんずらん。その時自。上こそ女なりとも。心は男子に違ふまじい。あら情なしとよ和田殿。色ある人に色なきは。花見て枝を手折る。かや。爰をば只管。自に許させ給へと。さゆる體に持成し。朝比奈が馬手なる刀をひん奪うて。和田の心許にさしたて。かへさん刀にて自も自害し。つまの十郎に腹切らせて。死出三途の大河を祐成と。手に手を取り組んで行かばやと。唯一筋に思ひ切る。

コトバ いかにや御一門の人々。母御の思ひざしせよと仰せ候程かつ。思ひざしは力なし。よそのけまふも候ふまじいと。つまの十郎祐成に。盃をむづとさす。祐成御覽じて。いや〳〵呑んでは事悪しかりなん。いかがはせんと思はれけるが。呑まぬ物ならば臆したりと思ひ。あら珍しの御盃や候とて。持つて三度ぞ汲んだりける。義盛御覽じ氣色を引きかへ。やあ十郎。唯今の盃は。呑むまじき盃なれども。まさしく義盛を。避けで取つて呑うずるものかな。それ盃をば呑む法があるぞ。自然若い殿原。河狩かりくらうちすぎ。遊君の許へ立ち寄りて酒を飲むに。酒盛は亂舞になつて。思はしき遊君が一つ汲んで。この盃をば。あれにまします客人へと。さいたるを取つ

て呑うだるこそ。男の時の面目なれ。さすは日來の女。呑むは日來の男。二人の者が立ち出でて入。座敷に人もないやうに。盃をさしかはし呑うずる所。義盛が存には拔群に違うて存ずる。夫れ老いたをもつて。敬ふも父母のごとし。若をもつて。愛するを師弟の如し（カカル　同音　ツメ）知るをもつて人倫。知らぬは鬼畜木石。傍輩のこらしめに座敷をとつておつ立てよ早や立てよとぞ怒らるる。上を學ぶ下なれば。下座なる若者。側なる打物を。引倒し〳〵はばきもとをくつろげ。仰にて候ぞ。立てとおつ立つる。痛はしや祐成。からのかかみに身は一つ。立つもさすがなり。いふんさんしうにいたつて。ちく〳〵に。猶金玉の聲あり。河津殿の御名を下さじものと存ずれば。

如何に和田殿。大名なれど。三浦の大将祐成は身こそ貧なれど。伊東のこれは大将。まんごかく（互角）なる侍に。當座の恥を。與へ給ふものかな。唯今座敷を。立てうずる者はそも。おつはたに孫太郎。いとひさに源八。荏柄の平太種長。朝比奈ぞあるらん。唯一人が立ち去れば後の程の淋しきに。義盛も立ち給へと。刀の鯉口を。三寸ばかりくつろげ。袂の下にかくし持ち。半時かうて待ち居た。いや。祐成の心中は。深淵に臨んで。薄氷を蹈むが。ごとくなり。

去る間祐成心に思ひかへす。無慙や弟の五郎時宗が。この事を度々せいぶんしつるものを。夫れ宿通と申すは。有徳なる人の宿通をば。人が羨み。貧なる者の宿通をば。

必ず人の悪み候。（サシ　クドキ）馬の乗合。かさとがめにて祐成討れ給ひて後。親の仇と申し御身の仇といひ。何としてかは討つべ。きぞ。（コトバ）ただ〳〵宿通を思ひ止まり給へと。度々せいぶんしつるものを。用ひずして打越え。朝比奈がふるこほりが手にかかつて。討れんことは治定。死せん命は露塵ほど。惜しからねど。年來の祐經をば討たずし。生涯を失ひ何かせん。朝比奈の三郎が。座敷を立てといふならば唯立たばやとこそ思はれけれ。かく思ひける事が。相模の曾我へや通ひけん。五郎時宗は。古井といひし所に。矢の根を研き居たりしが。あまり眠たさに碁盤を引き寄せ枕にし。ゆたかにこそ臥にけれ。舍兄祐成枕上に立ち寄らせ給ひ。いかにや五郎。夫れ張良

が。四十二箇條の卷物を。覺したりといへども。酒を過ごしぬれば何にも劣れり。千日したる用心も。目をつぶいぬれば。たつた一夜に無になるぞ。斯程の白晝に。左樣にゆたかに臥すか。起きよ〳〵と二三度四五度。起させ給ふと夢を見。かつぱと起きて。あたりを見るに人もなし。不思議やと思ひ下女を近づけ。十郎殿はと問へば。宵よりも大磯にて。これは留守と申す。扨ては仇工藤祐經が。一騎打つて通るを。五郎だにもあるならば。恥ある矢をも一筋射て。腹切らんと思召さるるか。かく面影に立つが。その儀にてあるならば。諏訪の上下も照覽あれ。舍兄祐成の影を。人に踏ますまじいものをといふまに。帳臺へつつと入り。定紋しうつたる唐櫃のふたを

明け。祖父伊東殿より傳へたる。逆澤瀉の腹卷。四人して持ちけるを。綿嚙つかんで引つ立て。草摺長にざつくと着る。刀と申すに仇工藤祐經。箱根詣のありし時。見苦しげなれどもとて得させたる。赤木の柄に白銀の。目貫とうがね打つたりし。こさすが(刀)をさいたりけり。太刀と申すに河津殿。奥野へかへりあしの時。大見小藤太八幡三郎が。一二のまふしをかため。放ちける矢に中り。闇々と討れ給ひし時。これをば箱王に取らせよとて。形見に下し賜はつたる。四尺八寸ありけるが。拔けば玉散るばかりなるを。白き手綱にて。眞中をむずと結んでわつそくにかくる。廐へ走り出で見てあれば。折節鹿毛なる駒に。ゆあらひして置きにけり。鞍置かん隙のあらざ

れば。はつなはうかき引つちぎつて。あらい轡をはめさせ。引き寄せて打乗り。廻れば三里。すぐに打てば五十町。廻らば時刻も移りなんと思ひ。曾我中村にさしかかり。しとと打つてはかけあほちかけあほちてはしとと打ち。駒に白泡かませ。たつた一打に急きたる。時宗が心中。明日は無間地獄の。えんぶの塵ともならばなれ。今日において時宗は。あ。たのもしうぞ見えにける。刹那が間に長者の宿所に着く。門外を見ければ鞍置馬がいくらもあり。大御門より入らんは。大腹巻に大太刀。座敷の體事なしと思ひ。小御門へ廻る。爰に下女が一人行き逢うた。やうこの屋形に。何事かありけるぞと問ひければ。下女承り。さん候宵よりも。和田の義盛一門九十三騎打

寄せ給ひて。酒盛の候座敷へ。十郎殿も虎御前も出させ給ひて。盃の口論は。唯今半なりと申す。扨てその盃を。和田にさいたりけるか十郎にさいたりけるか。虎御前のやさしうて。十郎殿の御方へささせ給ひたるといへば。扨てその盃を。臆して取つて呑まざりけるか。なう御心易く思召せ。取つて參つて候ぞ。時宗聞いてから〳〵と打笑ひ。日本六十六箇國は。大剛の兵また二人ともなかりけり。舍兄祐成にてましますや。賢人なる女は。世に多しといへども。虎にましたる賢女よもあらじ。虎なればこそさいたれ。祐成なればこそ。多いかたきのその中にて。臆せいで取つて呑うでであれ。呑うだりや十郎殿。さいたりや虎御前と同音フシいや。太刀の柄をたたいて。

一人感じて立ちにけり。ッメ扨ていづくから行くぞ。此方へ入らせ給へとて。面廊廻廊。孫廂をさしすぎ。障子を一間隔て。あれなるは新左衛門。ふるこほり左衛門。えみな兵衛。あしな兵衛。すのさきの孫太郎。爰なるは十郎殿と。一々に教へけり。時宗これを聞きたとへ何者なりとも。舎兄祐成に飛んでかかるものならば障子の一間ものくしく。はらくと踏み破つて。大将とかしづく。和田が細首。宙にづんと打落し。朝比奈が眉間。から竹割といふものに二つにさつと打割り。殘りの奴原。年にも足らぬし(初)よりわらんども。物の數にて數ならず。將棊倒をする如く。散々に斬つて捨て。舎兄祐成と。さし違へて死なんは。案の内と存ずれば。ふんちかつて立つたりしは。多聞持國增長。いや。造り据ゑた仁王に。ちつとも違はざりけり。

かくて時刻も移りければ。義盛御覽じて。やあ朝比奈。汝は比來の殊勝には似ぬものかな。など祐成を取つて追つ立てぬぞ。早や立てよとぞ怒られける。朝比奈心に思ふやう。あうさいたるも道理。また呑うだるも道理なり。その上弓取は今日は人の上。明日は我が身の上なるべし。さすがに名ある侍に。如何にとして恥を見すべき。げにやらんこの殿原兄弟は。魚と水との如くにて兄が酒を飲めば弟が飲まず。弟が飲めば兄が飲まで用心すると聞いつるものを。今もや弟の五郎時宗がうちにあるらんに。悪しうかかつて座敷をば立ち損じ。眞

甲割られ。悪しかりなんと存ずれば。人もはやさぬ舞をぞ立つて舞うたりける。その比海道にはやりしすずりわりといふ歌のたいをはつたと上げてはんしふんでぞ（カカル）「まはりける（同音フシ）」あしやあししとて。切り捨てられし呉竹も。本に一よはあるものを。よしやあしとて。つきすてられし。庭草も。もと忍ぶとてあるものを。義盛この事御腹いさせ給ふべし。十郎。殿も虎御前も。心にかけ給ふな。一向この。義秀に。許し。給ふべきなりと。はんしふんでぞ廻りける。朝比奈が志。生々世々に至るまで忘れ難くぞ覺えける。

（コトハ）舞もすぎ時分に見えし時。障子の内に。金物の音からりと鳴つた。さればこそと思ひ。此處をちつと御免あれやといふままに。間の障子をさつと明け。内を見入れて見てあれば。ないは知らねども。七尺ゆたかなる大男。胸板見ければ。眞白なるが。五尺餘の大太刀を。七八寸くつろげ。かからば切りよげに見えければ。鬼の樣なる朝比奈も唯。膝振つてぞ立つたりける。何や御身は五郎殿にてはましまさぬか。舍兄祐成も座敷にましますに。なと出でて酒盛を。したまはぬぞとありしとき。時宗聞いて。御覽ぜられ候如く白衣にて候。朝比奈心に思ふやう。實にやらん五郎は蛇に綱をつけたりとも。馬ならば乘らんと。廣言をすると聞いつるものを。座興ながら實に。力の程をためさばやと思ひ。實に御邊は出づまじいかといふままに。走りかかつて。腹卷の草摺二三枚。胴

の板に引きしめ。前へゐいやと引きけるに。ちつとも更にはたらかず。實にこれは強かりけるや。三浦一門は大十三騎。連判は。四百八十餘人が中に。小林の朝比奈と て名に。し負うたる某が。五郎を唯今座敷へ。カカル引き出さぬものならば。同音ツメゐやうがいなりと思ひて。朝比奈の三郎が。力の出で來るしるしに。左右の腕とかひなに。力筋といふものが。十四五二三十ふつ〳〵と出でにけり。胸をおほる力毛は。碁盤の表に。銅の針を。すりならべたる。ごとくなり。胴の筋が額へ上り。額の筋が胴へ下がり。物によく〳〵譬ふれば。きうちやうの藤が。松をからんで。きりんかともをこうたるにちつとも違はざりけり。あう。仰々しの有樣や。宇佐見菊見河津。三

箇の庄の内にして。荒馬に騎つての大力の。五郎と呼ばれて。朝比奈ほどの小男に。闇々と引かれて座敷へは出づまじいもの。實に強う引くならば。三枚の草摺が切るるか。膝の節が違ふか。踏まへた板が。大地へ落ち着くか。三つに一つは。定の物と思ひて。ふんちがつて立つた。はつしんをいらけ。前へゐいと引いた。後へゐいとのいた。草摺切れてのきけれと。立所を去らずして。ふんちがつて立つた。いや曾我の五郎時宗を。大力と申して怖ぢぬ者こそなかりけれ。三枚の草摺を持ち父の御前に畏り。これ〳〵御覽候へ。五郎時宗こそ内に入られて候へ。これを肴にて酒盛をし給ふべしとありし時。義盛氣色かはつて。なに五郎殿が内にあるか。舍兄祐成も

座敷にましますに。　など出でて酒盛をしたまはぬぞとありし時。　時宗聞いて。　白衣でさうとて音もせず。　去る程に十郎殿。　弟の五郎時宗が。　うちにありとだに聞きければ。　ただ　きまんこくのきはらと。　らせんこくのらはらを。　欺く程の兵を。　千騎萬騎持つたるより。　猶たのもしうぞ思はれける。　なに五郎が内にあるか。　おとな侍の召のあるに。　など罷り出でて御酌を申さん。　時宗承り白衣にて候。　御免あるぞただ參れ。　承ると申して。　大腹巻を着ながら。　大太刀を持ちながら。　しどけなげにぞ出でたりける。　ふるこほりの馬手の座敷に。　詰座に。　ちやうと直つた。　ふるこほり殿御覽じて。　これ程廣い座敷にて。　詰酒盛は無用さうぞ。　其處をちつとくつろげ給へ酒

盛せん。　時宗聞いて。　なんさうふるこほり殿の。　參れと仰あればこそ參りたるに。　座敷を立てと仰あらば。　唯今罷り立たんといふままに。　腹巻の草摺二三枚膝の上にゆりかけ。　猶詰めかけて直つたるは。　興さめてぞ見えにける。　義盛御覽じて如何にや五郎殿。　御身幼少にて箱根へ上り。　別當の坊にて學問し。　伊豆に下り。　北條を烏帽子親に賴み。　介五郎時宗と名乘り給ふとは承れども。　見參はこれが始。　それ〳〵とありしかば。　萠黃匂の腹巻に太刀取り添へて引きたりけり。　時宗これを見。　あつぱれ具足や。　取らばやと思ふがいや〳〵。　明日にもなるならば。坂東海道十五箇國の人々の。　傳へ聞しめされて。　無慙やな曾我殿原兄弟は。　身の貧なるに從つて。　引出物にめで。

遊君を和田へ。ばはれたるなんどと申さん時は。後難なりと思ひ。唯今の引出物を賜りたくは候へども。後日に三浦へ参りて賜るべし。その間は。あれにまします若き人に預け申すといふままに。綿嚙をかいつかんで。すそ座へからりと投げたりけり。義盛御覽じて。唯今の風情は。座興さうか五郎殿料簡さうか時宗。時宗聞いて。なんさう和田殿。世にある人の上にこそ料簡座興も候へ。貧なるものの座興は。知らぬでさうと申す。義盛聞召し いや〳〵。カカル あしかりなんと思召し。同音ツメ ようさう五郎殿暇申して長者として座敷を立たせ給へば。九十三騎。はらりと立つて。此處や彼處にて駒ひきよせひきよせ。ひらり〳〵と打乘る。その中に和田殿。大將でましませ

ば椽のはなへ馬引き寄せ。乘らんとしたまふ。時宗これを見。以前に舍兄祐成に。うめを見せた如くに。威さばやと思ひて。四角なる眼を。五角にくわつと見ひらき。如何に和田殿。この屋形と申すは。和田殿も立てられず十郎殿も立てられず。また時宗が立てたることも候はず。坂東八箇國。海道は七箇國。十五箇國の人々の。辻酒盛のそのため。立て置れた屋形なり。これからの乘打。尾籠さうぞ和田殿。下りさせ給ひ候へ。下りられぬものならば訪諏八幡も御知見あれ。時宗が唯今下ろすべしとぞ威しける。義盛聞召し。いや〳〵彼奴原。身を棄つる者に寄せ合せ爰にて事をしいだし。若黨を討たせ。惡しかりなんと思召し。ようさう五郎殿。年は寄つつ目は見え

ず日は暮方になりさうつ。鞍具足見んために引かせてこそは候へ。それそれ若黨。馬引けやと。ありしかば承ると申して。十家酒まで引いたる。五郎に怖ぢた。所なり。兄弟の人々袴の側を高くとり。弓矢の禮儀は。これまで候早々召され候へ。とくとく召され候へと引橋までぞ送りける。その後兄弟屋形に歸つて。もしも三浦より夜討に寄せやせんとて。夜廻辻固用心きびしかりけれど。一門の中なれば寄することこそなかりけれ。かの人々の心中をば。貴賤上下押しなべ。感ぜぬ人はなかりけり。

入鹿

そも〳〵鎌足の先祖を委しく尋ぬるに。天津兒屋根尊より。三十六代の御末。御食子の卿と申して。天下に隱れぬ臣下なり。しかるにかの御食子の卿は。君の御覺めでたくし。天下の政事をわがままにし給へば。世そねみ人偏執して。いかにもして御中のあざらけなんをたくみ。讒臣けうがいをいたせども帝御用ましまさず。しかりとは申せども。諸卿一味の遠流にて。宥めがたくやおぼしけん。

クドキ

とがもなかりし御食子の卿に。敕勘の宣旨を蒙りて。遙かなりける東路や常陸の國に配所ある。思ひをば巖

山の夕の雲にかけながら。泪を遠路の。道より末にさきだてて。見も習はざる東路や。常陸の國に下り。宮のあたりに庵して。明かし暮させ給ひければ。あたりの里人見參らせ鹿島の宮に栖めばとてしう禰宜とぞ申しける。いつしか早くおちぶれ。農夫田舍に交り。三農の時を得。いつけいの鋤を荷ひ。すむの田をかへし。一枝の桑の葉をとりて。絹帛の類を營み。いみじからねど光陰の去年は今年に。推し移り善惡も知らず住み給ふ。

かくて若君でき給ふ。父母御喜なか〳〵申すばかりもなし。すでにその年うち過ぎ。夏暮れ行けば水無月の中の五日の。暑き日に田の草取に出で給ふ。痛はしや若君を。この田の疇に具し出でて。青葉の柴を折りか

ざし。泣かでいねよと乳を含め。夫婦ともに百草を。とる手につけて苗の葉の。榮えん事を。喜びて終日取りぞくらさるる。かかりけるところに。いづくからとも知らざるに。一つの狐來り。鎌を口にくはへ稚子の枕上に置き。搔き消すやうに失せければ。父母急ぎ立ち寄つて。鎌を取つて見給ふに。氷手の内にかがやくやうな鎌であり。もしも寶に。なるやとてこの子に添へて育てらる。撫育練磨の時を得。はや十六になりたまふ橘の。卿の御時。農夫田舍の業なれば。庭の夫にさされ泣く〳〵京へ上りつつ。百敷や。大内の庭の小草を清めしに。行事の辨は御覽じて。多くの仕丁夫の中に。幼なき童あり。形はやつれ果てたれど。唯人ならず覺えたり喉骨の相のあ

り。こむこつの相とは大臣の相のことなり。田舎へ今は下すまじ。宮中に止まりて。御門を守護し申せとて。文章生に任ぜられ。右京の太夫に經上りて。宮中の交。はや雲客に。なり給ふ果報の程のゆゆしさよ。

コトバ かかりし時の折節蘇我の入鹿の大臣とて。大悪逆の臣下あり。君の位を奪ひ取り。われ王にならんとたくみけり。この事天下の大事とて。東山の奥藤の多くはひかりたる大木の下にて。詮議ひそかに時を得。蘇我の入鹿の大臣をば。右京の太夫に仰せつけ。討たるべしとの綸言なり。「さる間鎌足勅命なれば背き得ず領掌申し歸り。幼子の時狐の輿へたびたる。一つの鎌をたばさみ。ねらひ。うかがひ給へども。かの入鹿の大臣は。大通力の人

にて。三とせの事をかねて知り。劔をたばさみ鉾をもち。宮中の出仕にも。警固の者前後に。道先を拂はせ出づれば。討るべきやうなかりけり。「鎌足心に思召す。人をたばかる謀。親しくならでは叶ふまじと。思召されける間。見目よき娘を尋ね出し。わが嬉やと號し。いつきかしづき給ひけり。美人はいはねどかくれなし。都の上下かつ知つて。及ぶも及ばざりけるも。みな望をかけぬ人はなし。

「ある時鎌足。入鹿の臣の御方へ。御文をつかはさる。浮世に來るまるしに。愚子を一人設けたるが。せめて無運のいたりにや。かひなき姫にて候へば。妹とやらんのそのために。望は多く候へども。うけひく方も候はず。クドキ

當今の御世には御方様ならでは。親しみ申さん便もなし。醜女と思召さるるとも。召し置かれ候はば。身の面目。たるべしと書きこそ送り給ひけれ。入鹿は重き人なれども妹には早くくつろぎ。多年望の折節。御許されは喜悦とて。やがてこの姫迎へとり。いつきかしづき給ひけりがくて若君出來給ふ。家門の繁昌時を得。これにしかじとざめかるる。鎌足斜に思召し。今は早や近づきぬ。たばかりよせてやすくと。討たばやなんと思召し。風の心地にもてなし。日を經て萬事。いつせいの振を學び給へば。宮中の人々。とぶらはざるはなかりけり。されども入鹿は見え給はず。待ち兼ね給ふ風情にて。御文をつかはさる。すでに浮世の生涯餘命限なり。親子

わりなき對面も。今度ばかりの事なるべし。入鹿の臣も北の方も御出あれと書かれたり。入鹿この文御覽じて。大きに肝をつぶさせ給ひ。車やりだせ牛飼よ。急がせ給へ御前と。取る物をも取りあへず。二人ながら兩車にめされ。はややり出し給ひしが。中にて心を引きかへし。しばしよ牛飼。この車を止めよ。御前ばかりをやり申せ。我は行かじと思ふなり。それを如何にと申すに。昔異國にたとへあり。れうきん國のれう王と。玄城國の玄王と。國の境を爭ひ。數度の戰隙もなし。玄國は多勢。れう國は無勢なり。しかりとは申せども。れう國の帝に。きんぞんきんらくとて。二人猛き兵あり。天をかける時。浮雲を踏むこと。平路を傳ふご

とし。大地を透る時。磐石を穿く事。薄氷をとほすがごとし。波の上にて馬を乘り。猛火の中に身をかくし。神通自在にかけまはれば。彼等二人にかけ立てられ玄國の兵は。數をつくして打たれけり。「すでに早や玄王も。打たるべきにておはせしが。玄王賢き心にて。見目よき娘を尋ね出し。ばと云女と名づけ。きんぞんを智にとる。きんぞん猛き兵なれども。妹には早くくつろぎ。彼の姫宮に契をこめ。玄國へ渡る。弟のきんらくも。兄がかくなる上は。力及ばぬ次第とて。兄弟つれてぞ渡りける。玄王斜に思召し。二人の者を召され。かの姫宮と申すは。まろが正しき姫なり。契をこむるなん達(汝)などか子にてなかるべき。親子わりなき中ならば。れう王を打つてたべ。

もし左もあらば彼の國を。方々に致さんと。睦しげにのたまへば。兄弟の者どものがれがたくや思ひけん。領掌申し歸り。れう王に仕へ奉り。便宜あらばとねらひけり。れう王御覽じて。例ならず汝等が。まろに近づきよき事は。玄王に賴まれ。まろを打たんとするものなり。打たれじとだに思ひなば。如何に思ふとも打たるまじ。しかりとは申せども。年來まろに仕へ數度の凶夷を亡し。今まで國を治るも。ただ汝等が舊功たり日來の忠の深ければ命を汝に與ふべし。しかりとは申せども。五體不具にあるものは。佛體を受けがたし。まろが崩御の亡體を。少しもそそかさず。きんざんに廟をつき。こめ奉るべきなり。すは魂とのたまひて。自胸の間より。青き蛇とり

出し。みわけにとつて押しわけ。きんぞんにたび給ひ。
カカル御最期の綸言に。フシまろが命は惜しからず。汝等他國の策を。知らざりけるぞ無慙なれ。必ず後悔すべきぞと。これを最後の綸言にて忽ち崩御なり給ふ。ツメ御遺言に任せて。きんざんに廟をつき。御からだを堀り埋め。魂の蛇を。玄國へ渡して。玄王にこれを見せ申す。玄王斜に思召し。ここまでの業。なれば。きんぞんをもきんらくをも。諸共に討ち取つて。世を治めんとの詮議にてあう官軍雲霞にとりさへたり。無慙の有様や。れう王のおはせし時にこそ。きんぞんきんらくが弓箭の勇も強くして。居ながら諸侯を制せしが。れう王。崩御のその後は。通力もつかれ。(計略)叛もめぐらさず劔もとばず況んや。

鉾を投ぐるもなく。徒に彼等。討たるべきにてありしが。なほ兵法の得により多くの中を打ち破りれう國指して落ちて行く。後より官軍追つかくる詮方つきてれう王の御廟の前に參り。いかがはせんと悲めば。廟の内に聲あつてまろが最後の綸言。今こそ思ひ知るべけれ。敵は近づきぬ。徒に彼等。討たれんことの無慙さよ。いで〳〵さらば汝等を。一みつぎみつぎ。今度の命助けん。まろがからだを堀り起し四色の獅子に押し乘せ。一つの鉾を與へよ。防いで見んとの宣旨あり廟は大きに震動し。墓は二つにわれにけり。不思議の思をなしつつ。骨を拾ひつぐ程にいかがはしてなかりけん。頭の骨の足らざれば左の膝の。かはらを取つて。頭の骨にさしつぐ。さてしし

むらは朽ち失せ　取繕ふにあたはず。　青黄赤白の四色の獅子に乗せ。　鉾を參らせたりければ。　拍子に合せかけ引く。　面を合するものはなし。　玄國の兵は數をつくして討たれけり。　しかりとは申せども。　その日もすでに暮れ入會時になれば。　亡骨を番ふかばねにて。　日も入らば離れ。叶ふべしと覺えず。　高き岳に上り。　入日をしばし止まれと。　招き給ひたりければ實に日光もあはれみて。　山の端にかかる日が。　又巳の刻にたちかへる。　敵これを見。　いよ〳〵嗔意を止め。　合戰をとめて逃げ歸る。　後代の名跡。舞樂に作り置き給ふ入日をかへす舞の手。　この御代よりも始まれり。　れうわう(陵王)の秘曲。　この御事なりけりばと。うの舞と申すは。　やうじの姫のことなり。　きんぞんきんら

くは。　らくそん。　納蘇利これなり。　げんじやうらくはやたいな。　還城樂に作らるるこれらの事を聞く時はわれも女に契り。　鎌足にはかられ明日後悔のあらん時前非を悔うとも叶ふまじければ行かでもありなん。　明日は日柄よからず。　うちとけ給ふこともなく今度もたばかり損じて討たで止まれけるとかや。　鎌足力に及ばせ給はず。　春日の宮に參籠し。　一切多生の道理にて。　殺すは咎にて候へども。　彼の入鹿の大臣は。　天下を輕くするのみならず。　國をつやせる逆徒たり。然るに彼の入鹿を。　やす〳〵と討たせてたばせ給ふならば。　奈良の都のその内に。　興福寺の金堂とて。　丈六の釋迦の像を作り。　げうわうを祈り。　國家を護國すべしと。

大願をかけさせ。少しまどろみ給ひける。夢にもあらず又現にもあらず。葵の榊葉一ふさ。直衣の袖にかかる。またあたりを御覽ありければ。榊の細杖一つあり。そもこの杖と申すは何といへる心ぞや。

イロサシ

凡杖にも多種あり。佛の杖は摩迦薩杖無明長夜の民のうき迷をしる杖なり。菩薩の杖は錫杖。功德の高きを表せり。欣求解脫の竹杖。はくたわうのしゆはん杖しゆもんの持てるしゆ杖こそ。深き心あるなるに今の榊の細杖はまうろの迷暗杖にて盲のつく杖なり。照る月日は明かにましませど虛空長夜のごとくなれば杖にひかれてたどり行く。故に名づけて迷暗杖と申すなり。

コトバ

われも盲にあらずとも。この杖をつきつつ。盲目の

まなびをし。敵に心を許されて。討てと思召さるるかと。やがて下向の道よりも。この間の病氣に。目を病みつぶしたりとて。たどり歩き給へば宮中の上下ゆゆしかりつる臣下とて。とぶらはざるはなかりけり。されども入鹿は御覽じて人をたばかる謀。何ぞとかたくみ給ふらん。恐ろしさよとて用心す。比は冬のことなるに。圍爐裡に火を置かせ。入鹿の臣と鎌足。御手を暖め給ひけるに。鎌足の若君の二歳にならせ給ふを。乳母がいだき參らせて。あたりを罷り通る時。むづからせ給ふ。鎌足聞召されて。何とてその子を泣かするぞそれ此方へとありしかば。あひなう參らするとて。盛りの炭の火の中へ。取り落し給ふ。入鹿この由御覽じて。眞僞ここなるべし。な

と見落さであるべきぞと。　さし退いて見給へば。　カカル鎌足いとど悟つて。　クドキ「あらざる方に手をあげて　フジもだへ焦れ給ふ間はつひに空しくなり給ふ。　かひなき死骸をとりあげ。　御膝の上に置き給ひ。　爰はいづく前後。　かしこはいづく面顔。　足手をさぐりまはしつつ。　こは如何にあさましや。　あたりに人はおはせぬか。　など取り上げてたび給はぬ。　しみとくとぜんとたは菩薩のきやうにあらずや。　あはれ不具のその中に。　盲はことにあさましや。　かく不具なる憂身こそ。　先立ち菩薩をもとはれんとこそ思ひしに。　眼前猛火の中に入るを。　助けぬ事の無慙さよ。　生きてかひなき憂身をも。　害してたべや人々とて。　天に仰ぎ地に俯して。　流涕焦れ給ひければ。　見る人も聞く者

も皆。　涙をぞ流しける。　コトバ入鹿この由御覽じて。　あら痛はしや。　實に盲目したまひけるや。　されば吾身に僞のあるものが。　人の眞を疑へり。　今より後は疑の心を止め。親しむべしと思召し。　はやうち解けさせ給ひけり。　鎌足斜に思召し。　便宜よさまなり。　帝叡聞ましく。　御用意あるべしと。　内へ奏聞申されけり。　帝叡聞ましく。　かねてより御たくみのことなれば。　異國より參賀の表を出されたり。　開かるべき通あり。　參内あるべしと勅使立ちければ。　諸卿殘らず參内ある。　鎌足憚り御不參なり。　たとへ盲目なりとも。　大事の僉議なる間。　參内なくては叶ふまじいと。　重ねて勅使立ちければ。　鎌足の臣も參内ある。　いつよりも法衣引き繕ひ。　幼子の時狐の與へたびたる。　一つの鎌を

たばさみ。こばちようの車の。あざやかなるに召され陽明門に御車を止め。雑色二人に手を引かれ。御前近くなりければ。恐れなればそれよりは。介錯申すものもなし。紫宸殿の階を。さぐり〳〵攀ぢ上り。大床の簀子に畏り。御前を後になし申し。あらざる方を伏し拜む。御門叡覽ましく〳〵て。あれは如何に鎌足。本座にあれとの宣旨なり。諸卿達も殘らず。御本座あれと申さるる。聲につけて鎌足。さぐり〳〵攀ぢ上る。すでに入鹿の座近くなれば。入鹿、片膝押し。立て鎌足の御手を取りて。引さ上げんとぞしたまひける。鎌足は入鹿を。押し上げんとの色代なり。すでにはや御座敷。身の毛を立てて怖ぢ恐れ。早や騒しくなりければ。敵に色を悟られ。悪しかりなん

と思召し。ツメ「三」とせが間塞いだる兩眼をくわつと見聞き。弓手の直衣の下よりもくむ(伴)だんの鎌を取り出して。打ち振り。給ふと見えしかば。入鹿の臣の御頸は水もたまらず落ちにけり。頸もなき軀が居たる所をづんと立ち。鎌足をおしのけ馬手の直衣の下よりも。氷のやうな劍を拔き。御座へ走り上り。御茵に抱きつき。切つつ突いつ至極して北枕にぞ臥しにける。けれども君はかねてより。荒海の障子の間に立ちかくれさせ給へば。更に恙もましまさず。入鹿討たれてその後。國土も富み榮え。民のかまども豊なり。

信田

既に承平は七年にて改元す。天慶九年に變る。天暦十年丙辰彌生半の比。相馬殿の姫君を小山の太郎に取せらる。小山の太郎行重は望む所の叶ふ上喜びは是に若かじとて。迎へ遇し傅き申す。一つには仁義の法といひ。草の蔭なる相馬殿の思召されんずる所も有り。孝養深く申さんとて。山川の殺生禁斷し。思ひ入つてぞ吊ひにける。信田にましまし御臺所は傳へ聞召されて。小山の太郎行重をば。荒男と思ひてあれば。情のみある者なり。親の事を思ふ者だにも世には稀なる事ぞかし。ましてや見もせぬ身を。斯樣に深く吊ふは。よつ頼母敷き心かな。時々此方へ來れかし相馬殿の遺身とも。見ばやとこそ仰せけれ。

或る時御臺所浮島太夫を召して仰せ合せられけるは。相馬殿の末期の時。思召しや忘れけん。是程多き所領を。姫に一所も御讓りなし。何處にても少し計らひ候へ。浮島承り。謹んで。暫して申しけるは。相馬殿も惡き事をば爭でか思召し置かるべき。弓取の公達に姫子は終に他人となる。婿は一生近からず。移れば變る世の習わりなく思召され候はば。をり〳〵の引出物に財は盡させ給ふとも。所領に於いては一所をも讓らせ給ふべからず。人には貪欲(慮妄)こまうとて。慾心内に含めば。親き中も疎う成り候。餘所〳〵ながらの御對面こそ。中々末の世迄も目

出度く渡らせ給ふべけれ。小山殿に御對面も無益の御事たるべしと以ての外に申しけり。御臺聞召し御返事なうて立たせ給ひ。何時しか相馬殿に過ぎ後れ一周忌だにも過ぎざるに。内の者さへ輕しめてをかしき者と思はるる。果報の程の拙さよ。中々浮世に在り顔に家を持つても何かせん。信田殿に暇を乞ひ尊き山の隱れ家にも引き籠らばやなんどと深くぞ怨み給ひける。信田殿聞召されて。母御の御恨は御道理。一人ます母上の。御意に洩れては詮なしとて。信田の庄を半分分け。母上に奉る。母上斜ならずに思召し。小山が館へ贈らせ給ふ。小山斜に喜うで一つは婿入り。又一つは喜びの所知入りなり。ければ。網代の輿は八挺。張輿は十二挺。總じて騎馬は三

百騎。上下花めきゆゆしうして。信田の館へぞ移られける。新殿を作らせ。斯くて爰に住み給ひ。今御館殿とはやり。信田の先祖の郎黨共。日々に出仕隙もなし。されども浮島父子六人は。をり〳〵ばかりの出仕にて。さながら御前に詰めざれば御臺の御意も薄くなる。あう何はにつけて昔より。物憂き事共多くして。心の止る事もなし。世の有樣を見るにつけ。後の世危かりければ。永らへざらぬ物故しや何時迄と思ひ切り信田の河内に引き籠り隱居してこそ居たりけれ。

御臺この由を御覽じてあら可笑の浮島が振舞や。候。そもあの浮島を郎黨に持たぬものは。世をば過ぎぬ物か。小山殿一人だにも有るならば。何の仔細のあるべきと。

喜をなして榮え給ふ。去りながら浮島太夫は隱居しぬ。信田は未だ幼稚なり。大事のちけんまるかし。家に傳る重寶を。内に置きては詮なしとて。一つも殘さず押まくつて小山の太郎に預けらるる。或る時小山人なき所に引き籠つて。委しく見るに。將門代々より持ち傳へたる證文どもが。一つも殘らず爰にあり。何々信田玉造とうては八萬町の所。ああら夥や。この内僅一萬町を知行するさへ不足なきに。ましてや殘る七萬町。常陸下總兩國の。おほいすけとなるならば。我にましたる弓取の國に二人ともあるべきかと。頓て大慾心ぞ出で來たる。斯かる目出度き重寶を。左右なく預る事は。天の與と存ずれば。安堵を申さんずるその爲めに。熊野詣に事寄せて急

ぎ國を打ち立つて。都へぞ上りける。關白殿下に就き申し。安堵の旨を奏聞申す。内裏よりの宣旨には。相馬が跡を申すは何者ぞとの宣旨なり。相馬がためには一子で候。讓りの手つき證文共。代々のくしよどもを。忘せう正しく參らせ上げ理非をすまひて奏聞す。その上國は有德なりようにも諸司にも別當にも。財をあかせていさませたり。君にも金料の馬、綾羅金銀の類を。數を盡して參らせあぐる。左右の大臣后の宮。女房達。その外の人人にも財を厭かせて勇ませけり。たとへば敵方支ふるとも。などかは叶ひてあるべき。まして爭ふものはなし。むぐう仔細に申しなし。安堵給はり下りけり。去る間小山道々案じける樣は。御臺所と信田殿に。少し

なりとも取らせ。扶持せばやと思ふが。いや〳〵斯るむつかしき者を。助け置き後の煩となる事も有り。忽ち失はばやと思ふが。それも餘り情なし。所詮は兩國に置かぬ迄と思ひ。國許に着きしかば。先に人を立て。御臺所と信田殿。痛はしくは存ずれども。常陸下總兩國に安堵は叶ふべからず。遠き國の知らぬ里へ。とつく落ち行き給へ。片時も國へまし〳〵て。我ばし恨み給ふなと。追つ立ての使を立つる。御臺所この由を聞召され。偏に夢の心地して。現と更に辨へ給はず。小山殿が所存には。天魔破旬が入り替りたるか。如何なる事にて斯く云ふぞと。くどき歎き給へども。あらけなき使にて。哀を捨てて振舞へば浮島太夫が言葉の末。今更思ひ出さるる。扨てあ

るべきにてあらざれば。信田殿ばかり御供にて。涙と共に出で給ふ。今日出でて又歸るべき道だにも。別れといへば物憂きに。今日出でてのその後に。かへらんこともな。甲斐の國に聞えたる。板垣の里と云ふ所に。尋ぬべき人有つて。彼の里迄は落ち行き給へど。尋ぬべき人も跡なくなる。何はに付てたよりなし。今は何處へ行くべきぞ。名は板垣と聞きけれど。風も溜らぬ破屋に。宿借りてこそおはしけれ。珍しからぬ申し事なれども。賴もしきは弓取の郎黨なり。信田の先祖の郎黨に。さつ島兵衞と。八田の太郎。この人々を先として。以上十七人が後を慕ひ申す。板垣の里に參り。君を見付け奉り。嬉し

と云ふも中々に、申すに及ばざりけり。さて〳〵如何あるべきと内議評定とりどりなり。その中に取つても。さつ島兵衛申しけるは。我等が先祖のさつ島大輔。郎黨主君の契約を申し。君も我等も三代なり。承平の合戰始まつて數度の戰ひ有りしかども。終に不覺を搔かざりしに。君も若に御座ある。我等も若き者なれば。小山殿に卑まれ。無二の本領横領して。追ひ出し申す無念さよ。何時迄斯くて怺ふべき。敵は大勢なれども。無勢でうかがふ謀。夜討に若くはよもあらじ。素より我等案内者。隙をうかがひ忍び入り。三方よりも火を懸け。一方よりも切つて入り。千騎萬騎が中なりとも。思ふ敵は只一人小山と組まんずる事どもは。何の仔細の有るべきと。早手に

取る様にぞ。工みける。その中に取つても。といたの太郎がこれを聞き。是こそよからぬ詮議なれ。理を持ちながらの荒詮議。は思ひも寄らぬ事にて候。再三つがうた沙汰にてなし。一問答二問答。三問答つがひ負け。終つたる沙汰をだにも。つるは沙汰の法。ましてや一度もせざらぬ沙汰を。敵方支へぬその先に。むぐうに申し直して。給はる所の安堵なり。あれは正しき他姓。是は相馬の御子とは。世に隱れもましまさず。例へば證文彼方にありと盗み取られしあよけんを立て。などかは取つて返さざらんと。理非をすまひて云ひければ。尤も此の儀に同ずるとて。御臺所と信田殿を。あう具して都へ上りけり。包むとすれどこ

の事を小山の太郎傳へ聞き。恩を知らぬものは只木石の如し。憐をなして助け置きたれば。敵となるこそ安からね。上せ立ててはは叶ふまじ。急ぎ道にて追つ詰め。討てやとて。屈竟の兵共を。七十餘人差遣す。斯かりける處に。小島の五郎進み出て申しけるは。是はよからぬ御諚かな討つては國に隱れあるまじい。理が無ければこそ討つたれとて。本領をば召さるべし。所詮昔が今に至る迄神佛に申す事の忽ち叶ふ習ひの候へば。鹿島へ使者を立て。神主を召し寄せて。調伏の法を行はせて御覽ぜよと申す。小山實にもと思ひ。鹿島へ使者を立て。神主急ぎ請じ寄せ。何時よりもきらめいて。忠を盡して遇しけり。酒も三獻と見えし時。沙金百兩。良き馬に鞍置いて引つ

立てたり。神主悅喜の色見えて。そぞろき勇む風情なり。今はと心安くして。邊の人を遠々と退け。信田を調伏すべき由を。一圓に賴む。神主氣色變つて。あら思ひも寄らぬ御諚かな。我等は鹿島の社人とし。天長地久。御願圓滿。息災延命と。祈るより外別に秘術は候はず。殊更人を調伏すべき事は。中々冥の知見も恐ろしう候。さんべき程の高僧へ。仰せ付けられ候へとて。立つて逃げんとする。小山この由見るよりも。袂を取つて引つ止め。扨ては御邊は。敵方と一所の人や。一期浮沈の身の大事を。有の儘に語らせて。賴まるまじきとは何事ぞ。力及ばぬ汝をば。得こそは歸すまじけれと。既に討たんとしたりければ。詮方盡きて神主も。あう早や。事諾けをぞ。

したりける。俄の事にて有る間。吉日撰ぶ迄もなし。一所を淨め壇を立てて。本尊を安置したりけり。調伏の壇の次第は。恐ろしくぞ見えたり。四面の壇を飾つて。ほうひやうにぼけの花。にうをくに山卯木。しやすいの水の井守の血。供御には羊のいひを盛つて。せうかうつかう牛の骨。けまんにあせほの花を盛り。閼伽には白しやの水を垂れ。既に燈明には。ほそきの油を立てにけり。をんじき日々に變つた。初一日の本尊。地藏薩陀。南向。二日は觀音西向。三日は勢至東向。四日は阿彌陀北向。五日は軍荼利降三世。六日は既に金剛夜叉。第七日に當る日は。中尊不動明王責めに責めてぞ祈りける。されども道理無きにより。その驗見えざれば。行者面目

失ひて。二七日ぞ加持しける。是にも驗見えざれば。いやをんころ〳〵せんだるしやな。まかるしやなとぞ責めにける。珠數の緒疲れ切れければ。五鈷を以て膝を叩き三鈷をもつて胸を叩き。獨鈷をもつて頭を打ち。頂を打ち破り。頂上よりあへける血をば。不動の利劍に押し塗つて。これを調伏人の身血なりと。觀念して天地を動かし責めければ。餘りに强く責められて。五大尊は震動し。降三世は獨鈷を振る。金剛夜叉は。矛を使ふ。大威德の乘牛が。角を振つて吼えたりけり。中尊不動の劍の先に。生血付いて見えしが。一法は成就したりとて。壇を破りて出でたりけり。

ああら痛はしや信田殿。是をば夢にも知ろし召されず。

母御臺の御供を召され。明けぬ暮れぬと上らせ給ふ。日數やう〳〵重り。尾張の國に聞えたる。黒田の宿に着かせ給ふ。調伏限りあるにより。信田殿には負はずして。母御臺に負ひ給ふ事の痛はしさよ。されども上らで叶はぬ道。惱みながらも上らせ給ふ。日數やう〳〵重り。近江の國に聞えたる。番場の宿に着かせ給ふ。肢體日々に衰へ。今は行歩も叶はねば。四五日逗留し給へり。信田殿を始め申し。十一人の人々も。後や枕に立ち寄りて。如何はせんと歎けども。終には叶はぬ生死の道。朝の露と消え給ふ。哀と云ふも餘りあり。信田殿の御歎き。譬を取るに例なし。誰とても無常は免れ難けれど。斯かる哀は稀なるべし。扨てあるべきにあらざれば。無縁の人

を語らひて。煙となすぞ哀なる。十一人の人々は。一つ心に申す樣。信田殿の御果報は爰までなりと覺えたり。何時迄附き添ひ奉り。京よ田舍と辛苦せん。また餘の人を頼まばこそ。弓箭の疵ともなるべけれ。是を菩提の智識とし。世を遁れんと思ふとて。忍び〳〵に元結切り。睡み給へる信田殿の。枕上に取り置いて。暇請ひをも申したけれども。さこそは慕はせ給ふべき。忍び音泣いて。出でて行く。流石多年の御昵み。賴みし君にてましませば。名殘の惜さは限なし。されども思ひ切りつつ。別れ別れになりにけり。天明くれば信田殿。御目を醒させ給ひて。誰かある。歎きても叶ふべきか。急ぐ旅にはあらずや。急げ〳〵と仰

せけれども。御返事申すものもなし。こは如何にと思召し。かつぱと起きさせ給ひ。邊を御覽有りければ。ああら何ともなや。十一人の人々のたぶさ許りぞ殘りける。信田殿御覽じて。情無のものどもや。とても浮世を厭はば。など諸共に連れ行かで。年にも足らぬ我一人を。捨てて何處へ行きけるぞと。諄き歎き給へども。その驗もましまさず。腹を切らんとし給ふ處へ。宿の亭主參り。事の仔細を伺ひ申すに。始終の事どもを。委しく語り給ふ。亭主承り。やあ斯程の道理を持ちながら。などや都へ御上りあつて。御沙汰はなきぞと申せども。供人一人もあらばこそ。浮世にありて詮もなし。不思議に尋ぬる者あらば。斯くなりつると語れとて。念佛申し刀を拔き。

既に自害と見え給ふ。亭主餘りの痛はしさに。御刀に縋りつき。都迄の御供をば。この男が申すべし。自害を止め給へとよ。命を全う持つ龜は。蓬萊に逢ふと傳へたり。つらき人の果をも。生きてぞ見果て給ふべき。死しては何の曲有るべきと。止め申したりければ。御自害は止まりけり。明くれば亭主御供して。都へとてぞ上りける。五條に宿を取つて置き。沙汰の法をば申し敎へて。亭主は暇賜はりて。番場の宿に下りけり。信田殿只一人。都に止まり給へども。羽拔けの鴨の水涙に。浮かれて立たぬ風情し。片輪車の中々に。遣る方もなきごとくにて。都に日をば送れども。定むる旨もましまさず。田舍の緣を傳へねば長在京も叶はずし。たより

も無うておはします。信田殿心に思召す。叶はぬ事を案ずるは。却つて愚痴の至なり。我常陸の國に下り。姉御を頼み居るならば。成人の後。便隙を覗ひ。小山を一刀恨みん事。何の仔細のあるべきと。思召されける間。珍からぬ信田へは。またこそ下り給ひけれ。限あらば。我こそ人を扶持すべけれども。時世に從ふ習とて。姉婿殿を頼み。門の邊に佇んで。物申さんとありしかば。人を出して誰そと問ふ。苦しうも候はず。信田にて候。萬事は頼み奉る。降參せんと有りしかば。小山この由を聞くよりも。あう尤斯うこそ有るべけれ。内へと申したけれども所存の程を察し申したり。便隙を覗び。一刀恨みん爲來り給へる心の裡をば。鏡に懸けて覺えたり。抑へて

討ちたけれども。降人の法なれば。助け申す。遠き國の知らぬ里へ。とつく落ち行き給へ。片時も國にましく て。我ばし怨み給ふなと。遙々下るしるしもなく。門より内へ入れざるは。いとど無念ぞ增りける。

ああら痛はしや信田殿。偶近くめぐり來て。父の御墓を今ならでは。何時の世にかは拜むべきと。御墓に詣り給ひ草木の花を摘み手向け。か程に果報拙き身を。一つ蓮の臺に。迎へ取らせ給はで。浮世に殘し給ふ事よと。諄き歎き給へども。亡靈なれば土窟より。御聲出づることもなし。さくくとしたる風の音。松に吟ずるばかりなり。茫々としたる草の露に。裾も袂も打ちしほれ。盡きせぬ物は涙なり。斯くて信田殿御墓を下向有りける處に。

太刀脇挾んだる男の。編笠深々と引つ被うたるが。怪き様に參り逢ふ。誰なるらんと御覽ずれば。是は別れて年久しき。浮島太夫なりけり。かねては知らざる住吉の。まつとしなれば喜びを。引き合せぬる幸とて。具して河内へ歸り。五人の子供を近付け。これ〳〵拜み申せ。この程汝等が戀ひ奉りしに。諸天の惠の有るに因り。不慮に參り逢ふ事は。一眼の龜の偶然に。浮木に逢へる如し。定めて十日許りには包むとも披露あるべし。この山里と申すは。昔よりよき城郭。如何に仇が攻むるとも。たやすく落つべしとも覺えず。汝等に軍をさせ。時々見て目醒いて。歳を送り居んずる程に。都へこの事洩れ聞え。國の亂は何事ぞと。上の便立つならば。取り續け追訴を

立て。悅の沙汰を究むべし。今こそ石のせいなりとも。終には國を治むべし。やあ俄に惶てては何かせん。谷々峰々尾續き共を。人夫揃へて堀り切らせよ。はしりどうづき弩。此處彼處の詰り〳〵に。張り懸けさせよ。篝を焚かせよ。垣楯を搔き。打ち解け居るなと下知すれば。子供斜に喜うで。迚も消ゆべき露の身を。君故死なん嬉やと。喜び勇むぞ賴もしき。包むとすれどこの事を。小山の太郎傳へ聞き。さては先祖の郎黨に。浮島が賴まれけるか。方々引き合ひ募りては。事の大事たるべし。未だ力の無き先に。早や寄せよと下知をする。承ると申して。小山がしつじ（執事）横よすが。大將にて。ここを前途と戰ひけれども。大勢討たせて引つ返す。扨ては自身向はで

は叶ふべからずと。小山殿の向はれける間。常陸下總兩國に。殘る兵は一人も無し。城にもここを前途と戰ひけれども。實には寄手は。國が一つになつて。谷をも。峰をも。平地に道を作らせ。新手を入れ換へ攻めければ。さのみは爭で怵ふべきぞや。二三の城戸をも打ち破られ。詰めの城にぞ籠りける。浮島太夫申しけるは。それ人の命をたばう合戰は事に寄るぞ。子供は無きか討死をせよ。心安く腹切らんと云ふ儘に。例の大弓取り出だし。張り代へ數多持たせ。矢櫃三合かかせ。追手の櫓に趨り上つて。如何にや女房此方へ來て。間引いて賜べ。軍して見せんと有りし時。女房生年五十六。糟尾なる髪を唐輪にあげ。薄絹被き櫓に上り。何とて子供が軍はこだれて今

迄遲いぞと。頻に力を付けられて。はや浮島太郎驅け出づる。その日を最期と思へば。龍を縫うたる直垂に。鬼形摺つたる左右の小手。白檀磨の脛當。熊の皮の揉足袋。白銀にて緣金渡し。踵高に踏こうたり。獅子に牡丹の脇楯し。糸緋縅の鎧の。巳の時と輝くを。草摺長にさつくと着。ゆつて上帶丁と締め。九寸五分の鎧通を。馬手の脇に指いたりけり。一尺八寸の打刀を。十文字に指す儘に。三尺八寸候ひし。赤銅造りの太刀佩いて。四十二指いたる高うずべうを。斜高に取つて着け。同じ毛の五枚胄に獅子形打つて猪頸に着。白綾の母衣颯と懸け。塗籠の弓の四人張。せめのせき弦懸けさせ。眞中握り横たへて。さんのへだちの白葦毛。ななき八分明け六歳。金覆

輪の鞍置かせ。弓杖に縋りゆらりと乘り。堀の端側に。駒を据ゆる。兄弟五人の者共。思ひ〳〵の具足を着。心々の馬に乘り。互に手綱を取り違へ。やあ驅けう驅けじと。したりしを。敵味方が是を見て。天晴武者の勢哉と。譽めぬ人こそなかりけれ。父の太輔櫓の上にて熟々見て。あれ〳〵女房御覽ぜよ。何れも器量は劣ぬよ喃。あつたら子供を世に在らせで。所領の主ともなさずして。只今殺さん惜しさよな。早死ね子供。左は云ひながら今を限の事なれば。ま一度此方へ顏見せよ。誰も名殘は惜しいぞと。さしもに剛なる太輔殿。はら〳〵とぞ泣きにける。女房が是を聞きから〳〵と打ち笑ひ。老に惚れたか太夫殿。わかれた今の泣言哉。泣いても叶ふべき道かや。如

何にや子供軍は。流石に大事の物。心の剛なる許りにて。兵法知らで叶はず。味方無勢にありながら。敵の陣へ懸かるには。すきのさきとかりやかた。魚鱗。鶴翼兩陣なり魚鱗といへる駈足は。魚の鱗を學べり。鶴翼といへるは。鶴の翼を表したり。駒の手綱をあらひては。敵がむぐうに斬られぬぞ。向ふ敵斬る時は。蹶上げの鞭を丁と打つて。おもてがへしの手綱をすくひ。拜斬に斬り捨てよ弓手へ廻る敵をば。隅の手綱をきつと引き。さうかうの鞭を打つて斬れ。妻手へ廻る敵をば。太刀の柄を反して。さわらの鞭を打つて斬れ。翁も姥も是にて。見るぞ。棧敷の前の晴戰ぞ。不覺を搔くなや子供とて。可笑しき事は無けれども。子供に力を付けんが爲。間の板を打ち

叩き。から〳〵と笑ひけり。いとど逸りた子供が。父にも母にもいさめられ。お聲を出いて驅け出づる。前の河原はあしひき習ひ傳へし。手綱の秘事敎置かれし鞭の曲。むぐうに馬を乘り連れて。驅けては颯と引いて見れば。前の河原の石よりも。多きは死人なりけり。取つて反し颯とは驅け。五六度迄戰うたり。女房御覽じて。子供が戰の面白きに。後詰して取らせんとて。被ぎた衣を颯と下せば。下は武者に出で立つたり。紅の袴の下に。膝鎧に脛當し。萌黃匂の鎧着。丈なる髮を唐輪に上げ。太輔が好みし黃楊の棒を暫貸せとて打ちかたげ。追手の木戸を開かせ。堀の端側に駒をする。大音上げて名乘る樣。如何にや小山の人々。我をば誰と思ふぞ。陽成院より三

代。綱賴光に五代なり。渡邊黨に大將軍。みだのけんじが娘にみた夜叉女とは自なり。年は生年五十六二つと無き命をば。信田の御れうに奉るぞ。我と思はん人々。驅けよ手並を見せんと。冑を取つて打ち着つつ。既に驅けんとしたりけり。

浮島太輔櫓の上にて。熟々見て。子供が心の剛なるも道理。母が心の剛なれば。斯程なる者共が。親子兄弟夫婦となつて。寄り合ひけるこそ。不思議なれ。如何にや御れう御出有つて。女軍を御覽ぜよ。例少き事なりと。信田殿を櫓へ請じ申し。委しく見奉り將門の御眼に。瞳が二つまし〳〵て。坂東八箇國の王とならせ給ひしが。君にも弓手の御眼に。瞳が。二つましませば。王位までこそ

おはせずとも。必ず坂東八箇國の主とはならせ給ふべし。たとへ我等討死仕るとも。君は命を全うして。二十五までは御待ち候へ。必ず二十五にて。御代に立たせ給ふべし。我にもそれが思はれて。子供が命も惜しけれど。當座の恥を搔かじ爲。皆討死を仕る。翁と姥と討死せば。御身は敵に生捕れて。小山が館に年を經て。喜の御世を待ち給へ。暇申して我君とて。櫓をゆらりと飛んで下り。一枚まぜの大あらめ。袖をば釋いてからと捨て。胴許りゆり懸けたり。其の日最期の打物に。とう地が打つたる長刀の。四尺八寸有りけるを。柄をば三尺五寸に拵へ。ひたつに金を延べ付けたり。まちとこの柄長うして。かすやを取らんと。二尺許りさし下げ。ふつつと捻ぢ切り

投げ捨て。手頃にまはいて振つて見て。天晴かねやと打ち點頭き。南無三寶味氣なや。如何程の者が切られて。妻子に物を思はせん。喃女房と語る。夫婦共に駒の手綱を搔い繰つて。敵の中へ駈けて入る。面を合する者は無し。棒を使ふ兵法に。しばなぎ石突拂打。木の葉反水車。馬人嫌はず打ち伏する。長刀使ふ兵法に。浪の腰切稻妻切。車反。やる刀。女房打ち通れば。太輔後より切りめぐる。先に子供驅くれば。父母跡より驅けにけり。物によく〳〵譬ふれば。天竺しうの戰に。歩兵が先に懸かれば。王ぎやう角行驅け合する。金銀桂馬懸かる時。太子も懸かり給ひけり。この戰の兵法を。將棊の盤に作れるも。あうこれには爭で勝るべき。浮島太輔が長刀を。怺

へず三つに打ち折れば。大手を擴げて驅け合せ。捻首。筒拔。人礫。空竹割に引つ裂いたり。昨日今日とは思へ共。二年三月の合戰なり。この戰は。夜日七日。打たる者は數知らず。子供も五人と申せども。此處や彼處に押し隔て。一人も殘らず討たれけり。太輔夫婦許りなり。左のみに罪を作つては。未來の業となるべきなり。勝ちもせぬ物故。勇むはこせと申して。互に刀を拔き持つて。刺し違へて死んだるを。惜まぬ者はなかりけり。去る間信田殿が浮島。遺言は。去る事なれども。夫婦討死する上。何に命をたばふべきと。自害をせんとし給ふ處へ。小山が郎黨參り。まさなき君の御自害哉。此方へ御入り候へとて。生捕り申して出づる。小山この由を見

るよりも。されば人の果報のある時は。只何事も心に任せけるぞや。なほ助け置くならば。末の代とても煩ひたり。去りながら白晝に。頭を刎ねん事は。天下の聞こえも然るべからず。夕去りの夜半に。内海に沈めよとて。相馬重代の家人。千原太輔に仰せ付くる。かの千原と申すは。相馬殿の御内に。年比召使はれし者なれども。時代に從ふ習とて。小山殿に仕へ申し。信田殿預り奉り。大事の囚人これなり。若し失ひや申さんと。縛めたりしその上を。重ねて强く縛め。奥深に押し籠め申し。更け行く夜半を。待ちたりしは。羊の歩の近付くも。斯くやと思ひ知られたり。姉子この由を聞召し。無慘やな信田は。今を限にて有りけるぞや。淺ましや自。夫の心と一つに

し斯く。爲すよとやおぼすらんに。最期を一目見んとて。人靜まりて夜半に。千原が方へ御出有り。信田殿に付いたりし。數々の繩を御覽じて。あら怨めしの事共や。自にも付けずして。など信田殿ばかりに付けけるぞや。何とて物をば仰せなきぞ。恨の心にてましますか。日の本にあらゆる神も知ろしめせ。後暗き事はなしと。かきくどき宣へば。信田殿聞召されて。恨むる所存は無けれども。涙に暮れて詞無し。迚も我が身は果報無く。今を限の事なれば。斯樣に憧れ出で給ひ。小山が方へ洩れ聞こえ。重ねて憂目を見給ふな。御歸り有れと有りしかば。姉子この由聞召し。假令小山に洩れ聞こえ。同じ淵に沈むとも。怨みとは更に思ふまじ。斯樣にならせ給ふ事。

只これ故の事なれば。憂き物持ちて參りたり。御覽ぜよと仰あり。袂より卷物を取り出だして賜びにけり。信田殿開いて見給ふに。本領のちけんまるかし。是れは家に傳はるべき。重寶にて候へば。持ちては何の益あらん。取つて御歸りましませや。姉子この由聞召し。夫れは去る事なれども。假令御身死したりと。閻魔の廳の出仕の時。くしやうしんの御前にて。捧げ給ふ物ならば。道理限りあるにより。など一向の罪科の。浮みのがれで有るべきぞ。只持ち給へと有りし時。取りてぞ持たせ給ひける。さてしもあられぬ憂き身にて。名殘の袂ひきさけて。姉子は歸り給ひけり。夜更けければ小山より。使を立て。信田をば沈めてあり

けるか。夙く沈めよと有りしかば。千原力無うして。小舟一艘拵へ。信田殿を乗せ申し。沖を指して漕ぎ出で。爰にてや沈めん。彼處にてや沈め申さんと。さすがに沈め兼ねつつ。浮かれて暫漂へり。あら味氣なや世の中に。すまじき物は宮仕へ。我れ奉公の身ならずば。斯かる憂目によも遭はじ。昔は相馬に仕へ申し。この君を主君と仰ぎしその時は。月とも日とも思はずや。山嶽よりも高き恩。芝蘭よりも香ばしく。付き添ひ廻り申せしが。何時その程に引き換へて。移れば變る身の憂さは。我が手に懸けて沈めなば。草の蔭にて相馬殿。左こそ悪しと思すらん。縦へこの事洩れ聞こえて。明日は淵に沈むとも。一旦この君を落さばやと思ひて。唯今こそ御最期よ。念

佛を勸むれば。手を合せ。高らかに高聲念佛を申さるる。千原もともに申し。腰の刀を引ん拔て。繩散々に切て捨て。沈め石ばかりをば。だんぶと打ち入れ。南無三寶今が見果てと高く云ひ。沈めた體にもてなし。助けて陸に戻りけり。これや始皇の御時に。燕丹が古郷に歸りしも。斯くやと思ひ知られてあり。明くれば人目繁しとて。夜の間に送り奉り。曉懸けて千原は。我が宿路へぞ歸りける。天明ければ。小山より。御使立ち。千原御前に畏まる。汝は信田をば沈めてありけるか。なか〳〵御尋ね迄も候はず。沈め申して候。それ程沈めけるには。などその時の。檢見をば乞はぬぞ。あうやがて心得たり。汝は相馬重代の家人。如何樣心變りをして。落しぬると覺

うるなり。只問はんにはよも落ちじ。あれ拷問して問へ。承ると申して。あらけなき武士共が。一度に座敷をはらりと立ち。無惨やな千原を。取つて伏せ宙に擧げ。七十餘度の拷問は。目も當てられぬ次第なり。五體身分切れ損じ。餘り苦痛の有る時は。しや落ちばやと思ひしが。待て暫我が心。千原は入日の如くなり。信田殿を喩ふれば。出づる日蕾む花なれや。餘命をいふとも限りあり。代れや命とて。如何に問へども落ちざりけり。水火の責を當てて問ふ。これにも更に落ちざれば。枯木よりも繩を下げ。擧ぐる時には。息絶えて。下せば少し蘇る。七日七夜は隙もなく。新手を入れ代へ責めければ。左のみは如何で怺ふべき。朝の露と消えにけり。小山大きに怒

つて。妻子は無きか召し出だして。重ねて問へ。承ると申して。二人の若母諸共に。引き据ゆる。小山殿御覽じて。夫が云ひし事を知らぬ事はあるまじい。有りの儘に申せ。偽る氣色のあらば。頓て夫が如くなすべしと。大きに怒り給へば。女房ちつとも。憂へたる氣色も無く。譬へば微塵になされ申すとも。知らぬ事をば申すまじ。ありし夜の曉。只今沈め申しに行くとて。小舟一艘拵へ。信田殿を乘せ奉り。沖を指して漕ぎ出づる。自餘り痛はしさに。急ぎ濱に下り。事の體を聞き候に。信田殿の御聲にて。高聲念佛し給へば。千原も共に申し。だんぶと物の鳴つてより。その後は音もせず。迚も斯樣に失はれ申す命を。などや信田殿の御命に代り申して。一先落し

申さぬぞや。これ僞りと思召さば。邊の浦人を召して。御尋ねあれと申す。さらば召せとて。數多を召して尋ねられけるに。その夜の沖の體。何事ありとは存ぜねども。皆この體と答ふる。さては沈めて有りける物を。不便に千原を問ひけりとて。妻子を歸し給ひけり。

去る間信田殿。猶も都の戀ひしくて。明けぬ暮れぬと上らせ給ふ。日數やう〳〵重なり。近江の國に聞こえたる大津の浦に着かせ給ふ。門並こそ多きに。人を拐へて賣る。辻の藤太が許に。宿かりそめに御泊りある。藤太は信田の殿を拐へて。賣らん爲。終夜拵へたり。御年も未だ若に御座有る。人の。何處より何方へ御通り有るぞ。と申せば。信田殿聞召されて。これは坂東方よりも。都

へ上る者にて候。藤太承り。や歩行の御歩きの痛はしさよ。都迄の御供をば。この男が申さんと。瘠せたる馬に鞍を置き。我が身も共にぞ出で立ちける。信田殿心に思召す。先の上りの時は。番場の宿より送られしが。されば都邊は。人の志の深かりけりと。明日の歎をば知らずして。送られ京へ上らせ給ふ。不案内の御事なれば。やがて御宿をもひけい申さんと。五條に行き。馬喰座の人商人の總領。わう三郎にいひ語り。駒一疋に換へ取りて。藤太は國に下る。わう三郎が許よりも。鳥羽の船渡へ賣る。それよりも津の國の。堺の濱へぞ賣りにける。四國西國を賣り廻る。信田殿心に思召す。けうがる者に行き逢ひて。知らぬ浦々を見つる哉と。思召し。後には北陸

道の灘を賣られさせ給ふ。若狹の小濱。越前の敦賀。三國の湊。加賀の國に聞えたる。宮の越へぞ賣りにける。物の哀れは多けれども。宮の越にて。止めたり。折節春の事なるに。賤が仕業を敎へて。田を打てと責めければ。鍬といへる物を持ち。小田の原へは出で給へど。打つべき樣はましまさず。彼の三皇の古は。しんの皇帝忝く。自鋤を擔ひて。その一頃の田を耕し。五穀の種子を蒔きしかば。しんのうかんのう目出度し。尺のほたけも長かりき。それは監王聖主にて。國を哺む道理なり。彼の信田殿の農業は。涙の種を蒔くやらん。野にも山にもたつた姫。さほの林にひれ伏して。泣くより外の事は無し。これを見る人々が。いたづらものと申して。隣の里隣國

に。買はんと云へるものは無し。もてあつかうて信田殿を追ひ出だし奉る。哀れと餘所に白雲の。立ち出でぬれば天の原。身は中空に鳴る神の。とどろ〳〵と歩めど。留り定めぬ浮かれ鳥。啼く音に人の驚き。明けぬるかどを杉の下。道ある方に迷ひ行く。身は饑人となる儘。袂に物を乞ひ食ひ。草葉にかかる命をば。露の宿にや置きぬらん。定むる方の無き儘に。足に任せて行く程に。能登の國に聞えたる。おやの湊に着かれけり。折節おやの湊へは。夜盗が寄せ來るべしとて。門々門を切り塞ぎ。用心嚴しかりけり。斯かると知ろし召されねば。世に無し者の浮かれたるに。慈悲ましませと有りしかば。内よりも尉一人立ち出で。ああら恐ろしやこの程。

待ちたりし盗人の。けこ見こそ來つたれ。あれ寄つて打ち殺せ。若者共と下知をする。折節有り合ふ若者共。櫓櫂の。折れ。やすの柄を。提げ〳〵。左樣なる。痴者は。何處の程に候と。信田殿を打ち伏せ申す。あら痛はしや。助かり難く見えさせ給ふ。かの浦の。とねの女房は。情ありける者にて。痛はしやこの人は。世に捨てらるる人の子の。親の行方を尋ね兼ね。斯かる遠國波島まで。來りたると覺うるなり。まつぴら我れに賜べと有りしかば。若き者共承り。女房の仰なりとも。承る事もあるべし。又承らぬ事もあり有らうず。この事においては。思ひも寄らぬ事なりと。ひた打ちにぞ打ちにける。女房餘り悲しさに。酒をもらうぞ助けよ。酒とだにも聞きければ。

大人しきから童迄。杖を捨ててぞ。退きにける。斯くて信田殿を。我が宿に請じ申し。善きにいたはり奉る。古程はなけれども。形も少し直らせ給ふ遙か。奥陸奥の國。外の濱に鹽商人の有りけるが。年々鹽を商ひて。彼の浦へ船を乘る。問はとねの許なれば。信田殿を見參らせ。これなる童を我れに賜べと云ふ儘に。おさへて鹽に換へ取り。船に取つて打ち乘せ申し。十八日と申すには。外の濱にぞ上りける。かの商人は情も更に無き者にて。一兩日も過ぎざるに。やあこの邊に住む者は。鹽を燒かでは身を過ぎぬぞ。鹽燒き給へ客人と。鹽木を樵らせ鹽竈の。火を焚かするぞ物憂けれ。つらき中にも慰むは。鹽屋の煙一むすび。末は霞に消え匂ひて。行衛の程も白浪

の。よる〳〵袖を絞らして。常陸の國の戀ひしさは。いとど日々にぞ增さりける。

秋も半の事なるに。かの浦の領主。鹽路の庄司といつし人。濱出して。通夜月を詠めて遊ばれしが。信田殿を御覽じて。爰に鹽燒く童の目の內の賢さよ。見入りなんどの尋常さよ。如何樣にも太夫は。世にある人を拐へ來りたると覺うるなり。我が子にせんと宣ひて。押してばう(暴)て取り。嫡孫と號し。斯くて元服をさせ申し。鹽路の小太郎と申して。上から下に至る迄。渴仰せぬはなかりけり。斯かりし時の折節。國司國に下り給ひ。たがの鄕(多賀)に着かせ給ふ。在廳御家人馳せ集まり。日番當番を勤むる。國司の御諚には。我れ常陸の國に有りし時。相馬となひ

きがちんじに因り。兩方絕えて年久しし。それも座敷の論。盃の獻杯。定め無かりしに因つて。詮無き事もありしぞかし。國司在國の間に。座敷の樣をも定めんとて。左はかつたの太夫。右は柴田の庄司。總べて座敷十三流。人數彼れ是れ三百餘人。曇りたる物を着けざれば。晴れがましさは限りなし。その中に鹽路の庄司殿。我が身老體なる間。養子の嫡孫信田殿を出し給ふ。並びの在廳これを見て。叶ふまじいと支ふる。國司よりの御諚には。何として鹽路は自身參らぬぞ。上を輕くする故か。その儀にて有るならば。鹽路の本領悉く召し上ぐべしとの御諚なり。信田殿聞こし召されて。名乘らばやと思召すが。いや〳〵國廣き所にて。小山が內緣一族の。ありもやせ

んと思召し。名乘り兼ねてましますが。只今名乘らずば。養子の父母の恥と云ひ。座敷を立たんも無念なり。名乘らばやと思召し。系圖を取り出だして。國司の前に捧げらるる。國司この由御覽じて。何々葛原親王よりも六代の後胤。將門の御孫相馬の實子。信田の小太郎某と。氏文けいしよなる間。五十四郡がその内には。これに增したる俗姓なしと。國司の對座許され申し。直り給ふぞ目出度き。既に御酒宴七日と聞こえけり。在廳御家人暇を申して。屋形〳〵に歸らるる。その中に信田殿も。暇を乞うて歸らるる。國司御覽じて。あら痛はしし痛はしし。奥州の國司を。三年が間奉る。その間に國司は。都へ上つて。安堵を申して參らせんとて。國司都へ上らるる。

去る程に信田殿昨日迄は鹽を燒き。憂き身を焦し給ひしが。今日は何時しか引き換へて。五十四郡の主となり。國を平げ給ひけり。

去る間常陸の國に候ひける。小山の太郎行重は。榮花榮えて極もなし。頃は七月七日とて。上下萬民寶物を揃へて。七夕にかす習ひ。小山殿も金銀綾羅數の寶を揃へて。何に尋ねれともなし。中に信田玉造のちけん。卷物を。如らず。御身の盜み取つて。他の寶となしたると。覺うるなり。斯かる後暗き人を。賴みて何の益あらん。早々御出で候へと。痛はしや姫君を追ひ出し奉る。あら痛はしや姫君。素よりも斯く有るべきと期したれば。始めて騷

ぐに及ばずと。乳母ばかりを引き具して。小山が館を出でさせ給ふ。淺ましや自。誰を頼みて今更。何處へとてか迷ふべき。信田殿が身を入れし。内海に沈まんとて。濱路へ下らせ給ひけり。千原が後家參りて申す。喃如何に姫君。痛うな御歎き候ひそ。信田殿の御命には。夫の千原が代り申して候ぞ。數々の文共を。止め置かせ給へども。參らせ上る事もなし。これ〳〵御覽候へとて。有りし昔の文共を。姉子の御手に參らせ上る。姉子この由を御覽じて。ああら嬉しや信田殿は。未だ浮世に有りけるぞや。叶はぬ迄も沙汰の爲。都へこそ上りつらめ。いざや乳母これよりも。都へ上り尋ねん。去りながら斯くて都へ上るならば。よし無き仇名や立ちなんと。丈と等

き御髪を。剃りおとし給ひけり。乳母も聽て。同じ姿に様を變へ。濃き墨染に身を窶し。都へ上り給ひけり。名所舊蹟を眺め越させ給ひつつ。三十五日と申すに。都へ着かせ給ひけり。西東の京を尋ねれど。その行方もなかりけり。清水に參りて。南無大悲觀世音。萬の佛の願よりも千手の誓ひは頼もしや。今一度信田殿に合せて賜ばせ給へやと。祈誓深くぞ申さるる。熊野の堂を尋ねんと。南海道に指しかかり。天王寺。住吉。根來。粉川を打ち過ぎて。熊野に參りて三の山。心靜に伏し拜み。尋ね給へと行方なし。四國九國を尋ねんと。道者船に便船乞うて。四國に渡り淡路島も。心しづかに尋ねけり。筑紫下りの道すがら。長門のこう。赤間が關。葦屋の山崎博多

の津。しかの島迄尋ぬれど。その行方もなかりけり。名古屋を出でて瀬戸を行き。平戸の大島松浦彌勒寺。賤の里くわんき。五島島。硫黄が島も。近くなる。壹岐のもとをり通るにぞ。消ゆるばかりの我が心。日向の國に土佐の島。きの里にあわ島。豐後豐前をさし過ぎて。肥後の國に聞こえたる。おどりたうの山を越え。こいはし牛の水阿蘇の。嶽を越え過ぎて。筑前の國にいきの里。遠國波島に至る迄。名所は盡きぬ物なり。信田の小太郎某と。問へど答ふる者は無し。筑紫のうちに曇りなし。いざや乳母これよりも。都へ上り尋ねんと。周防の國にさしかかり。おおちの郡朝倉や。極樂市と聞くからに。立ち止まりてぞ尋ねける。播磨の國に入りぬれば。赤松河

原ゆひの宿。高田の渡りやのの宿。名所舊跡を眺め越させ給ひて。さかひの松に出でさせ給ふ。さう田の森。からす崎。ひとまつが岡を尋ぬれど。その行方もなかりけり。須磨の浦蓮の池と。聞くからに同じ蓮に乗らばやな。兵庫に着けば湊川。すすめの松原打出の宿。こんやの伊丹手島の宿。太田の町や芥川。かうない山崎狐川。船に乘らねば陸嘆。月の宿るか桂川。浮世は車の輪の如く。環り來ぬれば九重の。九重の内に曇りなし。いざや乳母これよりも。もとの路にさしかかり。下らんとのたまひて。我れをば誰か松坂や。逢坂の關の清水に影見えて。今や引くらん望月の。駒の足音聞き馴るる。大津打出の濱よりも。志賀唐崎を見渡して。堅田の沖に引く網の。

目毎に脆き涙かな。　瀬田の唐橋遙々と。　尋ぬる人の俤を。寫しもやせん鏡山。　ゑちの川瀬の浪散りて。　裾は露。　袖は泪の隙よりも。　擂針山を。　越え行けば。荒れてなかなか優しきは。　不破の關屋の板間漏る。　月見垂氷の宿過ぎて。　植ゑし早苗の黑田こそ。　秋は鳴海と。　打ち眺め。　三河の國の八橋の。　蜘蛛手に物や思ふらん。　富士を何處と遠江。　戀を駿河の。　身の行末。　待宵の月も。　雲間を伊豆の國。　信田には何時か。　奥州迄。　三年三月がその間信田の小太郎某と。　問へど答ふる者は無し。　その年の文月半に奥州たがの郷に着かせ給ふ。　十四日盂蘭盆とて。　上下萬民慈悲を。　施す日なりけり。　信田殿も父母の。　孝養の爲に。　辻々に札を立て。　施行を

引かせ給ひしが。　比丘尼達を御覽じて。　あれ〳〵請し申せとて。　持佛堂に請じ申し。　よきにいたはり奉る。　あら痛はしや姫君。　終夜御經遊ばし。　曉方になりしかば。　囘向の鐘を打ち鳴らし。　御聲高く囘向ある。　この御經の功力に因つて。　一切衆生を悉く。　無上菩提とせうずべし。　殊には父相馬殿。　母御臺信田殿。　成佛得脫なし給へ。　その中に信田殿。　未だ浮世にあるならば。　この御經の十羅せつにょの功力に因り。　祈禱とならせ給ひ信田の小太郎に今一度。　逢はせ賜び給へ。　南無三寶〳〵と。　衣の袖を顔に當て。　脆きは今の涙なり。　信田殿も父母の孝養のその爲に。　持佛堂に御座あつて。　夜もすがら御經を遊ばせし。　囘向の聲を聞召し。　夢現とも辨へず。　間の障子を。

颯と明け。委しく見奉りしに。姉子のなりゆく姿なり。
する〳〵と走り寄り。御袂に縋りつき。これこそ信田の
小太郎にて候へとて。消え入る樣に泣き給ふ。姉子もこ
の事を。現と更に辨へず。さて如何に小太郎か。これこ
そ古の。千手の姫で候なれ。さて如何に珍らしや。憂き
時は道理かな。嬉しき今の何としてか。左のみ涙のこぼ
るらんと。睦ましげなる。御有樣。餘所の袂も濡れぬべ
し。信田殿仰せける樣は。斯程目出度き世の中に。何を
さしてか歎くべき。いざさせ給へ姉御前。常陸の國に打
ち越え。恨めしき小山が頭を刎ね。父相馬殿の御墓所に
掛け置き。會稽を雪ぎ候はん。尤然るべしとて。五十四
郡がその内に。屈竟の兵を三千餘騎揃へらるる。小山こ

の由を傳へ聞き。國に怺へ難うして。逃げて京へぞ上り
ける。
去る間國司は。安堵を申し給はつて。國に下り給ふ。小
山道にて參り合ふ。急ぎ駒より飛んで下り。この度の命
を。まつぴら助けて賜べと申す。やすき程の事とて。誑
り寄つて搦め取り。京づとと名付けて。信田殿に賜び給
ふ。信田殿斜ならずに思召し。武藏の國。つまこえの野
邊に引き据ゑ。首打ち落し給ひけり。朝の露と消えける
を。憎まぬ者はなかりけり。聽て信田殿上洛ましく〳〵て。
天下の御目に懸からるる。御門叡覽ましく〳〵て。坂東八
箇國を。信田殿に賜び給ふ。その序に近江の國とかや。
大津の浦を申し乞ひ。辻の藤太を搦め取り。十日に十の

爪をもぎ。二十日に二十のゆびをもいで。頸を引首にし給へり。唯人は情あれ。情は人の爲になし。終には我が身に報うと。憎まぬ者はなかりけり。番場の宿へ打ち越え。ましく て春草と小太郎が萌え出で候ぞ。嬉しきをもつらきをも。などかは感ぜざるべきと。をしまの町三百町番場の亭に賜びにけり。やがて御身は常陸の國へ下向あつて。信田の河内にて討死したりし。浮島太夫が子孫はないかと問ひ給ふ。太夫が孫は三人召し出し候ひ。三千町を賜びにけり。千原の後家若諸共に參れば。斜ならずに思召し。坂東八箇國の總政所を。若共に賜び給ふ。やがて御身は信田の郡に御所を立て。御年二十五にて。御世に立たせ給ひ非番當番勤めさせ。榮華に誇り給ひけ

り。姉子の比丘尼大方殿と申して。いつきかしづき給ひし。末繁昌と聞こえけり。

百合草若大臣

抑昔我が朝に嵯峨の帝の御時、左大臣きんみつと申して、その比ならびなき賢人一人おはします。然るにかのきんみつに御代を繼ぐべき御子なし。かくては如何あるべきと、大和の國に聞えたる泊瀬の寺に詣して、悲願つきせぬ觀音の利生を仰ぎ、申子をこそしたまひけれ。今に始めぬ觀音の願のしほも早や滿ちて、程なく御子儲け給ふ。しかも男子にておはします。夏の半の若なれば、花にもよそへて育てよとて、百合草若殿と名をつけ、いつきかしづき奉る。七歳にて御袴着、十三にて初冠を召し、四位の少將殿と申して、比びなうこ

そかしづきけれ。十七にて必ず右大臣になり給ふ。御童名によそへ百合草若大臣とも申す。三條壬生の大納言あきよりの卿の姫君を迎へとり奉り、鴛鴦比翼の語らひは淺からずこそ聞えけれ。

「かくて打過ぎ行く程に」、そもわが朝と申すは、國常立尊よりも始め、さて伊弉諾と伊弉册は、かの國に天降り、二柱の神となつて、第一に日を生み給ふ。伊勢の神明にて御座ある。その次に月を生む。葛野の丹生れ明神月讀命これなり。その次に海を生む。津の國に立ち給ふ蛭子の神子夷三郎殿にておはします。その次に神を生む。出雲の國素盞嗚は大社にておはします。その外末社のぶるいとうは皆この神の總社たり。「神の本地を佛とはよくも

知らざる言葉かな。根本地の神こそ佛とならせ給ひつつ、衆生を化導し給ふなれ」夫れはともあらばあれ。そもわが朝と申すは、はつかいよりはまさしく魔王の國とあるべきをしんみつから開き、佛法護持の國となす。大魔王他化自在天に腰をかけ、種々の方便めぐらして。如何にもして、わが朝を魔王の國となさんとたくむによりて、則ち天下に不思議多かりき。このたびの不思議には蒙國の蒙古が蜂起して攻め入るとこそ聞えけれ。國にあり合ふ弓取達防ぎ戰ひけれども、彼等が放す毒の箭は降る春雨の如くにて、四方鐵砲放しかけ、天地を動し攻めければ、叶ふべき樣あらずして、皆中國さして引き退く。去る間都には公卿詮議まち〳〵たり。そもわが

朝と申すは、國は粟散邊土にて、小さしとは申せども、神代よりも傳はれる三つの寶これあり。一つには神璽として第六天の魔王の印の判これあり。二つには內侍所とて、天照神の御鏡なり。三つには劍寶劍とて、出雲の國簸上の山の大蛇の尾よりも取りし靈劍なり。これ皆天下の重寶にて、代々の御世に、異國よりきうい起つて欺けども、神國たるによりつつ亡國となることもなし。今も天照大御神五十鈴川の末盡きず、伊勢へ奉幣たてまつり內侍所の御託宣によりつつ討手を遣すべしとて、諸社の奉幣臨時の神樂まゐらせ給ひけり。その中に取つても、內侍所の御託宣は忝うぞ聞えける。七つにならせ給ひし乙女が袖に託して、鈴ふりたてて神託あり。蒙古が向ふ日より

して、天下の神達高天原に集會して、軍評定とりどりなり。然りとは申せども、蒙古が大將りやうざうが。しよてうに放す毒の矢が、住吉の召されたる神馬の足に立つ。この疵愈さんそのために、神の軍を延べられたり。これによつてきういども力を得たりとて攻め入るなり。されども、彼等が振舞は風吹かぬ間の花なるべし。急ぎこの度凡夫の軍を早めよ。神も向はせ給ふべし。凡夫の軍の大將には左大臣の嫡男に百合草大臣を向くべきなり。彼の仁討手に向くならば。諸神合力まし〳〵て、金剛の力を添ゆべきなり。もし左もあつて下向せば鐵の弓箭を持つべきなり。遲くてこの事惡しかりなん。急げ〳〵と神託あつて神はあがらせ給ひけり。

神託なれば、左大臣きんみつ時の面目施し、御子の百合草大臣を召されて、下向せよとぞ仰せける。綸言と申し神託といひ、または武名なりければ、吉日を選んで都出とぞ聞えける。扨て神託に任せつつ、鐵の弓箭を持つべしと、一所を清め鍛冶屋とし、せい〳〵をつくして作り立つる。弓も箭も鐵なり。引いてかへるべからずと、人魚の油をさしにけり。弓の長さは八尺五寸まはりは六寸二分なり。矢束は三尺六寸、根には八目の鏑を入れ、矢數は三百六十三。すでに選ぶ吉日は、弘仁七年庚申二月八日に都を立つ。諸國の武士當千の兵共一騎も殘るところはなし。大臣殿の御勢は三十萬騎と記さるる。その外以下の兵ども百萬餘人と風聞す。都を立つて、その日は

八幡の御山に陣を取り、明れば津の國難波潟昆陽野に陣を取り給ふ。去る程に、王城の鎭守を始め奉り、衣冠を脫ぎかへ鎧を召し、せいれいみさの色の上には、夜叉羅神の形を現じ、雲に乘り霞に乘り、一つは國家を守らんため、または氏子を守護せんため、わが氏子わが氏子、形に影の添ふごとく先に立つてぞ守らるる。扨て神達の議によりて、神風涼しく吹きければ、筑紫に陣取る蒙古どもこの由を承つて、今度はまづ〳〵引けやとて、四萬艘に取り乘つて、蒙古國へぞ引きにける。扨てこそ天下も穩に國も目出度おはしませ。大臣殿は筑紫の博多に御陣を召され、奏聞申されければ、天下の繁昌世の聞え何事かこれに如かじとて、上下ざざめき給ふ。大臣殿には

筑紫の國司をたび給ふ。九國に住まんずる物憂さに辭退申されたりけれども、國の守のためなり在國せずは叶ふまじいとあつて勅使立ちければ、力及ばぬ次第とて、豐後の府に御所を立て、御臺所を都より請じ下し參らせ、さながら都に劣らず住ませ給ふ。また都には公卿詮議まち〳〵にて、蒙古が大將は四人と聞ゆるをせめて一人討ち取りてもあらばこそ、軍に勝ちたるしるしはあるべけれ。きういは二相のものなれば、何と思ひてか引いつらん。心の內も悟り難し。まづ高麗國へ打越え、七百六十六國を平げ、その後百濟國を攻め從へ、その勢を率し、蒙古を攻めんずること何の仔細あるべきとて、筑紫へ勢をぞ下されける。大臣殿も吉日を選んで、蒙國の討手に

向はせ給ふ。蒙古を攻めんそのために、新造の大船百餘艘えだ舟は數知らず。總じて船數八萬艘。蒙古は四萬艘にて向ひけるに、あら駑しや一倍ましてぞ向はれける。扨て大臣の御座船をば錦をもつて飾り立て艫舳に齋ふ神神に六十餘州の靈神達の齋垣鳥居榊は雲に光を交へつつ、ほうよかわ太鞁を奏すれば、身の毛もよだつばかりなり。卯月半に大臣は早や御座船に召されけり。御臺名殘を惜みて、同じ船にとのたまへども、思ひ寄らずとのたまひて、押しこそ止め給ひけれ。扨て舟どもの艫舳には五色の幣をはきたてて、神風涼しく吹きければ、ましんまかゐも恐るべし。昔の讐を引くときは神功皇后の新羅を攻めさせ給ひし時、神集めして向はれしも、かくやと思ひ

知られたり。

蒙國にありける蒙古ども二相神通の者にて天の色をきつと見て、討手の向くと悟をなし、潮境へ打出で防いで見んといふままに、四萬艘の船どもに、多くの蒙古が取乘つて、喚き叫んで押す程に、日本と唐土の潮境のちくらが沖へ押し出す。大臣殿の御座船をもちくらが沖へ押し出す。彼も恐れて近づかず。互に恐れて寄りもせで、五十餘町を隔てつつ、三年の春をぞ送られける。かかりけるところに、蒙古が大將りやうさう一陣に進み出で、われ等が軍の手段には霧を降らす習ぞ。霧降らせよといひければ。承ると申して、きりん國の大將船の舳板に衝つ立ち上り、青き息を吹き出す、如何なる術をか備へけん、

霧となつてぞ降りにける。はじめは薄く降りけるが、次第〳〵に厚くなり、月とも日とも辨まはず。虚空長夜となり果てて、一日二日にて霽れずして、百日百夜ぞ降りたりける。さしもに猛き弓取達も霧の迷にわろびれて、弓の本末をだにも知らざれば、引くべきやうこそなかりけれ。この霧ばかりに冒されて。滄波の水屑とならんこと憂かりなんとぞ歎きける。大臣殿は無念至極に思召し、今ならでは何時の時神の力を仰ぐべき。この夜の闇をはらして見んと宣ひて、潮をむすび手水と召され、南無天照皇大神宮その外日本六十餘州の大小の神祇各力を添へさせ給ひ、この霧霽らしてたび給へと、祈誓を申させ給ひければ、あら目出度や祈誓のしるし早やありて、伊勢

の國沖吹く嵐に、霧も程なく住吉の松吹く風も涼しくて、迷の闇も白山の雪より早く消えければ、何時しか鹿島楫取も悦の帆ぞ上げにける。大臣斜に思召し、いで〳〵軍を始めんとて、はし舟下ろさせ召されけり。わざと大勢は思ふ仔細のありとて、十八人を御伴にて蒙古が船へからせ給ふ。りやうさうぐわいすいこれを見て、蟷螂が斧と勇みつつ、矛を飛ばせ劔を投げ四方鐵砲放しかけ、天地を動かし攻めけれども、大臣ちつとも御騒なく、蒙古か船にぞかかられける。船の舳先につかせたる鐵の楯の面には般若心經觀音經金泥にてぞ書かれたる。そんせう陀羅尼の中よりも、しやや〳〵ひしやといふ文字が三とく不思議の矢さきとなつて、蒙古が眼を射つぶいたり。

不動の眞言にかんまん二つのぼじ（文字）劔となつて飛びかかり、多くの蒙古が頸を切る。　觀音經の名文に。（於怖畏難）おふゐきうなんといふ文字が金の楯となつて、蒙古が矢さきを防げば、味方一騎も手も負はず。　扨てこそ諸人力を得。　ちんご（陳愚）の合戰手をくだく、　大臣殿は御覽じて、何時の料ぞと仰あつて、鐵の弓の弦音すれば。　雲の上まで響き上り三百六十三筋の箭を殘りすくなく遊ばせば、りやうざう射討たれぬ。　ぐわすい腹切りぬ。　その外以下の蒙古ども、あるひは討たれ腹を切て海へ入つて死するもあり。　四萬艘に取り乘つたる蒙古多く討たれて、僅一萬艘になる。　さのみは罪になるべしとて、起請を書かせ助け置き、本地へかへさせ給ひて、　いや日本は軍に勝ちぬるとて、　八萬艘

のふなうちの喜び合ふこと限なし。

去る間、　大臣殿そのまま御歸朝あるならば、　目出度かるべき事どもを、　乳母子の別武を召され、この間の長陣にせいきをつくして覺うるなり。　何處にか島やある。　上りて身を休めんとの御諚なり。　別武承りはし舟下ろさせ尋ぬるに、　波間に一つの小島あり。　玄界島これなり。　この島を尋ね出し、　御敷皮を延べ、　睡眠ならせ給ふ。　大力のくせやらん、　寢入りて左右なく驚き給はで夜日三日ぞまとろみ給ふ。　その間に別武兄弟徒然さの餘りの物語をぞ始めける。　弟の別武のしんが申しけるは、　あら目出度や、この君先度は筑紫を賜はらせ給ひ、　上見ぬ鷲とおはせしが此度はまた多くの蒙古を亡させ給ひ、　日本六十六箇國

を他の妨なく賜はらせ給はん事よ。人の果報を願はばこの君のやうにこそと申す。兄の別武がこれを聞いて、あうその事よ。君は左様に富み給はば、我等はもとのままにて朽ち果てん事の口惜しさよ。いざこの君を爰にて我等が手にかけ申し御跡を一圓に知行せんと申す。弟がこれを聞いて。あら勿體なの御たくみや候。君の御恩を蒙りてこそ人となりし我等ぞかし。古の御恩を忘れ申し、我等が手にかけ申すならば、天命いかで遁れ候べき。よく〳〵案じ給へといふ。別武聞いて、扨ては汝は君と一體や。つひにこの事聞えなば、われ一人が科たるべし。よそに仇はなかりけり。和殿とあうて死なんとて、刀の柄に手をかけて、飛んでかからんとする。弟がこれを見

て、これはさながら物に狂はせ給ふか。實にも左様に思召し立ち給はば、たとへば殺し申さずとも生きながらこの島に棄て置き申して歸るならば、所は僅の小島にて、十日許りも御命の何にか長らへ給ふべき。別武聞いて、暫く打案じ、面白くも申したるものかな。さらば左様に仕れとて、痛はしや君をば玄海島に棄て申し。もとの船に漕ぎ戻り、如何に味方の軍兵。君は蒙古が大將りやうざうが放す矢を御着長の引合に受け止めさせしかども、薄手にて御座候ひし間。さりとも〳〵と頼をかけしまるしもなく、つひに空しくなり給ふ。御死骸をも陸に上げ、御臺所の御目にかけ度は候へども。諸神を齋ひ申したる御座船にて候ほどに、如何にとして入れ申すべきと思ひ。

痛はしながら海底に沈め申して候なり。扨てあるべきにてあらざれば、早う船ども出せと下知をする。味方の軍兵は偏に夢の心地して、われ劣らじと押し出す。總べて船數八萬艘一度に帆を上げ楫をとれば、天地も動くばかりなり。この聲ともに、大臣は夢打覺まし給ひて、誰かあると召されど御返事申すものはなし。こは如何にとおぼし、かつぱと起きさせ給ひて、邊を御覽ありければ。人一人もなかりけり。召したる船を見給へば、帆を上げてこそ押し出せ。扨ては別武が心替りを仕るか。たとへ別武こそ心替りをするとも、などや以下の軍兵等我をばつれて行かぬぞや。あの船こちへと宣へど。皆船どもの音高く、聞きつけ申すこともなし。せめて思ひの餘りに

や、海上に飛びひたつて息をばかりに泳がせ給へと、船は浮木の物なれば風に任せて早かりけり。力及ばず大臣は憂かりし島にまた戻り、其方ばかりを見送りてあきれて立たせ給ひけり。早利卽利が古海岸はたうに乘てられしも、これに似たりと申せども、それは二人にて、語り慰む方もあり。所は僅の小島にて草木も更になかりけり。蒼天廣う遠うして月の出づべき山もなし。朝の日は海より出でてまた夕日も海に入る。露の身は賴なや。夜更けて聞くも涙の音。岩間の宿をたのめてや、打臥す方も濡れまさる。稀にも言とふものとては、涙に流るる群鷗。渚の千鳥鳴く時は、猶また友も戀しくて、いとど明け行く夜も長く、暮れ行く日かげも遅かりけれ。露の

命を草の葉に宿すべきやうなけれども、なのりそつみて命をつぎ、憂き日數をぞ送らるる。痛はしとも中々に申すばかりもなかりけり。

去る間別武兄弟筑紫の博多に船を着け、喜の歸朝と風聞す。豐後の御所におはします御臺所の御喜中々申すばかりもなし。珍しき曲どもを相構へ、御入遲しと待ちさせ給ふ所へ、別武兄弟打連れてまづ御所さまへ參る。御臺所は御覽じて、あれは何れ御先の案内申すにこそ參りつらめと、人して聞召しつぐべきことを遲く思召され、自御簾眞近く御出あり、あら目出度や兄弟よ、何とて君は遲く見えさせ給ふぞ。兄弟の者ども謹んで暫しは御返事を申さず。怪しく思召され、重ねて如何にと仰せければ、

その時別武泪を流す風情にて、あら口惜しや候、申さんとすれば泪落つる。申さずば知召さるまじい。君は蒙古が大將りやうざうと申す者と押し並べて組ませ給ひ、二人ながら海底に沈ませ給ひて後、またも見えさせ給はねば、その思のみ深うして軍に勝ちたるしるしも候はず。さりながら御形見をば賜はりて候とて御着長とかねの弓御劍を添へて參らせ上ぐる。御臺この由を御覽じて、これは不思議のことどもかな。敵と組ませ給はんに、何時のひまに御形見を止めて海に入り給はん。前後不覺を申すものかな。あはれこの者兄弟を取つて威して拷問し、めし問はばやとはおぼせども、果敢なき女性の御身なれば心一つに下しつつ簾中深く入り給ひ、形見の物をめし

集め抱き着き給ひて流涕焦れ給ひければ、御前なかゐの女房達一度にわつと泣きければ、よその袂に至るまでしぼるばかりに哀なり。

その後別武多くの軍兵引き具し都へ上り奏聞申したりければ、大臣殿御歸朝なきその思のみ深うして偏に闇の如し。御父の左大臣御母の御臺所、らうたけ齢傾き盛の御子に遅るることは、枯木に枝のなき風情。つれなき命に換へばやと歎き給へど叶はず。その後内よりの宣旨には、大臣が歸朝するならば日本國をと思ひつれども、討たれぬる上力なし。誰にけう(孝養)やうを行ふべき。別武兄弟には筑紫の國司をとらするぞ。急ぎ罷り下り後家にみやづき大臣がけう(孝養)やう懇にせよとの宣旨なり。別武承り、あら

案に相違の宣旨や。日本國をと思ひてこそ君をば棄て置き申したれ。珍しからぬ筑紫へとてまたこそ下りけるとかや。

扨ても別武道々案じけるやうは、さもあれわが君の御臺所、天下無雙の美人にて渡らせ給ふに、風の便の玉章を參らせて見んずるに、うけひき給はば然るべし。そむき給ふものならば淵を尋ねてふしづけ申さばやと思ひすまし、玉章懇にこしらへ、御臺所へ參らせ上ぐる。御臺所は都よりの御文と聞召し、急ぎ披いて御覽ぜらるるに、思の外に引きかへて、別武が方よりの玉章なり。餘りの事のうたてさに、二つ三つにひつさいて彼處へかばと棄てさせ給ひ、さればこそ君をば別武が手にかけ失ひ申し

て候なれ。今は命も惜しからずと御守刀を召し寄せ、自害をせんとし給へば、乳母の女房が參り、御道理にて御座候。さりながら命を全うし給へとて、御守刀を奪ひ取り、これ程に不得心なる者なれば、御返事なうしては如何なることをかたくむべきに、とく自に御任せ候へとて、乳母の女房が側よりも返事をする。三とせの後の新枕は、われに限らぬことなれば、すまふ草もとりどりに引けばや靡く習なり。見えんことはやすけれども、君の蒙國へ赴の時、宇佐の宮に參り、千部の經を書き讀まんと大願をかけ參らせ、七百餘部は書き讀みぬ。二百餘部は書き讀まず。この宿願成就の後は、兎も角もと書き止め御返事なりとてかへす。使御返事を賜はり、急き立ち歸り別

武殿に參らせ上ぐる。別武披いて見奉り、あら目出度や。扨ては靡かせ給ふべきや。この御宿願成就の間は、如何程かあるべきと百年を待つ心地して、明し暮して居たりけり。

その後御臺所數の女房達を集めさせ給ひ、つれなく命のあればこそかかることをも聞くなれば、今は淵瀬に身を投げ跡かきくれたく思へども、君が面影の夢現に立ち添ひ給ふ時は、死したる人とは見え給はず。戀は祈のものと聞く。大臣殿このまま御歸朝なきならば、われも身を投げ空しくなるべし。さあらん時に御形見を山野の塵となさんより、尊き人に奉じて跡をとはせ申さんとて、御手慣の琵琶琴和琴笙篳篥草子の數を取り集め、尊き人に

奉ぜちる。四十二疋の名馬ども皆寺々へ引かれけり。三十二疋の鷹犬のきづなを切つてぞ放されける。この程ありし鷹師達をも思々に散されけり。十二てうの鷹どもの足緒を解いてぞ放されける。十二てうのその中に、緑丸と申して角鷹のありけるが、君の名殘を慕ひてや立ち去る方もなかりけり。御臺所は御覽じて、あれは君の秘藏の御鷹なるが疲にのぞんであればこそ、羽を垂れ平伏し居たるらめ。夫れ〳〵餌食を與へて放させ給へと仰せけれども、何れも女房達にて餌を飼ふやうを知らずして、飯をまるめてそなふる。この鷹嬉しげにて飯をくはへて飛び上り、三日三夜と申すには大臣殿の御座ある玄界が島に飛び着きぬ。飯をば岩の上に置き、わが身も側なる

岩に羽を休めてぞ居たりける。あら痛はしや、大臣殿は唯うつせる影の如くにて、岩間の宿を立ち出で汀の方を御覽ずれば、この程見慣れぬ鷹一もと羽を休めてぞ居たりける。大臣殿は怪しく思召し、暫しただずみ御覽ぜらるるに、昔手慣れし緑丸なり。餘りのことの嬉しさに急き近づき給ひて、やあ大臣がこの島にありとは何とて知りて來りたるぞ。實に鳥類は必ずこつうありとはこれかとよ。扨てもこれなる飯は御臺所の御業かや。この飯をたばんより、など言傳の文はなきぞ。豐後に未だましますか。都へ歸り御上りか。いかに〳〵と問ひ給へば、心苦しき風情にて泪ばかりぞ浮べける。大臣殿は御覽じて、今これ程の身となりて、この飯服してあればとて、幾程

命の長らへん。鳥類なれどもあの鷹の見る所こそ恥しけれ。食はでもありてと思召すが、さもあれ緑丸が萬里の涙を分け越えたる志の切なきに、いで〳〵さらば服せんとて、御手をかけさせ給ひければ、嬉しげにてこの鷹が羽をたたき爪をかき、御膝のまはりに平伏して、ものいはぬばかりの風情なり。大臣殿御覧じて、あら便もなや緑丸、汝が見る如く木の葉だにもなき島なれば、思の色をも書きやらで如何がはせんと仰せければ、その時この鷹雲井遙に飛び上る。暫しもかくて候へかし。汝は早やさはなくして緑丸何處より取りて歸るかと仰せければ、來りけん楢の柏葉含みて大臣殿に奉る。蘇武がこゝとくの玉章を雁の翼にことづてしも、今こそ思ひ知られたれ。

我も思は劣らじとて、御指をくひ切り木の葉に物をぞ遊ばしたる。短の落葉なりければ、唯歌一首書きつけて、押したたみまろめて、すずつけに結ひつけて、早や歸れとありしかば、嬉しげにてこの鷹の三日三夜と申すには豐後の御所に參りけり。まだ早朝のことなるに御臺所はえんぎやうだうして御座ありけるが、緑丸を御覧じて、汝は何れより來りたるぞ。虚空を翔るものなれば渡らぬ所よもあらじ。ものいふものと思ひなば、大臣殿の御座どころをもなどか申さざるべきぞと、御泪にむせばせ給ふ。その時この鷹御前近く參り、すずつけをふり上げて居直りたり。怪しめ御覧ありければ、木の葉に血のついたるあり。急ぎ披いて御覧ぜらるるに、古の人の言傳

に一首の歌にかくばかり。飛ぶ鳥の跡ばかりをばたのめ君、うはの空なる風の便を。と、かやうに讀ませ給ひつつ、扨てはこの世に大臣は未だ長らへ給ふぞや。これこそ命のあるしるしなれ。紙なき方にてあればこそ、木の葉にものをば遊ばしたれ。硯と筆墨なければこそ、血にてものをば遊ばしたれ。いざや硯を參らせて、思召されん言の葉を委しく書かせ申さんとて、紫硯に紙筆そへ、御臺を始め奉りその數々の女房達、われ劣らじと文を書き、取り集めたる卷物はよしなき業を覺えたり。懇に拵へすずつけに結ひつけ、構へて今度は疾く參れ綿丸と宣ひて、又飯をまるめてそなふる。この鷹嬉しげにて飯をくはへ、羽打延べて飛びけるが、この間の疲にせいきをつくした

りけるに、紫石の習にて、潮の滿干に從つて時々重くなる程に、引かれて次第に下りけり。今はと思ひ飛びけるに、多くの紙と文ともに、いや露を含みて重くなり空しくなるぞ無慙なる。島にまします大臣殿、鷹だにも今は通はねば何に慰め給ふべきぞや。この鷹の又も參らぬは、もしも別武が方へ漏れ聞え殺されてもあるやらんと、今はせいきもつき果て、時々通ふ息だにも限の色と見え給ふが、猶し命の捨て難くて、みるめ青海苔つまんとて、汀へよろぼひ出で給へば、浪打ちかくる岩間に鳥の羽少し見ゆる大臣怪しく思召し、急ぎ引き上げ御覽ぜらるるに、この程通ひし御鷹なり。餘りのことのうたてさに、彼處にどうと轉び給ひて、鷹を膝にかきのせ、あらむさ

うの有様やと委しく體を見給ふに、沈むも理なり、紫硯紙筆その數々の文どもは潮に亂れて見え分ねども、心靜に御覽ずれば、とりどりにこそ見えにけれ。これや女の果敢なきとは。紙筆墨だにあるならば、これ程の巖にて如何程も物は書くべきに、硯を添ゆるは何事ぞや。扨てもこの鷹が鬼界高麗契丹國へも搖られず、この島に搖られ來て、二度物を思はする。必ず生を享くるもの魂魄二つの魂あり。魂は冥途に赴けど、魄は浮世にありとかや。我も命のつづまりて冷を限のことなれば、冥途の道のしるべ教へてつれて行けや綠丸。我をば誰に預けて、扨て何となれと思ふぞとて、この鷹にうちかかり流涕焦れ給ひけり。かの大臣の御歎君に見せばやとぞ思ふ。

これは島にて大臣殿の御歎。豐後の御所におはします御臺所の御歎中々申すばかりもなし。せめて思の餘りにや、宇佐の宮に參り、七日籠り願書を書いてこめさせ給ふ。歸命頂禮宗廟神、もしも大臣殿歸朝の笑を含ませ給ひ。二度御目にかかるなら、宇佐の造營申すべし。玉の寶殿みがき立て、金の扉をのべひらき、瑠璃の高欄やりわたし、硨磲の擬寶珠みがき立て、砌の砂には金を交ぜ、壁には七寶鏤め、池には玉の橋を架け、齋垣はくわうようらんけいし、廻廊と拜殿四つの樓門玉のまくさをみがくべし。とうりやうの棟をうきやかに、寢殿廂をひろびろと、いかにもやうらく結び下げ、けまんのはたは雲を分け、しせん幣帛獅子狛犬金をもつてみがくべし。大塔と

朱楼をいかにも高く雲の上に光を放つて造るべし。四季の祭禮別臨時花の御幸をなすべきなり。くほんの鳥居を高く立て、極樂淨土を學ふべし。極樂外に更になし。しんのしよきよをしやうとうす。歩を神に運べば、神道よりも佛道に歸する方便これなり。そのかいていのゐんもんは、今も朽ちせず新なり。ほうさいかみにいたせばほだいのかてをつつむなり。抑神と申すは眞俗諦を姿とし、正直たるを心とす。塵の内に交り我々に縁を結べり。本願限あるならば、我をば漏らし給ふなよ。敬つて申すと書き止めて、くるくるとひんまいて神前にどうと置き、七日七夜まどろまで、精進にぞ祈らるる。まことに神の誓にや。いきの浦の釣人釣るに沖へ出でたるが、

南の風に放たれて、北の澳へ流れ行き、大臣殿の御座ある玄界島に吹き着くる。その後舟人は島蔭に上り息をつき、彼處を見れば異形なる生物ひとり立ち出づる。いとど物恐ろしき折節、大臣殿を見つけ申し、彼方此方へ逃げ去り、左右なく近づき申さず。大臣殿は御覽じて、あら何ともなや。扨は某をば人間とは見ざりけるや。何となり行く事どもぞと御泪に噎ばせ給ふ。泪を流し給ふ御色を見て、舟人どもがちつと心が剛になつて、さもあれ汝は如何樣の生物ぞと問へば、大臣嬉しく思召し、ありのままにも語つて聞かせばやと思召すが、いやくもしも別武が方の者にてありもやせんと思召し、僞り斯うぞ仰せける。これは一と

せ百合草若大臣殿蒙國の討手にお向きの時、船夫に取られ申し、罷り向つたる者なるが、不思議に舟に乘り後れ、大臣殿御歸朝の後は早や三とせになるかと覺え候。然るべくば御情に我をば日本の地へ着けてたべかしと仰せければ、舟人どもが承り、あら不憫の次第やな。公事する身程何はにつけ物憂き事の多いぞや。人の上とも思はねば、助てさらば戻らうずるが、風の心を知らぬなり。我人の果報目出度ば順風願に滿たすべし。有とも運が盡き果てば、猶しも遠く放たるべし。唯果報を願ひ候へ。大臣實にもと思召し、潮をむすび手水を召され、あら怨めしや。何とて日本の佛神は我をば棄て果て給ふらん。觀音經の名文ににふを大かいけしこくふうすいごせんばう

へうだらせつ、たとひせんばうへうだらせつの國に赴くと、も、我一人が祈念によつて、本地の岸へ着けてたべと祈念申させ給へば、まことに佛神も不便に思召さるるか、八大龍神浪風とめ俄に順風吹き來る。帆柱の蟬口に八大龍神ことごとく面を並べ座せられたり。舟舳先には不動明王の降魔の利劍を提げて金剛けんこのさくの繩惡魔寄せじと守護せらるる、含滿二つの御眥、艫には廣目增長天いしやな天大くわう天たうせん天ふう天すい天くわ天とう雨風浪を靜めんため上海下界の龍神、邪神のとくを止めて、夜日三日と申すには、筑紫の博多に吹き着くるありがたしとも中々に申すばかりもなかりけり。かくて大臣殿は御舟よりも上らせ給ふ。舟人申しけるや

うは、これまで着けたる忠に暫しみやづかひ恩を送れと申す。大臣實にもと思召し、習はぬ業をし給ひて恩をぞ報じ給ひける。國内つうげのことなれば、別武の大夫が傳へ聞き、いきの浦の釣人が興がるものを拾ひ來て養ひ置くと傳へ聞き、具して參れと御使立つ。その比靡かぬ草木もなし。やがて具してぞ參りける。別武立ち出でつくづく見て、これは興がる生物かな。人かと見れば人にてもなし。鬼かと見れば鬼にてもなし。唯餓鬼とやらんはこれかとよ。我に暫く預けよ。都へ具して上り物笑の種となさんとて門脇の翁に預け、やがて扶持をぞ加へける。かの門脇の翁と申すは、大臣殿の御内に年頃召仕はれし者なれども、何時その程に引きかへて、御せいも少

く色黑く、瘠せ衰へさせ給ふありしにかはる御風情をばいかでか見知り申すべき。されども情深き夫婦にて、あらむざうと瘠せ衰へたる餓鬼やとて、別して扶持をぞ加へける。ある夜の寢覺に祖父が祖母に語りけるは、やあ如何に祖母御前、先祖の君大臣殿蒙國の討手に御向きあつて、またも見えさせ給はねば、その思のみ深うして、漫に年も寄るぞとよ。扨ても御臺所は國府のちやうやにましますよな。祖母この由を聞くよりも、さればこそとよその事よ。別武殿のお御臺へ心をかけ給ひ、御玉章のありしかども、更に靡かせ給はねば、無念至極に思召し、この四五日がさき程に、まむわうが池に生きながらふしづけ申しぬると聞く。これにつけても憂き命つれなく今

に長らへ、かかることをも聞くやとて、せきあへずこそ泣きにけれ。その後祖父が聲として、やあ如何に祖母御前、思ふ仔細の候に今より後はいま〳〵しうな泣いそとぞいひたりける。祖母この由を聞くよりも、あはれ實に世の中に心強きは男子なり。祖父がやうなるつれなしこそ主の別も悲まれ。我等昔の御情唯今のやうに思ふとて、またさめざめと泣きにけり。祖父聞いて、あらやさしの祖母御前や。左程に君を大事に思ひ申さば、物語して聞かすべし。構へて祖母御前口ばしきくな。それを如何にと申すに、別武殿の後見の忠太は翁が甥にてある間、御臺所のふしづけられさせ給はんことを祖父がかねて承り、如何はせんと思ひ我等が愛子のひとり姫御臺と御同年に

参りあふ、御命に替るべきかと尋ねてあれば、姫は斜に喜うで男子女子には限るまじい。御主の命に替らんこそ望にて候へ忍びやかにと申す程に、祖父餘りの嬉しさに御臺所と號し、まんわうが池に沈め、姫が居たる帳臺に御臺を隱し申したり。形見はこれにあるぞとて、數の形見を取り出して、祖母が手にこそ渡しけれ。祖母は形見を取り持ちて、これは夢かや現かや。君を助け申すこそ歎の中の喜なれ。然れとは申せども、人間に限らず生を享けたる類の子を思はぬはなきものを。三界一の獨尊釋迦牟尼如來だにも御子の羅喉羅尊者をばまた見つけりと說き給ふ。こしつてうは子を悲みしゆらのなつきはこの角を立つる。夜の鶴は子を悲み連理の枝に宿らず。野牛

子牛を甜り野外の床に臥すと聞く。生きとし生き生を享けぬる類の子を思はぬはなき物を。わが身を分けしひとり姫、主の命に替へしこと、恨とは更に思はねど、あり惜しの姫やとて、流涕焦れ歎きければ、祖父もともに泣く時ぞ、大臣殿は聞召しともにつれて忍び音のせきとめがたき御泪やる方なうぞおはします。唯今も立ち出で、これこそ古の百合草大臣と名乗つて聞かせ夫婦のものに喜ばせばやと思召すが、暫しと思ふ所存にて、時節を待たせ給ふ。

すでにその年打過ぎ新玉月になりければ、筑紫の在廳馳せ集り、弓のとうを始め、別武殿を祝ふ。去る間別武世にあり顔なる風情にて、痛はしや大臣殿には、御顔にも

御足手にも、さながら苔のむし給へば苔丸と名づけ、矢取の役にぞさしにける。大臣殿は弓場に立ち出で給ひ、爰にて運をためさばやと思召し、ここなる殿の押手の顫ふは下手げなりとさんざんに悪口し給ふ。別武聞いて、やあ何時汝が弓を射習ひてさかしらを仕るぞ。もどかしくば一矢射よ。射たることは候はねども、餘りに人々の射させ給へる御姿の醜き程に申して候。それ程汝が射ぬ弓をさかしらを仕るか。唯今弓を射じと申さば、宇佐八幡も御知見あれ、某が手にかけ直に切つて棄つべし。とつく射よと責めかくる。御諚の重く候程に、一矢射たくは候へども、但し引くべき弓が候はず。やさしく申す者かな。強き弓の所望か。弱き弓の所望か。同じくば強き

弓の所望にて候。易き程の事とて、筑紫に聞うる強弓を十張揃へ參らせければ、一二三張を押し並べはら〳〵と引き折つて、何れも弓が弱くして事を缺きぬと仰せけり。別武これを見て、彼奴は曲者かな。所詮古大臣の遊ばしたるかねの弓箭を射させて見よ。最も然るべきとて、忝も宇佐八幡の御寶殿に籠め奉るかねの弓矢を申し下ろして、大臣殿に奉る。いつしかもとよりの御手執、かかりの松に押し當て、ゆらりと張つてすびきし、かねの御てうづを打番はせ給ひ、的には御目をかけられず、別武の太夫に御目をかけ、大音上げて仰せけるは、如何にや九國の在廳よ、我をば誰と思ふぞ。古島に棄てられし百合草若大臣が、今春草と萌え出づる。道理に任せて我や見

ん。非道に任せて別武や見ん。如何に〳〵とありしかば、大友諸卿松浦黨一度にはらりと畏り、君に從ひ奉る。別武も走り下り降參なりと手を合する。いかでか許し給ふべき。松浦黨に仰せつけ、高手小手に縛しめ、かかりの松に結ひつけ、自身立ち出で給ひて、汝の舌の轉にて我に物を思はせたる因果の程を見せんとて口の内へ御手を入れ、舌を摑んで引きぬいて、彼處へかばと投げ棄て、頸をば七日七夜に引首にこそせられけれ。上下萬民これを見て、つらくあたりたる者の果を見よやとて、惡まぬ者はなかりけり。弟の別武のしんを同じごとく罪科あるべかりつれども、島にて申せし情のことを有の儘に申せば、さらば汝をば助くるとていきの浦へぞ流されける。

その後に大臣殿國府の廳屋に移らせ給ふ。御臺この由を聞召され、偏に夢の心地して袂を顔にあてながら、泪ともに出で給ふ。逢はぬがさきの泪は理なれば道理なり。逢うての今の嬉しさに言の葉も絶えてなかりけり。何のつらさにわが泪押うる袂にあまるらん。

その後宇佐の宮の御宿願の由、御物語あれば、大臣斜に思召し、立てさせ給ふ。大願は事の數にて數ならず。金銀珠玉を悉く鏤め給ひける間、ありがたしとも中々に申すに及ばざりけり。

その後、いきの浦の釣人に尋ぬべき仔細あり、急ぎ參れと御使立つ。いきの浦の釣人は如何なる憂き目に逢ふべきと、ただ鬼にかみとる風情して、國府の廳屋に參り、

庭上に畏る。大臣立ち出で給ひて、あら珍しの舟人や。命の主にてある物が、何しに恐を申すぞ。それへ〳〵と仰あり。嬉しきをもつらきをもなどかは感ぜざるべきと御盃にさし添へて、壹岐と對馬兩國を漁人に下し給びにけり。門脇の翁を召し出させ給ひて、筑紫九箇國の總政所たび給ふ。翁が姫のために、まんわうが池のあたりに御寺を建て給ひて、一萬町の寺領を寄せさせ給ひけるとかや。綠丸がけうやうに都の乾に神護寺と申す御寺を建て給ひけり。鷹のために立ちたれば扨てこそ今の世までもたかをさんとは申すなり。大臣殿の御諚には、筑紫に住居をするならば、物憂き事もありなんと、御臺所を引き具して、都へ上り給ひけり。網代の輿は十二挺、張輿

10141

は百餘挺、大友諸卿松浦黨御供を申さるる。昨日までは賤しくも苔丸といはれ給ひしが、今日は何時しか引きかへて、七千餘騎を引き具して都へ上り、父母に對面ありて後、やがて參内申さるる、帝叡覽まし〳〵て、いかに珍らし、先度別府が上り、討れぬる由申せしを、まことぞと思ひて、勅使を下すこともなし。不思議の命長らへ、二度參内すること、一眼の龜のたまさかに浮木に逢ふが如くとて、日本國の將軍になさせ給ふぞありがたき。さてこそ、天下泰平に、國土安穩壽命長穩なりとかや。

舞の本 終

明治三十七年十月二十三日印刷
明治三十七年十月二十六日發行

舞の本
定價金壹圓五拾錢

著作者　上田萬年
發行兼印刷者　金港堂書籍株式會社　東京市日本橋區本町三丁目十七番地
印刷代表者　右社長　原亮一郎　東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地
印刷所　帝國印刷株式會社　東京市京橋區築地三丁目十五番地
賣捌所　各府縣特約販賣所

複製不許

I+013

IH013

終